第三條

物品ニ輸出税ヲ課セサルヘシテ此約書實施ノ後ハ日本ニ於テモ亦合衆國へ向ケ輸出スル合衆國ハ日本ニ向テ輸出スル物品ニ輸出稅ヲ課セサルヲ以

第 四 個

第五條

スコトバ固ヨリ雙方ノ識認スル所タルヲ以テ此ニ之ヲ明言ルコトバ固ヨリ雙方ノ識認スル所タルヲ以テ此ニ之ヲ明言日本沿海貿易統轄ノ權利ハ獨リ日本政府ノミニ屬スル者タ

第 六 條

則ニ隨と其舶載スル物品中幾部分タリトモ共望ニ任セ陸揚然レドモ日本開港場ニ來着スル合衆國ノ船舶ハ日本海關稅

第七位

往貿易ノ爲メニ開ク可シ外ニ更ニ二港ヲ此約書實施ノ日ヨリ合衆國人民幷ニ商船來外ニ更ニ二港ヲ此約書實施ノ日ヨリ合衆國人民幷ニ商船來本政府ハ互相ノ理ニ基キ左ノ事ヲ讓與ス即チ從前開港揚ノ運上規則及ヒ其他ノ諸規則ニ關シ讓與スル所アルヲ以テ日命衆國ハ上文第一條ニ約スルカ如ク日本輸出入品運上目錄

雙方協議ノ上決定スヘシ 但シ二港中一港ハ下ノ關タルヘシ而シテ他ノ一港ハ此後

第 八 條

第五條ハ必用ナラスト認ムルヲ以テ右條款ハ此約書實施ノ兩國間ニ結ヘル安政五年卽チ西曆一千八百五十八年ノ條約

日ヨリ廢棄スヘシ

第九级

可シ皆廢棄ス可シ且ツ此約書ハ兩國間現存條約ノ一部分ト爲スヲ明掲セサルモノニシテ此約書ノ條款ニ牴觸スルモノハ悉ヲ明掲セサルモノニシテ此約書ノ條款ニ牴觸スルモノハ悉

第十條

『或ハ現存條約ノ重修ヲ取結ヒ右現行ノ時ニ至リ實施スへ��約書ハ日本ト他ノ締盟各國ト現實此約書ト均シキ所ノ約

シ

シノ日ヨリ十五ケ月以内ニ成ル可ク速ニ華盛頓府ニ於テスへノ日ヨリ十五ケ月以内ニ成ル可ク速ニ華盛頓府ニ於テスへ此約書ハ批准ヲ要スルモノトス而シテ其交換ハ此約書調印

给スイノのでは、日本のは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のでは、日本のは、日本のでは、

華盛頓府ニ於テ

明治十一年七月二十五日

吉田清成(印)

西曆一千八百七十八年七月廿五日

ウヰリアム、ヱム、ヱウワーツ(印)

第三節 對英交涉 附對葡交涉

三一四 明治十一年五月十日 寺島外務卿宛

明治十一年別信第四號

對英交涉開始ニ付報告ノ件

H1

共先此段不取敢御通知におよひ置候也接英國外務卿え面會の積に御座候就ては右事件に付書翰類後英國外務卿え面會の積に御座候就ては右事件に付書翰類以別信甲進候兼て御指令相成居り候稅權回復の儀に付今午

明治十一年五月十日

全權公使 上 野 景 範

外務卿 寺島宗則段

二一五 明治十一年八月六日 上野駐英公使宛

交渉經過問合ノ件

邓十一號上野公使別信案 八月六日附

参考にも差支候間不取敢去る三日別紙寫の通電信を以て及等も中越候に付獨り貴君而已何たる報知無之各政府の意向所之と存候得共追々在外我公使よりも夫々彼政府の模様無之右は其國外務卿伯林會議へ相赴候事故等を以ての事に無之右は其國外務卿伯林會議へ相赴候事故等を以ての事に無之右は其國外務卿伯林會議へ相赴候事故等を以ての事に以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は條約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申進候然は係約重修一條に付過る五月十日附を以て以別信申

中越無之旁以て前文通申入候次第に候御申越の條々承知別に逐一細答不致候私信中改正一條は別海中越の條々承知別に逐一細答不致候和信中改正一條は別御問合候儀に候條爾後追々御報知可相成候其他五六七號

註 八月三日上野公使宛ノ電信ナルモノ見當ラ

三一六 明治十二年月十八日 寺島外務卿宛

F) + 税権回復交渉ニ關スル意見具申竝ニ交渉經過報

附屬書一 明治十一年五月四日上野駐英公使ヨリ英國務

税權回復ノ必要開陳ノ件

一 明治十一年五月十四日上野駐英公使ョリ英國外務卿宛書翰寫

改正稅目案送付ノ件

三 明治十一年五月十六日英國外務卿ヨリ上野駐

右ニ對シ回答ノ件

細目ニ至リ情質ノ盡サ、ル所ヲ辨明シ或ハ自家ノ內情ヲ訴(マトン) 張スル人民ノ耳ニハイカニモ穩當ヲ得ザル様相聞得加之訓 爲ニ輸入稅ヲ增加シ內國ノ產業ヲ獎勵センカ爲ニ輸出 權ヲ我ニ回復スルハ固ヨリニ候得共國費ノ不足ヲ補 ヲ廢スル等ノ个條ハ彼ノ便益ト認ム可キ 以テ正理ニ感元スル様相認候儀實ニ緊要ニ有之候然シテ其 リ猶知友ノ者エモ内談イタシ候ニ當國ノ如キ自由貿易ヲ主 廢シ前後ノ文體稍保護稅法ヲ設用セント欲スル趣意ニ相當 訓狀中ノ意味ヲ大別イタシ候處獨立ノ國權ニョツテ製稅ノ(マトン) スハ素ヨリノ職責ニシテ且銀テ冀願スル所ナレハ篤ト勘考 初ヨリ 駐劄公使談判上ノ論材トシテ相貯置候方便利ニ有之論談 請求ニ應セハ酬ユルニ此便益ヲ以テスル等時機ニ應シ總 如キハ駐劄公使應接ノ手段中ニ相任且新港ヲ開キ輸出稅 ノ如キハ他日世論ノ因據トナル可キモノナレハ宜シク天 内達其他一切ノ書類御送致相成拙者微力ノ及フ丈ケヲ盡 :關稅重修一件ニ付二月九日附別信第壹號ヲ以テ訓狀併 條約改正 輿論ニ基キ其公理ノ歸スル所ヲ可成短正ニ論下シー讀 我ノ可附與便益ヲ彼ニ 一件報告第一號 知ラシ ムルハ恰 モノナレハ彼若我 十二月九日到 モ兩軍相對 ニハンカ 一般ヲ

ヲ 下 明イタシ候得ハ體裁モ極メテ宜シカラント存候ニ付襲ニ巴 方今我國ニ最緊急ナル事情ヲ詳ニ辨明スヘキ旨拙者ニ命令 シニ我國內政上理務ノ都合アリテ今日迄遷延スルニ至レリ 憾ニハ存候得共最早無據儀ニ付本文ノ儘ニテ取扱候事ニ相 配達相成候後ニテ時機ニ相後レ今更御聞屆難相成趣實以遺 省キ百端内國ノ情實ヲ哀訴スルハ駐劄公使ノ口上ヲ以テ說 屬シ頗ル交際上ノ文體ヲ失候樣被考候ニ付斯ノ如キ語句 シ然シテ日英間條約ハ千八百七十二年ニ於テ改正ノ期ナリ ビユリーエ面會一先閣下御下附ノ訓狀寫ヲ出シテ展讀ニ附 萬事打合相濟候間直ニ歸英五月十日外務卿ロルド、サリ 決然シテ當國外務卿エ可差出公翰ノ文案丼ニ着手ノ順序等 文義更正方相伺候處右訓狀寫ハ巳ニ在日本各國公使等エ 理府エ出張鮫島公使トモ打合同氏ョリ電報ラ以テ訓狀中ノ ラス尤訓狀中國費ノ多端ヲ訴ユル如キハ所謂泣告ノ言辭 帷幕ノ事ヲ敵ニ通知スルト一般決シテ策ノ得タルモノニ非 基キ公然條約改正ノ儀ヲ英政府ニ通知シ然シテ其改正 ヤ其改正ノ用意整頓セルヲ以テ現在條約中ニ掲載ノ權理 セリ其事情ノ大意ハ書翰ニ認メ爰ニ持參シタレ 意ノ盡サ ル所或ハ卿疑問ノ廉アラハロ上ニ テ辯解 フ ス

害甚大ナリトス亦訓狀中ニ輸出稅ヲ廢スル 行ハルルハ直ニ當國商民ノ爲ニ直接ノ影響ヲ來タ ハ是ヲ以テ國家理財ノ便ヲ得ント ナラス一般自由貿易ノ國是ニ反シ實ニ一難問タル趣ヲ述ト雖モ此度ノ問題ノ如キハ當國ノ爲ニ損益相償ハサルノ固ヨリ英政府ハ日本ノ爲ニ萬事ノ進步ヲ計ルハ好ム所ナ 八日 答ルニ元來我政府ノ要求スル眼目ハ固有ノ國權ラ回 ノ實況ハ當國ヨリ輸出スル物品夥多ニシテ日本ニ保護法 シ日本ノ爲ニ甚痛ム可キ事ト云ザル 1 テ 本ョリ輸入スル物品少ナキヲ以テ夫ガ爲ニ 一型材ノ 一ノ商 如シ然ラハ現ニ保護稅法 ルニ重ニ日本政府ノ緊要ナリト 手渡セシニ卿稍久シク是ヲ査閱シテ曰ク今回條約 保護自由兩法ノ得失如何ヲ說諭セラレ = 法上ニ害アルヤ古來此國ニ リ外交ノ初日 | 語ヲ乞ヒ /便ヲ得 シ趣ヲ述ベ即別紙(イ印)ノ書翰 セテ外國品ノ輸入 いセラレ ニ於テ各國交通ノ規法ヲ不辨 タル ヲ設用スル スル 制税ノ權ヲ我ニ維持 ヲ得ス且日 於テ實驗セ ハ主義大ニ其目 ルノ事アレ ヲ モノニシ タリ ハ輸入税 得ル所 セ 、シ其損 英間 ントス ŀ シ 所 テ抑 復 モ 當 商 尠 的ナ ヺ ス

ヲ 業ヲ勵奬シ其結果ニョツテ各製造所ノ盛大ヲ至セシ後ノ 英國ノ領地中ニモイマタ全ク保護法ヲ棄却セス只英ノ本國 法ノ實況ニ從ツテ得失ヲ異ニスルガ故ニ現ニ今猶歐米其他 場合ニ至ラン亦保護自由ノ兩法ハイツレモ其國ノ時勢ト 天下ノ公道ヲ不顧時ハ終ニ弱國ハ强國ト ハ保護自由 過當ニ非ラサル事明ナリ ント望 、ミ自由貿易ノ適當ナルモ往日保護法ヲ設用シテ内國ノ ታ 疑ヲ容レス卿ノ言ノ如ク英國ハ日 以テ其地ニ保護法ノ行ハル、 ノ權内ニ屬スルヲ以テ政府ハ實地商況ノ如 シテ日英間通商上ニ障碍ヲ來タス レバ不利ナリ リ云へハ日本ハ英國ヨ ハ今度條約改正ノ機ニ臨ミ此製稅ノ 4 「ノ兩法其適宜ナル ハ 面目ヲ改メタルハ策テ卿等ノ我ニ 國權上 是一般各國ノ專有スル トシ斯ノ如ク自國ノ利ノミヲ五 ヨリ云 府ハ專ラ力ヲ内國開 、右製稅ノ權我手ニ歸シタル ハ勿論情實上 リ輸入品多キヲ以テ保護法ヲ行 モノヲ選定スル ハ英國ノ不利ナリ 本エ輸出スル 如キ不相當 - 交通シ能 ヨリ論シテモ シテ巳 / 權ヲ我ニ 何 ハ ラ所 ラ量酌シ 固 二計ツテ シ賜 卜云 物品 3 ハサ ij 分ナキ ル 多キ 我政 以上 決 > \sim 我 テ シ

貿易ノミヲ適當ナリトシ能ハサル趣ヲ論シ其他亦外交上 税ハ茶ノ量壹パウンドニ付六ペンスヲ課ス其市價凡壹シ タリ是則日本ノ爲ニ通商ノ繁盛ヲ計リシ一證ナリト ノ及フ丈ケハ辯解イタシ候然ルニ卿亦云ク當國ニ於テ曾テ 八如此日 ノ語氣ナリシ)拙者ハ是ニ答ルニ茶ハ曾テ人生ニ必用 木 時ニ當ツテハ 非等ト等ヲ同 ト一般歐洲 シ國費ノ多端ヲ不厭シテ政府ノ意ヲ用ヒタル ク近年俄ニ人民ノ體面ヲ一變シ諸事 物二對 認メラレス所謂奢侈品目中ニ屬スルモノトナシ ト條約ヲ収結タル時分ノ茶ノ輸入稅ハ方今其半ヲ減シ ハ是ヲ以テ何 平常月 セラル ナ ルヲ以テ現ニ五割ノ高稅ヲ拂ニ シ何故ニ輸入税ヲ増加セントスル歟ト云ハン計 本産物ノ爲ニ輸入税ヲ減セシニ日本政府 ヲ用ヒサル 用鎖末ノ 各國イツレ フシテ是ヲ用ユ 至レリ然リト雖モ方今當國ニ於テ其輸入シテ是ヲ用ユル者益多ク稍日用不可缺ノ ノ國ニモ適當スルモ 可カラサル 自由貿易ノ主義ニ從ヒ或品ニ對 物品ニ至ル迄多ク外國 モ高税ヲ課セリ漸ク近年ニ モノアリ Ħ ト云難シ則我國ノ ニ歐洲文明ノ風習 故二一概二自由 ル我國方今 ノ輸入ヲ仰 所以等拙者 >酒煙草 ス英國 (英政 ッテ シテ ァ ノ =

迄ニ達 卿微笑シテ曰ク實ニ然リ乍併日本ニ於テ輸入稅ヲ增加スル シテ辭 意大ニ當國ノ國是ニ反悖スルヲ以テ猶幾度モ談合可致只其 就テハ日本政府ニテ凡何程迄ニ輸入稅ヲ增加可相成歟粗其 等ノ報告ヲ得内閣ノ衆議ヲ盡シ候上 内見ニ可入旨ヲ約シ其他各様ノ談話凡五十分時間 大體ヲ知ルヲ得ハ内閣ニ於テ評議ノ一助ト可相成尤此儀 一二回ノ談判ニテ決局ニイタル可キ事柄ニ無之且訓 製稅ノ 可シトノ事ニ有之候然ル 現ニ當國ノ商民ニ多少ノ損害ヲ蒙ル事ナレ セントスルモ英國ノ茶ニ於ル如キ過稅ハ課セサル ル事アリ今 求ノ情實ニ於テハ尤ナル次第ニ付可成速ニ相運候樣注意 ノナレハ近來物價ノ騰貴ニ從ヒ其實平均四分ニモ至 ス セ シ ハ二十年前重ニ從量稅法ニ基五分ヲ本ト 権ヲ サリ セリ 直 可 丰 別紙 ヺ シト 回條約改定ノ機ニ至リ我政府ニテ輸入稅ヲ增 任候テ 以テ兩國協議シテ方今ノ輸入 日 ノ應接ハ (ロ印)内書ニ改正税目草案ヲ附シテ外 モ外務卿ノ語氣ヲ以テ考察スル ハ忽チ保護 初テノ開談ニシテ格別 ニ幸改正税目草案ヲ所持スレハ ノ過稅ヲ課 ナラテハ返答致シ難ク ハ篤ト シ通 税ヲ至當 シテ定メタ ブ應接 深奥ノ點 胀 ·通商局 ヲ信ス ノ趣 ハ

Ž.

地ニ集會シテ英政府ノ他各國ニ對スル通商條約ノ不當 此騷亂ヲ釀シ方今稍鎮定ノ模様ニ候得共諸製造家

ラ其場ニ臨ンテ説明ヲ加

ガュル ニ

 ν

IJ Ŧ

一内閣中ニ

顧慮ノ念ヲ起シ幾分歟我條約改定

==

=

/ 意ニ相見 3 、七八分 、以テ將來ノ約 ハ被得可申 得其外ノ个條ニ於テハ別ニ異議ナキ様被察先十 東トナシ以テ通商ヲ保護セント ス ル

可被下 原因ヲ尋ルニ職人等協議シテ賃錢ノ増ヲ乞ヒシニ近來米國 騒動實ニ一方ナラス夫カ爲ニ諸製造所ハ永ク休業セリ抑其 ヲ以テ斯ノ 殊ニ當國ハ多年ノ ヲ英政府 一人曰ク此 ŋ **ルヲ喋々スル** 刎ル 、等ハ愈薫類ヲ煽動シ四方ニ檄文ヲ飛シ各地一時ニ起ツテ以ハサルヲ以テ職人等ノ望ニ應スル事能ハサリシ依ツテ職 モ ノニ 木綿白耳義ヨリ鐵類多分ニ輸入シ價モ當國ニテ製造 |一般ニ蔓延シ人家ヲ燒キ製造所ヲ破壞シ人ヲ暴殺シ = 候亦是ニ加ルニ當國ニハ諸職人ノ紛擾起リテー時 八拙者事ニ 比 異ラス」ト二人ノ云フ所恰モ符節ヲ合スル 理財家ノ ニ迫ルハ「刅ヲ抽テ人面ニ擬スルカ如シ」ト他 如キ スレハ康ニシテ遂ニ英國製造所ハ是ニ拮抵ス 法ヲ日本ニ行ハントスルハ ハ拙者不肖ニシテ寔ニ論談ノ不容易深御勘考 政府ニ對シテ保護法ノ物産ヲ作興ス可キ 保護 經驗ニョツテ自由貿易ノ國是ニ一定セル 因テ此事ヲ一二友ニ語ル一人曰ク保護法 法ヲ嫌忌スル實 三甚敷近 「孙ヲ以テ自家ノ首 ク其 カ 加 其 N ス 1 = 3 ノ

府ノ會議 撃シ 通知相成居リ就テハ質問イタシ度事有之候間外務卿ニ出頭 委敷承知アル可キ事ナリ方今日本政府ヨリ條約改正ノ儀ヲ 置出張イタシ候ニ付彼是遲延セリト 等モ アラン事ヲ乞ト 付聊條約改正ノ返書ヲ相促候處伯林府會議ノ爲ニ諸 候得共イツモ繁忙ノ際ニテ充分ノ談判出來不申候然 出張相成是ハ我條約改定ノ決答遷延ノ原因ニシテ ハアルコツク氏ヲ顧テ貴下曾テ長ク日 夕同卿ノ夜會アリテ拙者ニモ出張イタシ幸ノ機會ト存候ニ 談二 リテ外務卿ニ對シ頻リニ語ヲ接セント欲スルノ趣アリ卿 ハサ スルノ影響ナシト云難シ曾テ外務卿ハ伯林府ノ大會議 可 成我ノ趣意徹底候樣談話イタシ置候處月餘ニシ

相渉リ候處傍ラニサー、ロザホル

1

アルコツク氏

本二在留

ロシ其國情

E

ノ事ニテ夫ヨリ種々

1

事ヲ捨

ノ事ニ付拙者ハ其翌日アルコ

ツク氏ヲ訪

Ł

1

デユリエンボンスホー

ト氏ニ相任有之候間屢々

面

テ伯

固

⋾

リ省

モ局ヲ結外務卿モ歸英相成候ニ付折々面會

N 1

=

Ŋ

シ

決議 層滿足ノ答書ヲ致サレ 拙者ハ亦然ラハ條約改正ハ御異存無之然シテ實地改 ケ ナ シ ル Ŋ ス -ス 他貿易規則港則沿海回 我政府要求ノ趣旨ニ基キ何程歟ノ増税御同意 = [本意ナラスモ斯ク御催促ニ及フナリト我ノ其ノ滿足ノ答書ヲ致サレ折々實地更正ニ着手ノ時日 ノ事 N ル事ノ切ナルヲ反覆論辯セシニ卿云ク然ラハ内閣 ミニシテ慥ナル 臨ミ通商ヲ制限ス可シト 候事難相成乍併日本政府ニテ條約ヲ改正ス シ候改正税目草案中ニハ當國ノ重ナル 度々陳述セシ如 ハ實ニ好マシキ事ナレトモ今度日本政府 シ N ·> 事他ノ國ニ比スレハ甚大ナレハ其國開 事ト キ増税相見得此儘ニテハ日本政府ノ意通 セシ大略ヲ説明セン抑英國ハ日 可然厥ト ハ何様ト 異議無之樣相見得 考ルニ付實地改定ノ時ニ臨ミ通商ヲ 押返シ相尋候處右ハ只內閣 モ 事 イタシ候方可有之ト ク當國自由貿易ノ國是ニ反シ殊ニ內借 ハ書翰 [航ノ權等談話ニ及候處右等 亦 一思考スル 卿 ニ認メ送致可致トノ事 ノ説ニ 本ト通商 過税ヲ課スル 英國政府ト ノ趣ニ有之候 產物木綿類 ノ内決ヲ談語 進ノ路 ノ要求ハ過日 制限セ ナリ ル ŋ Ŀ 八決答ヲ要日相迫リ候 ハ ニ承服イタ ノ關係ヲ有 ニカヲ盡 一有之其 至 6]. = モ 了解 非 分定ノ時 依ツ サル 極適當 三最著 ニテ粗 1 セ ν テ 丈 1 3 1

フガニス 得內閣 緊要ナル アラス 卿云ク此事タル實ニ尋常一般ノ事柄ト 方論ノ如キ 問合來リ候間願 拙者發言スル 亦當月十日拙者外務卿ニ面會寬々ノ談話ヲ得申候其大略 ルハ日英通商上ノ障碍ニナラサル様取極度トノ趣ナリ 府ノ意見ト **=** /緊要ナル ック 七 要求スル旨趣ト情質トヲ詳ニ説明シ 加ルニ伯林府ノ會議ニ出張不致候而不叶事ニ相成東 v ノ熟議ヲ盡シ候上ニテ取極ムル事ナレ シニ保護法ノ一點甚難問ニシテ到底輸入稅ヲ増加 Ŋ ト時日ノ切迫スルヲ以テ英政府ノ決答如何ヲ屢々 氏 モ格別ノ異議無之様相見得 ン事件相發シ內閣頗ル繁忙ヲ極メ夫カ爲ニ今日以イマタ全ク決局ニ至ラスシテ寸暇ヲ不得引續ア ハ英國直接ノ利害ニ關シ實ニー大重事件ナレ ヨリ書來ル 放ニ拙者亦云此事ヲ同時ニ申込 事件モ打捨置出發イタシ候次第ニテ歸英ノ後 ニ敷月前書ヲ卿ニ致セシ以來我政府 クハ何分ノ返答アラン事 其趣意ヲ概言スルニ同氏外務**卿** シ中 1 ア = レト ハ其細條ニ至ツテ充分 殊ニ米魯 モ要領ノ大趣意ニ於テ 遠ヒ各方ノ報告 タリ ヲ乞旨ヲ申述シ ハ容易ノ事 兩 タル他ノ政府 日ヲ經テ 兩政府 ハ其事 加ス面 = 3 Ĵ ヲ = 由 ァ *>*\ = *>*>

約ヲ結フハ妨ケナカル可シ右ノ通今日ノ談判殊ノ外都合宜 非ラス必竟其望ム所ノ原因 及ヲ以テ自己ノ意見ヲ陳述ス ト通商條約アルヲ以テ勝手ニ 如斯御座候 ハ製税ノ權ヲ我ニ得候上ハ五相ノ理ニ基キ適當ノ通商條 シテ通商ヲ妨ケントスルニ非ラス巨額ノ歳入ヲ要ス モ 他ノ政府ト税目ヲ極メ是ヲ約束ト 此次便ニハ慥ナル好報ヲ差上候儀ニ可相成候此 拙者ハ是ニ答ルニ 以上 我 ハ重ニ國權ノ一點ニ關スル譯 $\dot{\nu}$ 、我政府モ 税目ラ 政府ノ命ヲ得スト雖モ 更正 製税ノ權ヲ我手ニ掌 スル ナス事差支ナカ ハス 談爱 N Ħ ナ == = ル

治十一年十月十八 Ħ

全權公使 Ŀ

外務卿 寺島宗則段

追テ本文(イ印)ノ書翰ニ對シ假リニ 成候返翰別紙寫(ハ印)差進候 外務卿 3 IJ 差越

註 1一八八參看

つヨリ サ ŋ スブリ 侯 ヘノ

代フルノ極メテ必要タルニ至ル且又平均五分以下ノ課稅ヲ 費ノ需用ニ充テ又一ニ 現今我國新タニ間税ヲ設ケテ歳入ノ額ヲ增シ以テ一ニハ國 獨立國ノ權理タルヤ外國貿易ヲ制定スル如キハ最モ其不可 ラ 勢ノ變遷ニ隨テ宜シク之ヲ改正スヘキハ旣ニ一般ニ公認セ N 今 權理ヲ行レサリシモ是只一時ノ間絕タルノミ仍テ我政府 **爭ノ權理タリ然ルニ從來日本ニ在テハ條約ノ爲メニ姑ク此** 出入税目ヲ整定スルノ權理ヲ擴張セント欲 ノ昔日ト相同シカラサル實ニ此改訂ヲ要スルニ足レリ加之 約ニ於テ期望スル所 開申ニ及ヒ候拙 貴我兩國間條約改訂之儀二付今般我 ル、所タリ卽チ我國近來大ニ其政略目途ヲ變更シ其狀態 モ元來貿易條約ノ如キハ決シテ永久不易ノモノニ非ス事 此改約ノ權ハ條約面ニ即チ其明文アリ假令其明文之レ ,ヤ當ニ條約ヲ改訂シテ二十年前事情不通ノ故ニ失フ所 此權理ヲ恢復シ施爲ノ自由ヲ要求スヘキノ時ナリトス現 ノ譯文ヲ今爰ニ閣下ニ進達スルニ當リ 者へ宛タル右訓狀 ハ我帝國固有ノ 直稅既ニ重キニ由リ間稅ヲ以テ之ニ 其文ヲ請求スルノ條理 中記載ノ通リ我政 主權就中貿易章程及輸 いスルニ在 ラ聊 ij ナ ナ *>*\ Ŧ

要卜 政及工業ニ關シ不得止ノ情實現ニ如斯キニ付我政府 要且正當ナル關稅ヲ收入スルヲ得可ラス實ニ我國ノ理財施 ナル 先ツ姑ク内國ノ工業ヲ保護シ低價ヲ以テ輸入品ニ壓セラル スヘシト ルヲ政府ノ職分タルヘシト思考ス且又僅ニ名義ノミニ過キ ルノ患ナキ様地方ノ事情ニ應シテ物産ノ製造ニ着手セシ ニ於テ我政府ハ外國ニ對シ相當ニ競爭スルノ勢ニ至ル迄 我自國ノ税則ヲ設定スルノ自由ヲ復スルヲ至當トシ且必 輸入ヲ許容スル ル 業ヲ興起セント欲スルモ之レカ爲ニ其志ヲ起スヲ得ス是 テ百般ノ貨物皆外國 トス元來我國ハ五分ヨリ多ラサル リ我政府今般ノ條約改正 ナスナリ此外ノ條件ニ至テハ協議ノ日ニ及ンデ 我内國ノ製産品ニ相當 ノ課税ヲ以テ外國製産品ノ我國ニ輸入スル限リハ同様 雖トモ今日ニ於テ最モ其至要トスルハ稅權ノ一事 ノ義務ヲ負フト雖ト ョリ輸入シ來 ラル、 セラレ ノ税額ヲ課スルコト難クシテ緊 ヲ主張スルノ旨主卽チ大要如 我國 ヤ 各國ノ諸港ニ於テ皆其品 到 N ノ重ナル輸出品タル ル ・モ我國 ノ税額ヲ以テ外國品 カ故ニ我國民新タ 三對 ·皆格外 シ の角發論 テ ス適宜 同 4

=

爲メニ 所以ナリ 與フルモ猶亦從來ノ稅則ノ如キニテハ輸入貿易ノ爲メニ不 稅卜 利益ヲ損スルコトアラントハ思慮セス外國貿易ハ却テ之カ 都合ナシトセス是レ則此税則ヲ改正スルニ於テハ我國ノ外 他國ヨリ受ルヲ得ス然レトモ我國ヨリ他國ニ此等ノ便益ヲ · 國貿易ニ如 我國ノ貿易ハ我本國ニ於テ與フル所 到底著シキ利益アル 尤モ我政府ニ於テハ今般ノ稅則改正ニ付テ外國ノ 何ノ實効アルヘキ乎ノ說ヲ閣下ノ考案ニ供スル ヘキヲ信スルナリ其理由左 ノ便益ニ向テ其報償 ノ ヲ

ヲ償フカ N 入ノ物價ニ比スレハ常ニ大約二ト三トノ割合ニシ不景氣ノ原因ハ暫ク之ヲ擱キ日本ヨリ輸出ノ物價 利益ナキニ至リタリトノ慨歎ヲ外國人中ニ發スルニ至ル此 數年來其更ニ振ハズシテ衰微ノ甚キハ日本トノ貿易ハ全ク 日本へ外國品ノ輸入ハ殆ト無税モ同様ノ輕税ナリト雖ト 所タル 禍害ヲ生スヘキハ必然タ ヘシ又輸出貿易ニ於 シ 爲メニハ金銀貨幣ヲ輸出セサル テ尚 ?止マスンバ敷年ノ後ハ日本ノ貿易ニ ル ノミ是レ閣下 テハ輸出税ノ為 ノ割合ニシテ此差違 ヲ得ス外國貿易ノ モ亦了解セラル = い之ヲ輸 ケ ラレ 谌シ ÷

起ス 得ルニ足レリ依テ閣下ニ於テハ我國ノ情實及其利益トヲ以 ク只貿易ノ一事ノミニ止ル可キニアラサルハ閣下モ之ヲ認 貿易ノ不景氣依然トシテ永續スヘシトシ又或ハ輸出入稅共 タルヘシ若又萬一二前顯貿易改良ノ見込ヲ相違トシ又或ハ 大ナル能ハス然レトモ此税ヲ廢スルニ至ラハ大ニ之ヲ振起 正ノ儀ニ付貴政府ノ御目途ヲ通知セラレ度且我國ノ論案貴 テ此論件ノ大原因ト認メラレンコトヲ希望ス此猶又條約改 ニ進步スルノ國ナレハ實ニ其國權及ヒ國益ハ特別ノ認許ヲ ノ貿易ノミニ係ルモノニ非ス我國ト海外萬國トノ關係ハ永 テハ如斯キノ想像論ヲ以テ我政府現今ノ見込ヲ破ルヲ得へ 運ヒニ至ラハ日本ノ物貨廉價ト成り隨テ外國貿易上ノ利益 ノ通り改正條約成ルニ於テハ輸出稅ヲ廢棄セントス仍テ此 同時ニ改正セサルヘシトノ確說之レアリトモ我政府ニ於 セラルヘキハ炭ナキ所ニシテ目下我國ハ頻リニ文化教育 モノトハ認ムル能サルナリ元來此條約ノ事ハ啻ニ我國ト ノ嘉納スル所ト爲リ速ニ改正條約實行相成貴我兩國ノ實 ヘキハ決シテ疑ヲ容レサル所ナリ是故ニ我政府ハ請求 外國品ヲ買入ル可キ國力ヲ擴充シ隨テ輸入ノ需要モ振 ヲ得ヘク而シテ日本産物ノ海外ニ其賣高ヲ増加スル

千八百七十八年五月四日益ヲ發生候様致度拙者希望スル所ニ候右得貴意度如斯敬具

上野景範

(右英譯文)

Wooyeno to Lord Salisbury

May 4th 1878

My Lord Marquis,

In presenting to Your Lordship a translated copy of the instructions which I have received from my Government with reference to the proposed revision of the Treaty between Japan and Great Britain, I have the honour to add some considerations as to the various motives which animate my Government on the question, and to develop some of the arguments which it adduces in support of its claim.

In the instructions addressed to me, Your Lordship will observe the statement that my Government "expects, by the revision, to come into fuller enjoyment of the Sovereign Right inherent in the Empire," especially of such as relate to the adjustment of Trade Regulations and Custom Tariffs.

possessed itself some twenty years ago. freedom of action of which, in ignorance, it disto resume that power, and to enter again on the it may reasonably claim, by revision of the Treaty, ernment thinks that the time has now come when by treaty. however, that power has been temporarily suspended the power to fix the conditions under which foreign Independence, that, of the various rights consequent on National In support of this statement I need merely name shall be conducted. But it is merely in abeyance. not one is more incontestable than In the case of Japan, My Gov-

altered, contained in it my Government would still point recently modification mercial Treaties are not to be regarded as permacouclusively to the acknowledged fact Treaty itself. The right of revision was stipulated for in the that they are, they and that the great changes which have been effected in the were signed have become as soon as But even if no such condition were by their nature, open the circumstances under policy, the aims, and that Comseriously оţо

the condition of Japan amply suffice to justify such modification.

Furthermore, the situation in which my Country is now placed renders it absolutely in dispensable to augment the revenue by new indirect taxes, in order, on the one hand, to satisfy the financial requirements of the Government and on the other, to substitute fresh indirect imposts for certain actual forms of direct taxation, which weigh heavily on the people.

Another noticeable feature is, that the marked disposition of my Country men to inaugurate new industries is paralysed by the introduction of all kinds of foreign goods at duties which average less than five per cent.

My Government consequently considers that it is its duty to confer on native enterprise a degree of temporary protection sufficient to enable it to commence such new manufactures as local circumstances may justify, without the fear of these being undersold by imported articles, before proper competition is possible.

Again, I have the honour to impress upon Your Lordship that, so long as foreign products enter Japan at nominal duties, it is impossible to impose excise dues on analogous Japanese products. An important and legitimate source of indirect revenue thereby remains closed.

For "urgent reasons, therefore, fiscal, administrative and industrial, the Imperial Government considers that the present position and present necessities of Japan entitle and require her to resume the faculty of fixing her own Tariff as she may think best suited to her needs and interests.

Some other questions will also be brought forward by, my Government during the negotiation, but the Tariff is the point to which it now attaches the most importance.

Having now laid before Your Lordship a short explanation of the motives which have decided my Government to insist on this matter, I venture to call particular attention to the fact that, though the obligation to admit foreign goods at a maximum duty of 5 per cent was imposed on Japan, no Power

system has not worked well for the import trade. to pay, in all the ports of the world, the full duties accorded to her any reciprocity. system on the exterior commerce of My Country. ship as to the probable effects of a change of tariff which I have the honour to Submit to Your And this brings me, My Lord, to the consideration these advantages accorded to other countries, this for the facilities granted at home. Her commerce obtains no compensation elsewhere almost everywhere at exceptionally high rates. portation--tea and Tobacco for instancehappens that some of her principal staples of exchargeable on each category of Her products have goods, Yet, with all -are taxed and

The Japanese Government does not conceive that foreign interests would suffer by the proposed alterations of that foreign trade would, at least eventually, considerably benefit by them. It thinks so for the following reasons;

The imports of foreign goods into Japan have been virtually stationary for several years. Not-withstanding the almost total absence of custom

duties there has been no real growth of trade. General complaints have arisen among foreigners that commerce with Japan is ceasing to be lucrative. Now, without entering into all the causes of the existing stagnation, I would mention that thus far, the value of the exports from Japan, as compared with the value of the imports, has been, roughly, as 2 to 3, and that it has been necessary to export bullion in order to make up the difference.

Your Lordship will recognize that the continuance for several years of such a state of foreign trade cannot fail to have produced very damaging effects on the entire commerce of a country in the position of Japan.

Here, however, I must ask permission to draw Your Lordship's attention to the important fact that the export trade has been weighted and restrained by export duties, and to express the opinion that the situation can be remedied, in great part at least, by the suppression of those duties. It cannot be doubted that an increased sale of Japanese products abroad would be induced by such a suppression.

sion; that the buying power of the country would be expanded, and that the demand for imports would thus be stimulated.

It is in this belief that, subject to the signature of a revised Treaty on the conditions claimed, My Government intends to abolish the export duties.

Before quitting this part of the Subject, I would observe that such a measure would have the effect of cheapening Japanese goods and would consequently bestow a corresponding advantage on foreign commerce.

Finally, I am desirous to advance one additional consideration.

Even if it could be foreseen that the expectations which have been set forth here of a decided improvement of trade are illusory, even if it were certain that commerce would continue in an unsatisfactory state; even if it were proved that simultaneons changes in the system of export and import dues would fail to revive it, even then My Government would be unable to admit that such anticipations could be justly invoked against its present

this and that thus a this matter meets with the full approval of England, assurance that the position assumed by Japan in revision of the Treaty, and I venture to trust that ernment proposes to take as to the steps which Her Britanic Majesty's elements of the question. It now only remains, Japan are entitled to be regarded as the foremost acknowledge that the necessities and interests of progress and education merit special recognition, clusively commercial considerations, the national of the world cannot continue to be shaped by extions between that country and the other nations which affect dealers with Japan, and that the relathat other issues are involved here besides those concluded which will be conducive to the which has so energetically entered on a course of information may I confidently hope that Your Lordship will for me to ask Your Lordship to inform and Your Lordship will admit, I do not doubt, the national advantages of a country revised Treaty may speedily be be accompanied by the with respect to Govtrue , Му me

interests of both countries

I have the honour &c., &c., &c (Signed) WOOYENO KAGENORI

附屬書一

候敬具 變更致シタル由ニ有之候依テ閣下ニ於テハ緊要ナル英國製 於テ既ニバークス氏ト内議ノ上同氏ノ見込ニ應スル様數多 造品ニ關スルノ稅額決シテ過重ニ無之儀御同意可相成ト存 シ候ニテ書政府へ照會ノ公翰ニテハ無之候且該案ハ東京ニ 以手紙致啓上候然者去ル金躍日御面晤之節御申聞相成候趣 ニ從ヒ則チ我國ノ稅則案及進達候尤右拙者心得ノ爲ニ送越

千八百七十八年五月十四日

野 景

Ŀ

ロルト スブリー閣下

(右英譯文)

Wooyeno to Lord Salisbury,

May, 14 1878

Dear Lord Salisbury,

good enough to express at our interview on Friday In accordance with the wishes which you were

proposed Tariff to meet suggestions made by modifications have already been introduced into the British Government. guidance Japanese Tariff which have been sent to me for my last, I enclose draft copies of the new proposed Parkes in private conference with the authorities and not official communication to I am informed that many Sir the

Sir,

Marquis Salisbury to Wooyeno

May, 16th 1878.

not in any way prohibitory. as regards the important British manufactures I think, My Lord, you will agree that the rates are

I am with much consideration etc., etc., etc.

(Signed) WOOYENO KAGENORI

附屬書三

可及勘考候此段回答迄如斯 條約改正之儀二付不月四日附實翰併別紙共落手致之候早々 敬具

千八百七十八年五月十六日

+}ŋ ス ブ

上野景範閣

(右原文)

三七

報告、新通商條約締結方意見具申並ニ日米約書 税權回復要求ニ對スル英國ノ意嚮其他交渉經過

附屬書一 明治十一年十月四日英國外務大輔上在英公使 館御雇書記官トノ對話書

見交換ノ件 日米約書並ニ 税權及法權回復ニ關シ意

= 明治十一年十月十七日英國外務省二於ケル英

寺島外務卿時代 三七

> 明治十二年一月七日 **寺島外務卿宛** 上野駐英公使

shall receive immediate consideration.

I have the honour &c., &c., &c.

(signed) SALISBURY

I have to state to you, in reply, that the matter

your letter of the 4th instant, together with its

I have the honour to acknowledge the receipt of

enclosure, upon the subject of treaty revision, and

締結問題ニ關スル件

五四九

日米約書締結ニ關シ 辯明及意見交換ノ

件

條約改定事件第二號

十二月二十四日

論相成亦獨立ノ國權ニョツテ稅權ヲ回復セントスル 達セスシテ却テ兩國間ノ通商ト産業上ニ眼前 保護セントスルノ方略ナリト認メ斯ノ如キハ終ニ其目 國外務卿輔工面會其決答相促候處彼二於テハ飽迄モ自由貿 先般條約改正事件別信第壹號ヲ以テ報告仕置候以來不怠當 駁シ 亦假リニ國費ノ不足ヲ補ハントスルノ趣意ョリシテ論 期スルモ決シテ得可カラスト喋々保護稅法 ニシテ是カ爲ニ將來通商ノ繁盛ヲ致シ其歲入ヲ增加 ハ輸出税ヲ廢スル セントスルハ必意外國品ノ輸入ヲ制限シテ内國ノ物 主義ニ固著シ日本政府ニテ輸出税ヲ廢シテ輸入税ヲ増 如何ヲ豫定スルニ缺可カラザル點ニシテ試ニ稅額ハテ云ク凡商家ノ商事ヲ營ムニ課稅ノ多寡ヲ知ルハ其 便利勝手ヲ以テ朝暮ニ變更シ ルハ現ニ日本政府ニ莫大ノ損耗ヲ招クモ不足ヲ補ハントスルノ趣意ヨリシテ論ス一級間ノ通商ト産業上ニ眼前ノ妨碍ヲ來タ 得ベキモ 1 ノ非ナルヲ辯 ١ セ ルノ主意 ハ 商家 セン 的 產 ヲ ヲ

號ヲ附シテ閣下ニ呈シタリ)中ニ在ル保護稅法ニ類スルノノ寫ハ過便條約改定母在負ニサティ … 其改正 最普通ノ事ト認ムル事 商條約 shall prove to be desirable"ノ意ヲ基礎トシテ可考定モ 本獨立ノ國權ニ抵觸スル所アルヲ知ラス勿論右條約書中從 結タル條約書中通商ノ事件 利勝手ヲ以テ是ヲ變更シ能 insertion therein of such amendmente as experience 示ァラハ英政府ハ可成其需ニ適スル様相勉ム 十二ケ月ノ前報(ノーチス)ヲ爲シ其改正ス 來ノ實驗ニョツテ不都合ノ脈ヲ發見セハ其改正ヲ要求ス 、約束スル ニシテ曾テ訓狀ニ附シテ拙者ョリ差出タル 日本政府ノ適當ナル所分ニ付條約面ニ掲載有之通今ヨ 忽チ商業ノ準據タル規矩ヲ失ヒ診 ナリ是則方今歐洲各國五ニ通商條約ナルモノヲ結ビ ス可キ條目モ亦條約書中ノ ハ通商上缺ク 所以ニシテー度 ヘカラサルモノニテ已ニ歐洲 ナレ ト海關稅目 ハ則千八百五十八年日英間ニ ハサルハ勿論ニ有之斯ノ 此約東ヲ爲セハ猥リニー "With a View to the 三通商 ノ个條ヲ以テ聊モ ノ停滯ヲ釀 へへキ條目ヲ明 可シ然レ 書翰(此書翰 二於 國 如 デ F ク通 ラ ス 月 取 モ IJ ル

候テハ 申立 テ五 税ヲ増加スル ヲ外務卿ヨリ發言爲有之候趣右ノ情實ニ付此上ハ稅權 ルノ主意ナレ 到底製税ノ權ヲ全ク我手ニ掌握イタシ候儀ハ相叶申間敷へい、へ條ニ對シ微力ノ及丈ケハ反覆駁論イタシ候得共察スル v = 併我政府國費ノ多端ニ對シ何程敷ニ稅額ヲ増加 ヲ増加スルノ目的ニ非ラスシテ保護稅法ヲ設用セントニテ條約改正ヲ要求スルハ國費ノ不足ヲ補フカ爲ニ海 敷左候 相成候趣二付急速御評決有之度候 一策ヲ姑ク閣置シテ通商條約ノ第二策ニ出候外致方有 ハ 3 相ノ通商條約ヲ更ニ取結候專ハ外務卿輔ト 質際ノ 佛政府モ粗常國ト同様ノ趣意ニテ最早通商條約ノ事 ッテ明 ン の三推知イ 着手不相叶候右等ハ過便鮫鳥公使ヨリモ委細 ハ通商條約取結ノ御委任狀更ニ御 微力ノ及丈ケハ反覆駁論イタシ候得共祭ス ハ甚遺憾ナリ タシ候亦過日鮫島公使ヨリノ報 ト繰返シ辨明有之拙者ニモ前 一下附不相成 ·談判上 献判上ノロ かき とう以 回復 知 ス闘 =

府財 方今條約改正無件ハ外務大輔サー、チュリエ 氏ノ手ニ相任有之過目同氏ノ咄ニ可成日本ノ請求ニ サ 不始末上 得共只保護 ル 正二付日本政 ークス氏ョリ 税ヲ課スルノ 府 ノ報告書中ニ日 一點ニ於テ彼是議論 ノ主義不適當 ン、 ポンス |本政 テ 荷 ル 朩

後死ノ ケテ書 約ヲ爲シタルニハ非ラサル敷ト疑念相生候趣ニテ則右條約 條約書ハ其明細ヲ示サス單ニ「日本政府ハ此度米國ト條約 拙者ハ右條約書ハ米國ニ對シ決シテ特別ノ條約ニアラズ必 書ノ寫ヲ一見イタシ度旨電信ヲ以テ日米兩國在留ノ英公使 ヲ詳ニ中越相成右等ヲ以テ實際主任ノ者其取極方ニ甚困 イタ 念ノ氷解セサル所有之様被察此儀ニ打捨置候テハカ 改正ニ付我政府ヨリ差出候書翰ニ對シ其主意ヲ不殘承諾セ 竟米政府ハ我政府ノ請求ヲ正理ナリ 疑念ヲ厚クスルモノニシテ聊氣色ニ觸候模様ニ見受候ニ付 工 テ内々外務大輔ニ 取結べり 問合相 本政府ハ此條約改正ニ臨ミ米政府ト別ニ特別ナル内密條 ル旨内話有之候亦今度米國政府ト吉田公使調印 ト云返翰ニ外ナラスト辨明イタシ候得共何分ニモ全ク疑 シ置候分 御指揮ノ趣モ有之候間営館 障碍ト 面 成候處兩 トナシ是ニ調印セシ迄ノ事ナリーロニ云へハ條約 」ト諸新聞紙ニ相見得候 ハ差支無之事ト 成且右條約書ニ付テハ過日電報ヲ以 政府共ニ其需ニ應セサ 面會爲致公然ナラス定約書ノ大體 相考則其 ヨリ ŀ 通取計 認メ悉ク其个條ヲ舉 リシ是益英政府ノ 當外務省ニ於テハ 1 ン氏 紙(イ印) タシ 5テ鮫島 ナラス ラ通 ハヲ以

者ナシ斯ノ如キ不練熟ノ人ニ稅權ヲ取捨スルノ權ヲ勝手 現ニ國家ノ理財ヲ管スル人ト雖モ經濟ノ道ニハ甚迂活 テハ立ロニ 我ヲ欺キタル所分ニシテ萬一保護法ノ日本ニ行ハル、ニ於 行フノ事ケカリシニ今保護法ヲ行ント英政府ニ請求スル 今废條約改正ノ條件ハ大藏卿ヨリサー、ハルリ、パークス十八號)ノ通御返電相成承知仕候兼テ御申越ノ趣ニヨレハ リ亦大藏卿大隈氏ノ説ニョレハ日本政府ノ主意ハ保護 ヲ補ハンカ爲ニシテ既ニ夫カ爲ニハ巨萬ノ紙幣發行相成タ 候處此比同公使ヨリ當國外務卿エ宛タル内報告書ニヨレ 氏m屢々談判相成粗同氏ニ於テハ同意ノ趣ニ承知イタシ居 、以テ保護税法自由貿易ノ如何ナル結果ヲ來タスカヲ知 (ニ 意外ノ事ニテ税額ヲ増加セントスルハ薩摩騒亂ノ費用 充全ノ議院モ無之ヲ以テ一切政事上ノ變換取捨ハ僅 同意シタルヲ證シ當國政府 、理財ヲ管スル人ト雖モ經濟ノ道ニハ甚迂活ナル商法ノ衰頽ヲ ※タスハ不俟論且ツ日本ニ於テハ || 來恐ル可キ患害ヲ招クニ至ラン且日本ニハイマ (往四十四號) 差立候處 ハハ他ノ政 ハ右ニテ御承 ニ屈竟 ノ我ノ詩 知有之度尤右 (來四 ブ具 ル殺ハヲ 三廟 ル ハ =

右等報告仕候也ニー大臣ノ權ニ屬シ朝政暮變實ニ定リナキ政府ナレハ是単二三大臣ノ權ニ屬シ朝政暮變實ニ定リナキ政府ナルトス云々頻出一三大臣ノ權ニ屬シ朝政暮變實ニ定リナキ政府ナレハ是

明治十一年十一月七日

全權公仗 上 野 景

外務卿 寺島宗則殿

印)差出候間御通覧可被下候 二白 過日レーン氏ト外務大輔ト内話書ノ寫別紙(1

一本文書中ニ謂フ別信第一號ハニー六 尚「往電第四十

(十月二十日倫敦着)ハ何レモ暗號ノ儘ニ付省略四號」(十月十七日倫敦發)及『來電第四十八號』

附屬書

ソル・ジュリヤン・パウンセフヲート及ヒス一干八百七十八年十月四日倫敦外務省ニ於テ

チュアルト・レーン兩氏對話筆記

ラ共廉ヲ辯明センカ爲メナリ
「應ノ挨拶既ニ終リテ後レーン氏曰ク予日本公使ノ依賴ヲ「應ノ挨拶既ニ終リテ後レーン氏曰ク予日本公使ノ依賴ヲ「應ノ挨拶既ニ終リテ後レーン氏曰ク予日本公使ノ依賴ヲ

へキニアラサル由ナレハ其廉ハ敢差シタル緊要事ニモ非サリルジェリヤン氏日ク該事件ニ付予敢テ偽説ノ為ニ非サル所ナリ然レトモ後ニ間ク處ニ據レハ其約スル所ノ條款サル所ナリ然レトモ後ニ間ク處ニ據レハ其約スル所ノ條款の他ノ諸國モ皆共ニ同意スルノ後ニアラサレハ費地施行スルがジェリヤン氏日ク該事件ニ付予敢テ偽説ノ為ニ誤ラルソルジェリヤン氏日ク該事件ニ付予敢テ偽説ノ為ニ誤ラル

ルトナリ

センカ爲メ其手段ニ及ヒタルナリ既モ即チ其邊ノ事ニ在ルノミ夫ノ新聞紙上ノ説ノ如キハ其所モ即チ其邊ノ事ニ在ルノミ夫ノ新聞紙上ノ説ノ如キハ其

心ヲ生シタルニ非スル、所ノ利益ハ最優待國ノ條款ニ據リ我國亦之ヲ要求スルル、所ノ利益ハ最優待國ノ條款ニ據リ我國亦之ヲ要求スルルシュリヤン氏曰ク假令何等ノ場合タリトモ米國ニ許サ

其論ヲ發スルヲ要セス只貴下ニ於テハ此條約ノ日本 ソルジュリヤン氏日ク然リ日 /= ν ーン氏日ク其レハ固ヨリ事情ニ關スル事ナレト 實ニ至要タル事ヲ諒セラレン事ヲ乞フ此條約ハ卽 意スル所ノ者ナラ 請 求スル所ノ條理ヲ十分ニ認許スル所ノモノナ 本稅則改 ĪF. ノ 41 = 付 テ米 モ ラ 月 ノ爲メ 今爱 1) 國 水 1

現ニ此條約ニ同意スルノ手續ニ及ヘリセルモノナリ右ノ請求ハ締盟各國ヘモ皆乙ヲ同フシ米國ハハ其外ニモ日本ニテ請求スル所ノ條件ヲ皆悉ク十分ニ許容レーン氏曰ク予カ委任セラレタル所ニ超ヘタル言ナカラ右

テ追 テ是 ッ返答ス ヘキ旨ヲ申送リ置キ 八各國皆共二協議 ニ我國ノ意見ヲ問 ス可 B 4 合 ·V セ 1 心 Ŋ N **ヲ**ル

1 + · ン 氏 亡 = 目 ニ之ヲ確斷シ其他ノ ノ返答ヲ渴望スル テハ各國各自ニ決斷ア T 細ノ事 項ニ至テ 諸國モ ナ が固 ŋ ル 亦 可 ∄ 多分分 丰 1) 然ル **4**1. ナルへ 八同 2 シ 樣 ナ ጉ v 米 雖 國 ト ハ 我 ノモ

ソ ル ____ = ?" n 返答ス 同 意 IJ 3 夕 7 ŋ ン氏曰ク米國ヨリ トナリ リヤ予ハ諸國カ必アク米國ヨリ他ノ諸郡 1) 必ス我英國ニ於テ 壬 1 貴國 報 ヲ ラ チ所

於テ ン氏 = n 日 ニニシテ予 ラ ハ 日ク若シ誤解セラレニスルナラント思ヒタレ ホヲ許容 = ル IJ 談判ノ現況ヲ貴下 第一米國 nJ 此 ッ 胩 キヲ確信スル) 専ラ旣ニ本件 ニ之ヲ陳述ス Ξ カ 了 而 但夕尚詳報ヲ要セリ ス十 シテ獨 411 ス N 分 トへ通知ス サノ議論アリ ナリ 所 1) べ ニ我ニ同意シ叉佛國ノ ラ以 ハ恐縮 其返答ノミ必 シ予近頃巴里 予諸 ラテス ハルモ妨 國ノ ハレハ主義 Ŋ 而 /返答ヲ見 我公使 IJ シ シスヤ 我 = ヶ テ其望ム 輩ハ今 在リ チ ショリ ·不惠 = 返答 於 シ ル ノ本郷件 事 ナ 帷 力 テ 該 ハハヲル .英.

> 考フレト ヲ ハ テ カ で同様 グタサ 只當國 彼國ヨ 'n 證タリ 旣 自 1由貿易 バ ン氏 以白耳義用意ニ向 IJ 所 1 ナ モ アレトモ是レ の主義ニ從 ノ説必ス É 直 ス ナ ý = 义露國 係ア 日 ヲ 本二 ヘル ハ ス然ラン又日耳曼・彼ハン事ヲ欲スルカハ主義ニ於テハ同語 ノ貿易 ル 主義ニノ 一八子 ヘキ 日 ハ 八里斯盆ニ日・ 答え可 ハ僅ニ微 左在 如 カ モ シ是 了 ž 然レ ν ス == 中公使駐劄 | 其日本 = M タ ル ヘハ未タ 更二其 カ n ν ハ今 所 如 シ組 = . 返答 P モ ノタラフ 川 好誼 萬事遲 ν t ハ ナ 7 ラ表 サ Ξ ナレ望 之 丰 又 サ 1 ル ハ -ハ へ 葡萄 スル ヲ 日ス 同 ナ · ' ル

加業坦ノ 送り 足 ソ \sim シ 旣 ハ尚未夕 下貴公使ニ保證スル ル ジュリ テ IJ 一澁滯 ŋ 總テ必用ナル書類 事 シ 然 アリ加 ・テ常務 Ť せ レトモ現今我輩ノ多忙ナルハ實 ン氏 サ ル リスバリ ハ ル ア外ニ先キニハ東邦ノ 目 ニ書類 ナ 力 ルヲ得ヘシ予ハ實ニ事ノ油ク我輩敢テ徒ニ遲慢ナルニ 丰 モ 此 ハ カー侯ヨリ返ラス 印行シテ之ヲサリスバ 事件ニ 於テ ·返ラス ハ予 テ 論 必 二足下 件 アリ 手 シアノ 速 V == ヲ ナ 七 分 ルサ 今 ノ IJ シ ラ除ノ 他 知 1 ヲ ル ラル 切望 111 侯 ^

於テ テ シ 返答ノ趣 フェ ス 各國各異ノ條約 テ聊カ怠慢ナキ 心ハ予足下 ハ諸國 ア新 一同協議 ハ予足下 1 、言ニ依 アノ ムテ之ヲ領 事 ジュ当 アハアラ ジ保證 = テ 业 決 + ル * ス ス ヘヘカ 可ル 日キ所 シ 本事ナ

---芝 ル 1 = H 2 可 ナ ン 意 ス處ノ議決ニ於テハ假令一國ン同様ノ請求ヲ爲ス所以ナリ シ *>*\ 嘗 固 プリリ 目 ヲ以テ日本ノ貿易條款ヲ ŋ ョリ各國皆共 二稅則一條二付 キ者ナル 此 此事ニ就テハ只 『求ヲ爲ス所 ^ * = - 滿足スルノ約ヲ求ントスハ只余カ一已ノ說ヲ吐露ス テ各 國 妨 ノ 多數 ノ約ヲ求 ノンシュ 併 ĬĿ. ユスルヲ得ヘア 2 ナカ 1 談判整 グラ他 フ 丰 N 國 スス 是 1 F. = == ア テ レキ モ ハ 他ラ其至各ノ

干繋ス ノ説 モ 2" э. ル ハ余 モ 速ニ我國 IJ ナル可 力考二 t ン氏曰ク宜シ 図ノ回答ヲ デ E 足下 / 爲ス可 其論 ノ 芸 ル ハ 今 ٠. 3 夫ノ佛國 此 如 = T 議 必 ス ス カ 領 ル 開國 處 事 裁判論 ラア ラオ ラ ムス

ン 尠 Ħ 氏 日 ラ ス = 刀 = 然ル いス質 セサ II) = ラ用 今 N 丰 所 Ħ カ 7 ナ 如 現狀 レト 之ヲ處置 シ 但 モ = シ 願 此 於 セ テ 力 ----ハ 條 ハ ハ 、甚タ痛歎 貴我 ノ改 其弊ヲ矯 兩 E 益 ハ 芷 今 ス 可 處 日 **ラ**

ソルジュリヤン氏曰ク足下ノ思考信ル難キニ非サルヘシ

弊害ノ ジ開暇 プラ陳 ン + ス ア Ħ 日 う九 ラ 刀 П ~然リ譬へ 1 八請フ此事件ヲ處ルハ之ヲ発カル、ニ ハ阿片事件等 ラ處 処ス ヲ 得 Ž ^ = ノ 大要 キ方法アルヘシ 如 + ij = 就 == デアル カ 工 貴下 余力 サ

於 = ŀ 雖ト 事 *"* ラ觀察セ モ 事 サニ就テ設話と でいた でいた IJ 願クハ足下 Ť ン氏 F ク足下 、ニ相違ナシ Ź セラレ(シ)ニ の高案ヲ聞 知 開カル ハアラサ 日外 ン足下 七 フ ランクホ ル 、甚タ多忙 N = ト周マナ ニ 蜜ンリ

申ニレス改一 方 フ 事. トラン此 改正 人 無 N ル ル ハ ノ ハ 10 アリトス 氏曰 ベシ尤 其主義甚簡易 3 3 而 ク其際ニ於テハ未タ深意ニ迄ハ モ 3 ナ 外國人 テ其鄙見タルヤ專ラ 七子 N 六 固 異論ヲ ク所 1 ナル 意見ダケヲ申述ヘタリ偖テ予 ヲ シ 3 ノ説 ν ンテ全ク其 ŋ モ 唱 ラーシ ニ基ツク 内 キヲ認 $\hat{}$ IJ X = テ只予カ 知己 テ (內國 知 = 其細目 其 モ ス 方法 法庭 フ ル ノ ナリ 日本人 カ 至ラサ = 如 ラ 裁判 其說 至テ + 中最 ラ Æ. 鄙見 IJ 只現 ハ Ż. == = ハ 考案ト 更ニ難 據 モ 何 有識 ラ述 Ŧ 今 25 v 人 シ 25

無用 二屬 ナ ス ル 屯 ノ ナ ル = 似 Ŋ 其 異

N **字**旣 テ シ 1) 7 ン ジ 前 1 制 = 日 知 パ V シ ン之三訂正 1 力 7 テ却テ之ョ N 現今日 力 所 ス氏 ハナラン 目 ラ加 ∄ 、共善良 IJ IJ ニ歎賞スヘキ 貴トニ ヘタ モ尚簡易ト アシラ承 ハナル N 者ナ 詳報ア ハ全ク歐洲 ŋ ノ法 ス 知 是 但 1) セ 律 冽 = シ 拿破崙 ル付 ァ ナ テ 諸 N 國ノ ラ ハ ハ ハ必スソ 刑典 ン 法 ラ = 律 力 基 N = 25

N **ジ** ŋ ヤ ン 氏曰 ク否曾テ來報ナ シ

ス t = ν 、現行ノ法 ヘキ == 自 シ 1 カ考案ヲ陳、 ン氏目 1 4 2 ス 訟廳ヲ設置スル \sim +1 ル刑事ニ就 ・ナリ然ル 律ヲ尚宜 t 判官ヲシテ該法律 力 宜 會審裁判法 ン ハ當分先ッ外國 氏 セン シ然ラハ今日本既ニ 、日ク予 Mテハ日本政 1 曰ク各國皆其臣民ヲシテ該法律ヲ遵守 キニ隨テ改革スル ノ拙劣ヲ発カル キ 二八則 25 颇ル其説ヲ嘉 埃及ニ於テス ヲ實施セシム 人被告タル チ締盟各國各異ノ 政府ノ吏員 一善良 デミス蓋 可 <u>.</u> ラ猶善ク 所 1 シ ア 1 ルニ在 爲リ プ民 丽 i 2: 律ア シ 2 . ~ / 法律ヲ以テ /テ給料 テ唯必 申 事 * 間 行 ル 或 1 ij 7 **ラ** 八外國 シ ν 便 ラ得 要ト テ玆 E シ ታ 法

> 或 ル ヲ得 ヲ 人 N / 遵奉スル \sim 可 ン ス シ 万 然不當 若夫 法決 其制ヤ全ク是レ一國ノ君權 **.** F 曰 一所不住 ŋ 貴下 裏當然 タル レ會審裁判ヲ行 シテ適應ス可カ ア法律ナル 此 ラ民相 7 言ヲ聞 \sim ス會審裁判法 集 3 = 非サ ハント ラサ クハ ~ N 余カ大ニ喜フ所 N ν ノ 一戸反スル 國タル 3 セ ハ必ス之ヲ承 ŋ ハ == 爲 ハ 七日本 到 ル = 者タリ 新法ヲ 可 N 所 其國 諾 = ナ 元 設 ス 於 1) ル フ 來 ケ テ サ 事.

用 ソ プヘシ ル 3) 3 リヤ 1 - センカ ン氏 日ク足下 1 考案ニ テ ハ 言語 ハ 何 國 ノ 語 ヺ

スソュレ TT 1 キ事 ン氏 ト思フナリ 口ク全ク現 孖 = 於 ル カ 如 ク外國裁判官 ハ英語ヲ用

ル ル ジュリ 1 論議發スル T ン氏 事無ル 日 力 或 へキ乎 ノ 如 + 他 國 ノ 裁判官ヲ 任 用

但レ ラ法律 岩シ此 ハカ説 ハ ン氏 之レアラサル可 1 日ク余ハ以爲ラク然ラス併 ステ 主眼トセハヤン本旨 / 4 本旨ハ各人ノ爲メ シ元派日 四ノ法律ヲ が唯一ノ 一本人八固 其他ノ 法律夕 シ 細項則 以テ 是等 3 リ其鹵權ヲ ÷ ラ - > 三於 ン シ = × ŀ ·v ハテハ 別段 欲スル 各異二十 細 41 重 7 ン =

ナ Ь 1 Æ 关 ニ適當ノ裁判ヲ施ス 45 = ハ 更 ニ異論ア ラ サ

N 义敢 ン氏 3) で難 力 + **売カラス素** 是亦僅 ン 氏 = 7 小 倍審官 3 1) 裏ノミ現今ノ 二於 テハ 如 fiif 土耳 ラ履 行 ス == 行 ル ハル ĿĿ

カ ナル ナラ ヲ ス = 如 意ニ 採用 ル = ク 所 3 ル ラ スシテ第一等 ル シ尤 レハ トキ 首 力 ス ブ **論旨ハ本件ヲ滿足ニ決定ス** 如キハ又之レカ特別ノ法令 思慮セラレ ッ ル 座 ノ裁判官ヲ以テ處置 、必ス之ニ ハ米國ノ ノー法アル + タル訟廳ニ控告スル モ今日本ニ在ル 考案ヲ Ź /起ス事 同意ス 裁判官 如 ン キハ是迄外交上往復 ノミ若シ英國ニシテ他國ニ 可ク而 カ アラハ余カ實ニ ヺ がノ法令ア 得 如キ本修業ヲ經サ 4 ノ権ヲ附 サル シメ シテ英國ノ 事 N 可 ノ途 ラ ル = 與ス 可 サ 一悅喜ス N シ 7 シ IJ 利益 タル 只日 雖 ナリ п テ 然余 ル シ ハ ノ裁判 文ル発 本 且 又 一千亦甚 ---ン 強 確 ッツ 外 <u>.</u> 死 國 **ノ** ナ シ **ゝ** ス

實 t カ 2 同 日ク篤ト シ余之ヲサリ ぶ可 シト 考 ス ス ハ バ ヘシ ル IJ 1 先 侯 'n = 通 談ス可シ然 ij 察 ス ル =

> ハソ此ル ۲ シ 農業鑛產 是レ 儀ヲ貴ト テ ヘキモ 夕 1 = = かテハ 就テ ご行 ジュ ル Ti. ン 相 日氏日 ニワツヂント = ノト 15 IJ 1 ハ ハ 四ノ爲メニ 條款ヲ セラル - 二告クヘキ 余尚一事ヲ述 外人之ヲ其利益ト爲ス真 三富 N ŋ ヤ 25 -シテ先ツ ン氏 必ス是等ノ考案ニ同意ス 、二至ラハ全國 メル 以 シ 日 ハ之ニ過 ハ實ニ幣 ン氏 ク テ貿易新條約ヲ結フ 意 貿易 旨 明 ラル 日 カ 我 ヨリ詳細ノ 公使ヨリ 結約調印ス可シト --アヲ忘 關スル 夕 ヲモ開テ外 ル ヘキ 1 盆ナカ V 條件 タリ 能 程ナ 委任ヲ受ケ 條款ヲ除ク пJ シ ハサ 、只余カ 可井 即チ ŋ ル 人 シ - 理方ノ如 加之 ル } \sim ノ起業ヲ許 チト シ元來 ノ答 雖トモ ナ 二己ノ 三此 Ŋ 國 1 1) 外 ŋ 却 \sim 商 = 車若 舊條約 テ 說 現今 ァ 间 議 H 本國 気可 ij ハ月 一依 一及 稅

 ν 國 1 ラ ン 氏 條約 日 ク 然り = ハ 右ハ五 稅 則 ヲ 載 相 t 7 年限 請求 ヲ = 定メ 化 n テ之ヲ實施 \sim 丰 者卜 シ ス 丽 可 シ 丰 デ

ル ニ足ル ル 可 IJ 2 7 日 ン氏 本果 日 シテ是ニ滿足 7 予思フェ是 え可 v 今般 丰 t 7 論 要領 ラ決 ス

1 ン氏 一日ク 余之ニ答フ ル 能 ハス雖然是事旣 == 佛國 政府

權ヲ實施セント欲スルナリ 權ヲ得テ恰モ佛國其他諸國ト) テ明言セ カ間知スル シが 所ヲ以テスレ プナレ ハ日本 ハ日本ハ其税則ヲ制定ス ・ニ於テ恐ラクハ異議 同様ニ只貿易條約ヲ結フ ナカ ル ル 미 == 1

゚ソル ムヘシ 於テハ我國敢テ之ニ異論アラサ ジュリヤン氏曰ク貿易條約ノ體裁ヲ爲ス N 可 シ予必ス 此 1 武儀ヲ心 改正 ナ ル = 留 =

締盟スル 余更ニ語ル可キ事アリ日本公使ハ業已ニ英國ニ於テ諸國ト レリ = 或ハ 草案ヲ作爲セラレタリ而シテ其諸國中ニハ開 ン氏曰ク貴下旣ニ 旧本ト同日ニ比 所ノ各國貿易條約中ノ條款ヲ蒐輯シテ稍ヤ 一較ス可カラサル者ア ク余カ言ヲ容レラル . ` 崩ノ 如 ヘクナ - 其體裁 點 v = 於

ク其國ヲ開クヘキ乎足下ノ見込如何
アルノミ偖テ裁判權ノ一條ハ其事若シ決定セハ日本ニテ全於テ何ト云ハル、乎ハ知リ難シ予ハ只予カー己ノ所見ヲ述ソルジュリヤン氏曰ク夫ハ至極ナリ然シサリスバリし侯ニ

モ是レ最モ緊要ノ一事タリ到底此一事決定セサレハ内國ヲルニ於テハ假令別ニ之ヨリ生スル直接ノ利益ハ之レナクトレーン氏曰ク余思フニ裁判權ノ一條ハ後來愈々其ノ決定ス

狀今日ノ儘ニテ内國 日 ヲ爲スハ實ニ日 尤モ右 本敢テ外國人ヲ內地ニ入レサルノ意ハ更ニ之レナ 本決シテ之ヲ爲サ、ルヘク余輩英人ヲ以テ之ヲ視レ クノ 六 稅 則 ナカ 4 本ノ愚ト云フヘキナリ ヘシ余カ聞 、件先ツ滿足ニ決定セシ後ノ事ナルヘシ事 ヲ開クトキハ紛議益々多カルヘケレ ク所ニ由レハ此 事若シ決定 丰 カ ハ + ハ 如

得タリ ソル 類ニ非ス我輩既ニ日本ニ在ル商法會議所 **法會議所ノ議ニ附スヘシ該所ハ固ョリ商務ヲ知ル事予輩ノ** 閣會議ノ爲メ當省へ出頭ノ筈ナリ足下ノ出サル 考ヲ盡シサリスバリー侯ニ告テ決定ヲ迫ル可シ侯 ハ之ヲ目次ノ首ニ載ス可シ又此事件ハ我輩之ヲ侯ニ謀リ ジュリヤ ン氏曰ク宜シ予足下ノ所見ヲ解得 3 IJ ハ其意見書 シタ ` 所 公明日 ラ書 IJ 尙 商 類 內

省ニ於テ決議セラレ只其細目 輸入ヲ妨止スル者ノ 固ヨリ税額ノ増スヲ忌ムハ勿論ニシテ之ヲ一目スレハ恰モ ル所ナリ會議所 ν ・ン氏日 モ可ナル ク之ヲ商法會議所ニ附 ベシ ノ議員タル 如クナルヘシ依テ大體 ルマンチェ ニ至テハ該會議 + ーストルノ ダ ケハ 所 諸氏 望マ ノ 意見ヲ 宜 シ = かかった シク當 カ ラ

甚夕僅少ナレハ輸入税ノ増スモ彼國ニハ大ニ關スル 米國ニ於テハ大概日本ノ茶ヲポムルカ故ニ其輸出稅ヲ廢ス 同意スル事甚タ容易ナル可シ是レ米國ノ利益ナル ルハ彼國ノ利益渺ラス而シテ其製造品ヲ日本ニ輸入スル ア得ス故 説ノ如ク日本ニ於テ輸出稅ヲ廢棄シ輸入稅ヲ増加セハ貿 リ之ヲ實際ニ考へ此改正ヲ施行スル ル 如何ナル結果ヲ得ヘキ平ニ在ルナリ米國ハ固ヨリ之ニ ジュリ = Ť 我輩カ會議所ノ意見ヲ聞ント欲ス ン氏 日ク實ニ然リ然レト ノ結果如何 モ 此 事件ノ如キ ル所 力故 ヲ察セ 所 八足下 ナリ ナ ハ 丰 サ周 *>*\

セルナリスルニ非スシテ眞ノ交際主義ニ依リ常ニ他國ノ權理ヲ主唱スルニ非スシテ眞ノ交際主義ニ依リ常ニ他國ノ權理ヲ主唱レーン氏曰ク是レ固ヨリ然リ雖然米人ハ專ラ利益ノ爲メニ

議ヲ釀成セン ルジュリ ノ政略ニ抗 ヤ パスルモノ 1 ン 氏 欲シテ干渉スル 日ク 雖然米 、如キ ナ 人 事アリ ハモ亦時 1) Ħ ŀ 本 シ テ 一在テハ米 人我

シ ン氏 ン 日ク或 中或ハ バスル 日本ト ハ然ル ト蜜約ノ事ヲ載ス・ (マス) ハ露國殆ト米國ヨ 事アラン雖然日 米國ヨリ甚シキ者アルカ如 N 本ノ為メニシ ハ其實説ニ 非 テ英國 サ ル

数スへキ事ナリ数スへキ事ナリが表す容れ可カラスト雖トモ恐ラクハ其意ナキニ非サルヘク又其考案ヲ出セシモ知ル可カラス故ニ英國ニ在テハ宜シク又其考案ヲ出セシモ知ル可カラス故ニ英國ニ在テハ宜シス是レソノ良策タルヘシ夫ノモンセイ氏ハ能ク日本ノ事務ス是レソノ良策タルヘシ夫ノモンセイ氏ハ能ク日本ノ事務スト疑りを表する。

盡シ此事ヲ決定ニ至ラシム可シソルジュリヤン氏曰ク宜シ足下ニ約ス予必ス及フ限ハ力ヲ

スバリー侯ニ面晤ヲ乞フ可シ依テ其前ニ何分ノ決着アランレーン氏曰ク貴下ノ盡力アルヘキヲ疑ハス我公使近日サリ

一千八百七十八年十月六日於倫敦

3

ヲ希望ス

(右原文)

Strictly confidential

(It is not attempted to give the exact words)

Notes of an interview at the Foreign Office

London Oct. 4th 1878 between Sir Julian Paunceforte and Mr. Stuart Lane.

After various complimentary remarks Mr. Lane said that he had asked for the present appointment

at the wish of the Japanese Minister in order principally to remove a wrong impression which appeared to exist in Sir Julian's mind, judging from what was reported to have been said when Suzuki Kinzo last saw him, as to the action of the United States in reference to the revision of the Japanese treaty.

Sir Julian: I do not think there is any false impression on my mind on the subject. I own I was surprised to find that the text of the convention was refused to us both in America and Japan but we have received information that this is of small importance as the conditions agreed to are only to come into operation after they are also agreed to by the other powers.

Mr. Lane: That is almost exactly what I was authorized to say to you. The accounts in the newspapers were evidently incorrect, and the Japanese Minister at once took the steps to enable him to correct any wrong impression which they might have created at the Foreign Office.

Sir Julian: We were also not at all uneasy on

the subject, as in any case the most favoured nation clause would have entitled us to any advantages given to America.

Mr. Lane: That of course depends on circumstances; but the question as you say could not well arise in this case. I hope however you see the really important value to Japan of this convention. It involves a full recognition of the justice of what Japan claimes.

Sir Julian: Yes, I suppose it may be taken to be an assent on the part of the United States to a readjustment of the Japanese tariff.

Mr. Lane: It goes further than that. I am authorized to say that it concedes all that Japan has asked in the fullest sense. I should add that the same demands as to this revision were made to all the treaty Powers and that the United States has now by this convention formally recorded her readiness to accede to them.

Sir Julian: I understood that all the Powers would be negotiated with together. In fact most of them hove written to ask our views before replying and

we have told them we would let them hear from England about them.

Mr. Lane: That is natural, as to details; but as to the principle involved I conclude each power would decide for itself and this America has done fully, and most of the other Powers have also done so. We are waiting most anxiously for your reply. Sir Julian: Do I understand you that other Powers besides the United States have agreed to your views? I certainly expected they would wait for communications from England before replying.

Mr. Lane: I should be sorry to be misunderstood. My Minister told me that I might inform you what our present position with the other Powers on this subject is. I have been lately in Paris, and the question has been seriously discussed there. We are now in fact merely waiting for reply from England which it is confidently expected will not be the only unfavourable one. I can speak on this point with some authority, as I have been permitted to see the various replies from the Powers. First, America agrees in the fullest sense, France replies

most courteously, and as far as I could understand, I need hardly tell you is a point which has little or Japan should proceed to open up the country which asks for further information and suggests that concedes the demands of Japan in principles applies with Japan is quite insignificant. The same remark do not think Germany has replied, but her trade This was to be expected from Mr. Frére of acting in accordance with free trade principles. principe" but hopes Japan will see the desirability her good feeling for Japan. Belgium agrees "en and points to her readiness to do so, as a proof of jurisdiction. Then Russia agrees as I understand, connected with the nothing to do with the Tariff matter, but is essentially everything is kept waiting by this country. Minister in Lisbon. answer direct to Japan, as there is no to Portugal, who will probably send her question of extraterritorial So you see that practically Orban. Japanese

Sir Julian: You can assure your Minister that we are really not to blame. I am most anxious to get the matter pushed on. All the necessary papers

the replies received, but Japan will surely not think it must be settled by common consent be-Salibury except those absolutely required, all other endeavour to make separate tween the Powers. I observe what you say as to I have done all I can to get this attended to. matters are obliged to stand ovar, but I assure you business. first the Eastern question, and now you can easily understand how overworked we all have been printed, and sent to Lord Salibury but In addition to our regular work we have had I can get no papers returned from Lord terms with any the Afghan of

Mr. Lane: I can of course only express my personal opinion about this. It seems to me that Japan will most earnestly seek for arrangements which will be satisfactly to all Powers. This is why she has made idential applications to all of them, but it seems to me that if any one for instance objected to what was considered a fair settlement, that one could not expect to stop the trade arrangement of Japan, indeed an understanding with the

majority of the Powers on the Tariff question would have to be respected by the others.

Sir Julian: Well, that question does not arise now. I promise you you shall have our answer very soon, but as to France asking for the opening of the country, that I suppose is connected as you say with the Consular Jurisdiction question.

Mr. Lane: Yes, certainly as I think. This point has bot been put forward by Japan for revision at present. At the same time I wish in the interest both of England and Japan that it could be dealt with. The present state of things is deplorable and might be easily remedied, if taken seriously in hand.

Sir Julian: Do you really think so?

Mr. Lane: Yes I do, and in a way that would get rid of nine-tenths of the sores which are always cropping up, such as the opium cases and so on. If you had time I would like to tell you my views of a basis for the settlement of the matter.

Sir Julian: I am very busy as you know, but I should really like to hear your plan. I am sure

you have looked into it carefully. You have been speaking about it at Frankfort the other day, have you not?

Mr. Lane: It was not gone into deeply, but the opinion expressed was greatly in faver of a change. Well, my plan is a very simple one in principle, and I see no real difficulty in detail. Of course I am speaking to you quite conficentially and expressing simply my own views which are based chiefly on the opinion I hear from time to time of the most intelligent Japanese I meet with. They all appear to me to recognize the impossibility at present of leaving Foreigners and their interests entirely to the native tribunals, but they do object to the present system which seems to every one rotten and unnecessary. No one can know the objections to it better than you do.

Sir Julian: I do indeed, well?

Mr. Lane: You probably know that the Japanese have now an admirable code, quite as good and far simpler than many European codes. It was based on the Code Napoleon, with modifications. I

conclude Sir H. Parkes has sent you particulars about this?

Sir Julian: Eo, indeed he has not.

separate by it, thus getting rid of the absurdity of having should agree that all their subjects should be bound improved if necessary, so as to satisfy all fair rebe paid servants of the Japanese Government. against them, by foreign judges who might possibly foreigners are defendants, be administered as regards civil cases in necessary is that for the present this code should different codes. quirements, my proposition is that all the Powers a good code already, or that the one it has can be Mr. Lane: courts for Well, then assuming that Japan has The only stipulation I can see each Treaty Powers with or criminal charges

Sir Julian: I like the idea very much, as a middle course. I think it could work much better than the mixed courts system which does not seem to thrive even in Egypt.

Mr. Lane: I am very glad to hear you say this. Egypt is a sort of cosmopolitan country, but mixed

courts would never answer in Japan. I don't think they would ever be agreed to. A new code, to be used in them would have to be made and the whole system is contrary to the soverign rights of a country. Foreigners should obey the laws of the countries they go to, unless such laws are obviously unjust.

Sir Julian: How would your plan do as regards language?

Mr. Lane: Quite as well as the present one. I suppose English would be the language used by the Foreign judges.

Sir Julian: Would there not be a question of judges of other countries, France or Germany for instance, being appointed.

Mr. Lane: I can't think so, but these are all details. The basis of the idea is that there should be only one code for every one, and that a national Japanese one, instead of twenty. If this were made the starting point, I do not think any serious difficulties as to details would arise. The Japanese are naturally sensitive as to their rights, but as to

a proper administration of justice to Foreigners they could have no objection.

Sir Julian: How about juries?

we have now in Japan. Will you think this over? would agree, judging from the propose some plan based on it. I am sure America is the adoption of the Japanese code. is ing capital punishment, but my thorough convention might also be some special action in cases involvto courts presided over by Foreign judges. in Turkey, with right of appeal, in certain cases, system. Of course as regards small offenses, these difficulty, in fact less so, than under the present first rate judges instead of the amateur specimens England would be very great. diplomatic correspondence. very glad to see England take would have to be treated by the native judges as Mr. Lane: that the odly satisfactory solution of the question Only another details. The advantages to the initiative We should have tone I see no more I should be of

Sir Julian: I will most certainly. At first sight it seems to me by far the best proposal I have

heard. I will talk it over with Lord Salisbury. But do you think really that Japan would agree to it?

one tomorrow. adjustment of details, he would be ready to sign Japan and Mr. Waddington said that subject to commercial treaty on terms of reciprocity with to whether she would be disposed to make a new forgot to name that France has been consulted as wealth of Japan is enormous, but it could not be land than anything. The agricultural and mineral enterprise, which would be more important to Engthan that I think if it were carried out, that the Japan would agree to some such proposal, and more whole country would be opened out to more than my own personal opinion, which is that Mr. Lane: I have no kind of right to express available But to return to the tariff question. I was authorized to name this to to foreigners under the present foreign

Sir Julian: Do you mean to leave the old treaties as they are, with the exception of the commercial clauses?

Mr. Lane: Yes, subject to reciprocal clauses, and the new treaty to contain a customs Tariff between the Powers, to be in force for a certain number of years.

Sir Julian: I think that might afford a capital solution to the present question. Would it satisfy Japan?

Mr. Lane: I am not able to say, but as the matter has been named to the French Government, I conclude there is a probability that Japan would not object to it. Japan would, as I understand it, obtain its proper rights as to fixing its tariff, and mercial treaty just as France and other countries have done.

Sir Julian: I don't think we should make any objection to the Revision taking the shape of a commercial treaty, and I will certainly bear the idea in mind.

Mr. Lane: As you so far seem to like the suggestion, I may tell you that the Japanese Minister has already had it put into some kind of shape,

by having a collection made of the clauses from be compared with Japan in point of civilization. with various countries, some of which are not various commercial Treaties made by England, ф

country would be thrown open? question is it your opinion that were settled, the pressed my own view, but as to the jurisdiction say what Lord Salisbury may say. I have only ex-Sir Julian: So far so good. Of course I cannnot

ing that the tariff question is first settled satisfacforeigners from the interior. that the Japanese would have no wish to exclude other hand if it is settled, I think from what I hear no chance of the country being opened up, on the to nothing else. I am sure till it is settled there is most desirable thing in itself, even if it led directly tion question for some time to come would be a believe torily, for with things are as they are, I cannot matters with us. I can only say, as an Englishman, they Mr. Lane: the by encouraging any serious Japanese I think the settlement of the jurisdicwould further complicate Of course I am assumintercourse

would be very foolish to do so.

of Commerce. his approval to submit the matter to the chambers shall be put at the top of the list. tomorrow for the Cabinet Council, and your papers Salisbury to a settlement. and will think it all over carefully, and urge received the view of the chambers of Commerce do as to commercial affairs. Sir Julian: Very well, I understand your views, Of course they know more than we He is expected here We have already We only want Lord

 $_{
m i}$ mports, but surely the question of principle has to Manchester gentlemen will be against any increase this to the chambers of commerce. merce, they may be useful in advising as to details. be settled in this office, not by chambers of comof duties, as at first sight it looks like Mr. Lane: I am sorry to hear you are referring Of course these

is what they think will be the result on trade of we want to know from the chambers of commerce what will be result of the proposed changes. Sir Julian: Very true, but we must of course

interest to do so. is very easy for America to consent, it is the import duties does not affect her much. manufactured goods to Japan, so that an increase in all in her tea from Japan, and taking off the export duties is what you tell us you propose to do. increasing the import duties, because that is really doing away with the export duties in Japan and favor. You see, she takes almost all the She sends again Of course it very few her

the first to stand up for the rights of other nations. principles more than by interest. They are always think the Americans are led by sound international Mr. Lane: Of course that is so, but I really

in Japan they like opposing our policy. sometimes to make difficulties for others. I fancy Sir Julian': All right, but I think they interfere

and perhaps proposed it. I am sure it would be not true, but I think they would like to have one, the papers said about a secret treaty with Japan is nese favor than the United States. No doubt what is far more likely to bid against England for Japa-Mr. Lane: Perhaps they do, but I think Russia

> good policy for England to come to the to take a fair view of Japanese affairs. Mr. Mounsey is coming home, for he really seemed take the lead in settling all difficulties. It is a pity front and

can in my power to have things settled. Sir Julian: Well, I promise you I will so all I

and I will ask for an early interview with Lord Salisbury arrived at. Mr. Lane: hope before then some decision will be I am sure you will. The Minister

London,

6th, October, 1878.

附屬畫二

千八百七十八年十月十七日ソルジュリヤンポンスフォー ト氏トスタールトレーン氏對話ノ筆記

ソル、ジュリヤン云

足下拙者ニ別段面會ヲ要セラル、由何事件ナル哉

ン云

日本條約改正ノ件ナリ足下モ知ラル、如ク過日我公使 サリスボリー侯ニ面會ラ得テ概略滿足ノ談判ヲ遂ケラ

ンボリー侯ニハ尚未タ之レニ不快ノ意ヲ存セラル、カ如デハ充分辯解ヲ盡サレタルニ拘ハラス足下及ヒサリステハ充分辞解ヲ盡サレタルニ拘ハラス足下及ヒサリスレタリ然レトモ其際公使ヨリ今般ノ米國條約ノ事ニ付

ソル、ジュリヤン云

ラ取ルへキ故ニテモアラハ此處置ニモ及ハルへキ事ナ 意ヲ得ス若シ我國ニ於テ日本ノ請求ニ應サセルノ意見 度行サレサル者トハ了知シナカラ之ヲ秘密ニシテ日本 度行サレサル者トハ了知シナカラ之ヲ秘密ニシテ日本 変に米國トモ其詳細ヲ我國ニ明示セラレサルハ余等其 の、我國並ニ其他ノ各國モ皆共ニ同意ノ後ニアラサレハ

レーン云

ソ

レーン云

日本ハ共自國ノ税則ヲ制定スルノ權ヲ要スルノミ致テ日本ハ共自國ノ税則ヲ制定スルノ權ヲ要スハニアラス勿論外國ニ於之ヲ不斷變換スルノ權ヲ求ムルニアラス勿論外國ニ於之ヲ不斷變換スルノ權ヲ求ムルニアラス勿論外國ニ於

ソル、ジュリヤン云

ニ米國カ同意セント唱フルカ如キハ實ニ愚モ亦甚シ得ヘキノミ單ニ布告ヲ以テ日々ノ變換行ハルヘキノ事日本ハ只他國ノ振合即チ佛國カ行フタル如クニスルヲ

寺島外務卿時代

三七

1

ン

テ却テ害アルノミで却テ害アルノミをい宜シケレトモ秘密ニスルハ何ノ故乎交際上ョリシ夫ハ宜シケレトモ秘密ニスルハ何ノ故乎交際上ョリシ夫ハ宜シケレトモ秘密ニスルハ何ノ故乎交際上ョリシ夫ハ宜シケレトモ秘密ニスルハ何ノ故乎交際上ョリシ

レーン云

チ右請求ヲ論出スルノ理アルヲ保證ス多上緊要ナル事第二等ニ位スルノ國ニ於テ我カ請求ノ 多上緊要ナル事第二等ニ位スルノ國ニ於テ我カ請求ノ

ソル、ジュリヤン云

難キハ米國自ラ之ヲ明知セサルニ非ス其故ハ既ニ昨日リト云ハサルヲ得ス先キニ曾テ我國竝ニ其他ノ諸國トリト云ハサルヲ得ス先キニ曾テ我國竝ニ其他ノ諸國トの獨リ機密ノ條約ヲ爲ストハ實ニ慣例ニ背違スルノ處と別単章唯是レ無益ニ己レノ信實ヲ信セシメント欲スルノ巧ミタルノミ但シ此ノ條約ノ其儘ニテ決テ行レスルノ巧ミタルノミ但シ此ノ條約ノ其儘ニテ決テ行レスルノ巧ミタルノミ但シ此ノ條約ノ其。

為スヲ得ヘシ

ソル、ジュリヤン云

其故如何

レーン云

事ヲ明示セリ
北ノ條約ノ事ニ就テモ米國外交往復書中ニ其意ヲ記スルモノアリ之ヲ貴閱ニ供スヘシ即チ干八百五十六年ニ於テ最初ノ條約ヲ議定シタルトーンセント、ハルリス於テ最初ノ條約ヲ議定シタルトーンセント、ハルリスニ暗ク自國ノ國益ヲ保護スルノ道ヲ了知セサルヲ以テ此ノ條約ハ只一時ノ假條約ノ如キ者ト看做スヘシトノ此ノ條約ハ只一時ノ假條約ノ如キ者ト看做スヘシトノ此ノ條約ハ只一時ノ假條約ノ如キ者ト看做スヘシトノ

ソル、ジュリヤン云

段遲延ニ及フヘキノ事故トテハ更ニ之レナキカ如シ得ヘシサリスボリー侯ニモ申談シタルニ此事ノ談判別得ヘシサリスボリー侯ニモ申談シタルニ此事ノ談判別ハ只其改正ノ方法ト其時期トノミ偖テ今日ハ他日面晤然リ條約ハ素リ改正ヲ加フヘキモノト雖モ論ノ在ル所

レーン云

余カ長官此由 昨五月中判然報知ニ及ヒ置タ ノ報知ヲ要サル、 ヨリ話シアリタル如ク右改正ノ事今ヨリ倘一ケ年 ヺ カ ハ喜悦タル 無ラン事ヲ希望ス此方ニ於テ **ヘ**シ ル ナ 就テハ y サリス 25 ボ 旣

ソル、ジュリヤン云

ヲ要セサルヲ得ス
・税別改正ノ條款ニ付テハ之レカ適當ノ報告アラン事ン報知ヲ主張セサルヘキハ余ニ同意セラレタリ然レトサリスボリー侯モ嚴ニ條約面ノ文意通リナルーケ年前サリスボリー侯モ嚴ニ條約面ノ文意通リナルーケ年前

レーン云

日本政府ハ決テ輸入者ニ對シ不當ノ處置ハ爲サ、ルヘ日本政府ハ決テ輸入者ニ對シ不當ノ處置ハ爲サ、ルヘ

ソル、ジュリヤン云

誠ニ然リ

ーン云

條約ノ件ニ付足下御不滿ノ意ヲ辯解致サンカタメニシ余カ今朝罷出タル譯合ハ全ク前ニモ述ヘシ如ク米國新

ル、ジュリヤン云 聞ク所モアリ右條約ノ條款ヲ了解スルハ容易ナレト ズル 余ヨリサリス ルトモ更ニ盆ナカルヘシ尤過日貴公使ノ言ト又余等 貴公使ノ用意ニ感佩ス ノ許サレサル所 右ハ極メテ秘密ノモノナレハ其寫ヲ足下ニ呈スル テ之ヲ一覽アラハ日本聊カ英國ニ對シ不當ノ利益ヲ要 テ余公使ノ許可ヲ受ケ右新條約ノ寫ヲ齎ラシ來 ノ意ナキヲ足下ニ於テ滿足セラル、ニ至ラン但シ ボリ テリ 一侯 ル所ナレ へ其條款ヲ通知スヘキニハアラ 1 Æ 如是ニシテ之ヲ見 ŋ ハ余 7 £

ソ

レーン云

サル

ヘシ

古り、これでは、おり、一次のは、で

ソル、ジュリヤン云

然ラハ右寫一覽ヲ乞フヘシ

シテヨク此時米國條約ヲ逐款讀過シテレーン氏ジュリヤン氏ニ指示

一 日本ニテ其自國ノ稅則ヲ制定スル事ヲ充分ニ同意シルノ權ヲ認許セルナリ而テ其規則ハ外國人之ヲ遵守ルノ權ヲ認許セルナリ而テ其規則ハ外國人之ヲ遵守シ必要ノトキハ領事廳ニテ處置スヘキ所ノモノタリ

ナリアルハ是レ卽チ領事裁判ノ當分ノ者タル事ヲ示セル第二 右條約中治外法權ニ關スル舊規則實行中云々トノ事

ニ付亦明約アルナリ第三 舊條約中殘餘ノ條款及ヒ新條約ヲ改正スル專權ノ事

早此承諾ヲ取消スヲ得可ラサルナリストアレトモ若シ各國之ニ同意ノ上ハ米國ニ於テ最第四 第十條ニ因リ此條約ノ條款實行前ニ各國ノ同意ヲ要

亦左ノ意見ヲ陳述シタリ

第一條二就テジュリヤン云

寺島外務卿時代 三一七

分ス 此日本ノ法ハ之ヲ遵守セサル 札ヲ申シ請ケ鑑礼料ヲ納メサルヲ得サルモ英國ニ於テ シ例 スルヲ得ヘキモノト想像スル ヲ察シタリ各國皆其自國內地ノ法例ヲ他國ニ在テ施行 罰金納方ノ論ハ日本ノ方直ニシテバークス氏ノ曲 頃銃獵規則一件ニ係ル書翰ヲ一見シタル事アリ其時ノ ルハ固ヨリ至當タリ余レ襲キニ未タ外務ニ奉職 日本ニテ其内地 アラサルナリ ンニ其國法ニテ國人ノ旅宿ヲ營業トナス者ハ其營業鑑 ハ其法則ナク無鑑札ニテ旅館ヲ營ム事 ヘキ へハ爰ニ日本國内ニ居住ノ許可ヲ得タル英人アラ 事更ニ意存ナシ規則遠犯ノ罰金ヲ日本ニ納ム(vン 共内地ノ規則ヲ設立シ領事裁判ヲ以テ之ヲ處 Ŧ ハ質ニ愚ノ至リト 可ナリ 自由ナルニ依り ト論スル 一云フへ セサ 7 ナル

第二條ニ就テ同氏又云ク

公平ノ審判ヲ得ルニ在ルノミト而テ魯國ハ現ニ 領事裁判法ハ全ク一時ノ者タリハ 氏叉云ク其裁判權ヲ 其制限ヲ心得サルナリ素ヨリ此法ノ主意タル ラ日本ニ附與セシ が與ス トノ事ヲ告知セラル ル ハ更ニ非常ノ事 ルリー、 パー ` 戸於 右領事 モア ヤ ス テ

得の決テ國權ヲ犯ス所ノ者ニアラスと対対國権ヲ犯ス所ノ者ニアラス若シ英國ニ在ル英國ノ人員夥多ニシテ之ヲ要スルニ宜キヲ領事裁判ナル者ハ其本旨ヲ明ニシ之ヲ處スルニ宜キヲ領事裁判ナル者ハ其本旨ヲ明ニシ之ヲ處スルニ宜キヲ得の決テ國權ヲ犯ス所ノ者ニアラス

レーン云

余ハ足下 若シ至當ナル日本ノ請求ニシテ承認セラレスンハ漸ク 外國人就中英國人ニ待遇セラル、ノ公平ナラサルヲ信 必スヘシ今ヤ日本人民ノ心ニ於テハ其正否ハ兎モ角モ 日本ヲシテ之レカ改正ヲ爲スヲ得サラシムルトモ若シ ニ其説ノ日本ニ對シ寬大ノ意アルヲ喜フ實ニ此趣意 シ而テ日本ニ於テハ終ニ其目途ヲ達セスシテハ已マ ルヘケレハ輸入税ノ如キハ假令今各國ニテ之ヲ拒ミ (三消滅ニ就キタル外人敵視ノ情必ス再發スルニ至ル 七リ是レ今日ニ政策ノ變更ヲ要スル所以ナリ然 ニ於テハ漸々兩國間ノ紛紜モ隨テ消滅ノ期ニ至 ノ論説ニ悉クハ同意ナル能ハスト云へト ルニ ·モ 大 n 7 ナ

、二於テハ此等ノ處置モ總テ無益タルヘシキニハ相違ナカルヘシ然レトモ公平ニサへ待遇セラルキニハ相違ナカルヘシ然レトモ公平ニサへ待遇セラルスリー倫便利ノ法ヲ以テ不開港地ニ輸入ヲ許ルス等ノ

ソル、ジュリヤン斷然トシテ云

下宜シク之ヲ信用セラルヘシ英國ハ固ヨリ日本ニ對シ公平ノ待遇ヲナサント欲ス足

レーン云

ノ實ニ喜悅ニ堪ヘサル所ナリ日本條約改正ノ要求ヲ容易ク承諾セサラシムトノ事ヲ日本條約改正ノ要求ヲ容易ク承諾セサラシムトノ事ヲ余兼テ確實ナル所ヨリ英國ハ其威權ヲ以テ各國ヲシテ

ソル、ジュリヤン云

見ヲ問ヒ來ルアリ因テサリスボリー侯ノ許可ヲ得タルルニアラス尤モ各國ヨリハ此稅則一件ニ付キ我國ノ意トハ書通シタル事モアレトモ敢テ夫等ノ事ヲ申述ヘタトの書通シタル事モアレトモ敢テ夫等ノ事ヲ申述ヘタ

成ルヘク保護スヘキハ勿論ノ事タリとニテ我カ印刷ノ書類中ヨリ各國ニ要用ナルヘキ分ヲ上ニテ我カ印刷ノ書類中ヨリ各國ニ要用ナルヘキ分ヲ上ニテ我カ印刷ノ書類中ヨリ各國ニ要用ナルヘキ分ヲ上ニテ我カ印刷ノ書類中ヨリ各國ニ要用ナルヘキ分ヲ

レーン云

足下ノ言余カ滿足之ニ過ルモノナシ速ニ此由ヲ我公使

ソル、ジュリヤン云

大ニ裨補アラン
大ニ裨補アラン
大ニ裨補アラン

レーン云

ル、様致スヘシ早速我カ公使ニ告ケ同使ヨリ日本國へ電信ヲ以テ窺ハ

ソル、ジュリヤン云

スヘキ旨傳言アラン事ヲ乞フシタレハ成ルヘク同氏ノ意ニ據リ條約改正ノ儀ニ着手シタレハ成ルヘク同氏ノ意ニ據リ條約改正ノ儀ニ着手が見し、極度のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、のでは、

於龍動府千八百七十八年十月十八日

(右原文)

Strictly Confidential

(It is not attempted to give the exact words.)

Note of an interview on the 17th of October
1878 between Sir Jurian Paunceforte &c Mr.

Stuart Lane.

Sir Julian. I understand you wished particularly to see me. What was it about?

Mr. Lane. About the Revision of the Japanese treaties. As you know the Minister had an interview the other day with Lord Salisbury, which in most particulars seems to have been very satisfactory to him, but he still believes that in spite of the Explanations which have been given, there remains an unsatisfactory impression on Your mind and

also on Lord Salisbury's, as to the late American Convention.

Sir Julian. Well, I will not disguise from you that the whole proceeding has created a bad impression here. I am of course aware that the conditions of the convention were not to take effect until they had also been agreed to by us and others but it is unintelligible why there should have been all this secrecy about the matter, and all details withheld from us both in Japan and in America. If anything could have made us wish to take an unfavorable view of the claims of Japan, it would have been these proceedings.

Mr. Lane. Allow me to say that would not have been just to Japan. The United States, apparently for some reason best known to themselves, wish their arrangement to remain private at present but as you have been informed, this convention is practically only a full adhesion to the demands of Japan, as made to all the Powers. The same instructions were sent to all the Japanese Representatives, at least so I believe.

Sir Julian. Very good, but then again why this mistery? It seems to me a most unwise business, looking at it in a diplomatic point of view. It would have been a fine move for your Minister to have come openly to England with America's Consent, and to have used this as an encouragement to us to decide in the same way at once. As it is, it only does you harm.

Mr. Lane. There I must differ from you. It may or may not have been the best way of proceeding, but it must do the interests of Japan good, for the second most important country (commercially) to have acknowledged the justice of all the claims. In fact it stains authoritatively the right to put them forward.

Sir Julian. Yes certainly, and perhaps I should say that it is of the United States we ought to complain the most. Here is a country which has signed a treaty or convention jointly with ourselves and other Powers—I mean the one of 1868—and which goes and makes a secret arrangement without consulting us or as far as I know any of the

simply laughed at the idea of Japan altering its us that Evarts, in Washington Thornton yesterday or the day before it stands. We had a despatch from British Minister not be done by any civilized state in such a way. tion. As he said, it would stop all trade, and could tariffs as it might like from day to day by proclamawhich distinctly allows this. this convention never can or will be operative as costs them nothing. They know perfectly well that you all believe in their good nature in a way that (rather excitedly) simply a sharp trick to make co-signatories. This is contrary to all usage. It is Secretary of State in Washington, In fact Thornton tells

Mr. Lane. Japan claims the right to fix her own tariffs, not to alter them from day to day. It seems to me quite natural that other nations should ask Japan to settle her tariffs for some definite time, so as to make trade safe for importers, but that would be done, if proper commercial treaties were made with her.

Sir Julian. Japan can only expect to do as other countries have done, like France, and I say it is all

nonsense the Americans (are?) pretending they are willing to agree to the possibility of daily changes as I said by mere proclamation.

Mr. Lane. You see the assent of the States to the Japanese demands might be taken as a foregone conclusion.

Sir Julian. Why so?

Mr. Lane. Because the whole tendency of their policy is to recognize the right of nations, and in this particular case they were so to say committed by their diplomatic correspondence, which I should be happy to show you.

Townsend Harris, who negotiated the first serious treaty in 1856, writes at the time most clearly that he considers it only of a temporary charcter that the Japanese had then no knowledge of foreign affairs to enable them to protect their own interests

Sir Julian. Yes of course, the treaties have to be revised, the question is how and when. Bye the by I can say more to you about our views now than I could when I last saw you. I have talked

the matter over with Lord Salisbury, and we see no cause for delay.

Mr. Lane. My chief will be glad to hear that, but I hope I may understand that you are not going, as Lord Salisbury suggested, to expect a further year's notice of the Intention to revise. We consider that quite clear notice was given last May.

Sir Julian. Lord Salisbury agreed with me that England should not wish to insist on what he thought was the strict interpretation of the treaty about this, but we should expect proper notice of the changes in the tariff would be given.

Mr. Lane. I feel sure the Japanese Government would not wish to deal unfairly with importers, but the treaty could be revised, and the alteration in the tariff become operative after a given time.

Sir Julian. Just so.

Mr. Lane. My real reason for calling this morning was as I said to try and remove any unfavorable impression on your mind, as to the new American Convention, and to do so, the Japanese Minister authorized me to bring with me a copy of it, so

that if you like you might satisfy yourself that there has been no wish to take any undue advantage over England. Of course it would be treated in the strictest confidence, and I can not (be?) permitted to offer you a copy of it.

Sir Julian. I do not see any advantage in my seeing it in thus way, though I am very much obliged by Your Minister's courtesy. His assurance the other day, and our own information make us quite easy as to its contents. I conclude I should not even be at liberty to name its contents of Lord Salisbury.

Mr. Lane. On the contrary, I am sure my Minister would wish you to let Lord Salisbury know about it. His reason for not taking it to him himself is that he considered I could show it to you more easily in quite an unofficial manner.

Sir Julian. Well then I shall be glad to see it.

The American convention was then read clause by clause. Mr. Lane pointed out to Sir Julian I, that besides agreeing in the fullest sense to the Japanese fixing their own Tariff, it recognized their

right to make harbour and other regulations without interference by consuls, which would be binding on foreigners, and carried out when necessary by the Consular Courts, that this was contrary to the apparent pretentions of Sir H. Parkes. II, that the convention infers clearly the temporary character of the Consular Jurisdiction, by stating that certain things will happen, while the old regulations respecting extraterritorial jurisdiction remain in force.

consent to those or similar conditions, if agreed to pressly stipulated for. the old treaties and as to the new convention is ex-Paunceforte to the following effect. time America could now no longer withhold her before the conditions were operative, at the same X the adhesion of the other powers was necessary interesting remarks III, that full power of revision as to the rest of the other Powers. were IV, that although by Article On these points made bу Sir Julian some

On the first point Sir Julian said that he saw no kind of objection to this, that Japan ought to be able to frame her own internal regulations, and

shooting question, and that he considered Sir H. should be, that he had read some despatches received that he was glad to see the fines for then infracthat these should be enforced by Consular Courts, his being reminded that Russia had actually accorded that its object was only to secure justice," and on Parks evidently did not understand its real limit; Jurisdiction was a temporary one; that Sir Harry without taking a licence." On the II, point Sir it did not exist here and claim to start an hotel for keeping an hotel, it would be absurd to contend obliged natives to take out and pay for a license allowed to settle in Japan, and a law existed which instance he said, to supposs that each country could carry about as to the payment of the fines, that it was ridiculous Parks was entirely wrong and Japan entirely right before be joined the tions were payable to Japan, that this was as it Julian said: that an Englishman could ignore this law, because with it its own "no doubt the system of consular "supposing an Englishman were internal or municipal laws, Foreign Office, about the

it to Japan, he said, "that there was nothing extraordinary to him in that, that he could see no reason if it were wanted, and fair grounds could be shown, why it should not be granted to Japanese or Chinese in England, if they were numerous, that he did not think that people should have justice administered to them anywhere in a way they could not understand, that Consular Jurisdiction properly understood and administered was no infringement of national rights."

Mr. Lane. On this said that even if he could not fully agree with all Sir Julian had said, he was delighted to recognize the extremely liberal spirit which his remarks evinced towards Japan, which he was sure would tend to do away with all difficulties between the countries that a change in policy was eminently wanted, as the Japanese people rightly or wrongly, believed they were not fairly treated by foreigners, particularly by the English, that a want of fair recognition of Japanese claims might well reproduce all the hostility towards foreigners which had been dying out, and

that it could do no good as the Japanese were sure to gain their ends ultimately, that as to import duties, even if the Powers succeeded in preventing Japan from altering them, the result could be arrived at, though not so well, by giving bounties to native industries in one way or another, or even by permitting natives to import say into some closed ports on better terms than foreigners, but that all this was unnecessary if Japan were fairly met.

Sir Julian then said in a most decided tone, "me wish to treat Japan fairly in every sense. You can say so with the fullest confidence."

Mr. Lane. I am really delighted to hear this, for I may now tell you that it is quite contrary to the general opinion, particularly abroad. I have even been told, in quarters where there ought to be no possibility of any mistake that England had been using her influence with other Powers to prevent their acceding, as readily as they would be inclined to do, to the demands of Japan on the revision question.

Sir Julian (most positively.) I can assure you,

have to look at what is practicable and to protect further them as much as we can. totally false to assume that we wish to go against ments, the information, I think likely to be useful consent, I had extracted from our printed docuviews as to the tariff, and with Lord Salisbury's Powers have naturally enough applied to know our nothing the interests of British trade as much as possible. the wishes of Japan. to them, and this will be shortly sent them. It is powers, only I think with one, and in that case little or no correspondence on the subject with any Mr. Lane, this is false, totally false. There has been of the kind was suggested. On the contrary we wish to Of course we The other

Mr. Lane. Nothing can possibly be more satisfactory than your statement which I shall at once report to my Minister with the greatest pleasure.

Sir Julian. You can also assure him from me that I will do all I can to promote a fair settlement. I will make a point of seeing Lord Salisbury this afternoon and I will tell him what has passed. I see no reason for delaying the negotiations. But

I may tell you that I consider it could assist the views of Japan materially, if a copy of the American Convention could be sent to the Foreign Office. I am sure of this.

Mr. Lane. I will of course name this to his Excellency and urge him to telegraph to Japan for instructions.

Sir Julian. Please also to tell him that I consider his last interview with Lord Salisbury and his permitting you to explain his position as you have done has cleared away many difficulties and that we are ready to arrange for a Revision of the treaties as far as possible in the sense he wishes.

London, 18th Oct. 78.

三一八 明治十二年十二月十三日 寺島外務卿宛 上野駐英公使ョリ

交渉經過報告竝ニ新通商條約締結方ニ關シ稟請

附屬書 一 明治十一年十一月二日英國外務卿ヨリ上野駐

外軸回復要求ニ對スル 英國ノ意嚮回欠

國外務卿宛書翰寫 则治十一年十一月十三日上野駐英公使ヨリ英

右ニ對シ辯駁ノ件

條約改定事件別信第三號報告 十二年一月六月到

紙寫(口 千八百五十八年ノ條約書ニ附屬ノ稅額ヲ方今日本政府理財 可ラサル言辭ニ屬スルガ如シト雖モ先號報告書ニモ記載イ クス氏ノ意見報告書ヲ其儘摘用シ來ルモノニシテ甚滿足 來猶屢々當政府ノ決答催促ニ及候處別紙寫(イ印) 税權回復一件 · 權ヲ相委候テハ不練熟ナル理財家ノ考案ヲ以テ朝暮 :條約ヲ結バントノ譯ニ相決シタル樣被察勿論パー 緊要ニ對シ幾分カ適當ニ增加シ其增加ノ額ヲ以テ更 シ置候通到底英政府ノ趣意ハ日本政府ニ勝手ニ稅額 不滿足ナル報告ヲ爲セシハ此條約改定ニ多少ノ ョリノ答翰落手イタシ候間其不充分ナル个條ニ 印)ノ通辯駁ノ書翰差出申候右答書 シ直ニ通商 三付テハ先便別信第二號ヲ以テ報告仕置 ノ停滯ヲ醸スカ如キ専有ル フ主意ハパ 可 キヲ以テ ノ通外 ・クス氏 對 %得ヲ與 候以 變更 シ 別 ス 1

正ヲ要求スルノ報知書ト不被認姿ニ相見得實ニ意外ノ事ニ閣下ヨリノ訓狀相添拙者ヨリ外務卿エ差出候書翰ハ條約改 段有之間敷然ラハ其爲御委任狀御渡無之テハ實際ノ談判相 欲スレトモ拙者ニ於テハ固ヨリ其權理ヲ有セサルヲ以テ彼 候尤英政府ハ我ヨリ此通商條約ヲ企謀スルノ手段ニセント 方今ノ模様ヲ以テ考ルニ前述ノ通商條約ヲ結ムノ外他ニ手 了解可被下候尤英政府ニ於テハ拙者ノ辯駁書落手イタシ候 亦先便差出候御雇書記官レーン氏ト外務大輔サー、ポンス 有之候此儀=付テハ拙者外務卿エ談判ノ節モ詳ニ申述置猶 今回外務卿ヨリ答書ノ意味ニヨレハ本年五月四日附ヲ以 方ヨリ發議有之候樣外務大輔等エモ内談イタシ置候 企望セハ我政府モ固ヨリ之ヲ拒絕スルノ理由無之樣被相 叶不中候間先便ニモ相伺置候通速ニ御委任狀御下附ノ サル リ外務卿宛ノ辯駁書中ニ委細辯論イタシ置候間右ニテ御 ヲ以テ考ルニイ 夕 ハ此儀ニ付殊更ニ異議無之事ハ充分ニ信用イタシ候最早 ト氏ト内話應接書中ニモ記載有之通ノ次第ニテ則拙者 ナシ故ニ ザル所 英ヨリ ヅレ 三有之候得共亦歐洲 互相ヲ理ニ基キ通商條約ヲ爲サント モ商家ノ準據ト ナル可キ通商條約 一般通商國五 ラ關 テ ア

混雑兩議ノ合セサルョリ構戦ヲ醸ス等ノ事ナキハ萬々疑フ シ仲裁ノ法ヲ以テ決ヲ取ル可シ方今ノ時勢ニ於テ通商 ノ理ヲ主張シ他政府ノ不同意アラハ之レヲ仲間ノ政府ニ托 ノ要求ハ適當ナルモノニ付飽迄モ其斯クセザル可カラサル 評議有之度候此事件 、カラザル事ニ付一步モ自己ノ ハ後便ニ報告可仕候以上 、タラウル、チユウィス氏エモ屢々意見相尋侫處我政府 Ξ 付當府 ニテ有名ナ 論旨ヲ屈スルニ及 ル 萬國 公法家 ハスス 卜委 上ブ 1)-

明治十一年十一月十三日

全權公使 上 野 景 節

外務卿 寺島宗則殿

附屬書一

t:b

償ハンカ為メ相當ニ歳入ヲ増加スルノ目的ニ非スシテ保護延引候扨今般貴政府ニテ條約改正ヲ要セラル、ヤ其歳出ヲ貴國駐劄我公使へ照會ノ為メ時日ヲ消過シ止ヲ得ス貴酬及貴額限ニ接手熟讀致候然ルニ早速我政府ノ意見可申進ノ處費我兩國間條約改正ノ件ニ付貴政府ヨリ閣下へ送致アリタ貴我兩國間條約改正ノ件ニ付貴政府ヨリ閣下へ送致アリタ

課スル 入ヲ許 過ヲ致シ其内關稅ノ超過四十五萬ドルニ下ラザルノ趣然ル 七八年度ノ歳入豫算ト其實際收額トハ凡ソ五百萬ドル 當トハ看認メ難ク且貴國於テ產出シ得ベキョリ之ヲ買フニ 夕當ヲ得タリト爲ス可ラス其故 條約ニ於テ僅ニ五分ヲ高度トスルノ輕稅ヲ以テ外國品ノ輸 ノミナラス却テ貴政府ノ損害タル可ク候又貴政府 之且ツ輸出税ヲ廢スルハ貴我貿易上ニ更ニ著シキ = 明白ニ有之候將又貴國現行ノ收稅法ニシテ貿易上更ニ衰微 サレントスルハ却テ兩國ノ工業上ニ不測ノ大害ヲ與フル事 尙廉價ナル外國品ノ輸入ヲ抑壓シ以テ内國ノ産出ヲ保護致 中御論旨ノ廉ニテハ貴國ニテ保護稅法ヲ採用セラルルヲ至 政策ヲ實行致サレント レカ爲メニ防害セラレ隨テ其衰微ヲ來タスヘキ ノ徴候アルヲ見ス實ニ我政府ノ聞ク所ニ由レハ千八百七十 上甚々乍遺憾我政府ノ所望スル能ハサル所ニシテ何分貴翰 今輸入税ヲ重クセハ右様漸々繁盛ニ赴ク處ノ貿易頓ニ夫 キハ到處殆ト皆苛稅ヲ課スル ハ單ニ ルスモ他國ニ在テハ之ヲ日本貿易ニ報ヒス茶煙草ノ 茶煙草ノニ品 ノ主意ナルニ於 ノミ 丽 ヲ愁訴セラレ ハ我國ニ於 テ目 テ 一本ョリ ハ貴我兩國ノ利益 テ日 年 候得共此言未 - 本産ニ ハ勿論ニ有 々茶ヲ輸出 和益ナキ ハ現行ノ ノ超

寺島外務卿時代

等ノ論ハ姑ク擱キ閣下ハ日本ノ國權ニ屬スル者トシテ自國 本産物ハ悉ク無税ナリト雖モ却テ貴國ニ テ我國ニ輸入スルハ僅ニ其一部ニ有之其他我國ニ 自由ヲ得ントノ趣意ナル乎果シテ然レハ如是ノ方法ハ貿易 候處右ハ關稅賦課ノ事ニ係ル諸條約中ノ條款ヲ冤レ何 ルモノハ專ラ此ノ確實不易ノ大本ヲ失ハサランカ爲メナリ 通慣ニ悖反致候儀ニ候元來歐洲各國五ニ貿易章程ヲ締成ス ヲ問ハス貴國ノ意見ニ隨テ勝手ニ其貿易稅目ヲ改正スル ノ需要ト利益トニ應シ税目ヲ制定スルノ自由ラ要求セラレ ハ僅カニニヲ除クノ外盡ク稅アラサル 且又貴政府ニテ千八百五十八年ノ條約中貿易關稅ノ條款ガ (ハ)到底貿易ノ衰微ヲ來タスノミナラス太タ通商各國ノ ノ盛衰ニ關スル所ノ稅則ニ(テ)確實ナル基本相立スシテ 條約第二十二條ニ基キ改正コ要求セラル、日本ノ權理ハ我 ルノ價額ハ大約百萬磅ノ高 カ我政府ノ更ラニ解セサル所ニ候尤モ千八百五十八年ノ 本ノ國權ヲ犯スモノトセラル、ハ抑モ何ノ原由ニ依テ然 輸出ハ年々平均五萬磅ニ上ラサル實ニ僅少ナル高 所 ニシテ同國ニ於テハ其品無稅ニ屬ス夫ニ比スレ ナルニ其大概ハ合衆國ニ ハナシ然シナカラ此 輸入スル我國産物 輸入ノ日 ニシ ij. 時 7

十二條ノ文左ノ如シれ二條ノ文左ノ如シれ二條ノ文左ノ如シにハ敢テ我政府ノ承允致シ難キ所ニ候即チ該條約第二中サルヲ得スシテ條約中ニ明示スルモノヨリ尚便益ナラサ府ノ政策ナルニ於テハ我政府ニテモ右个條ノ文面ニ依リ論政府ニ於テモ充分之ヲ認許スト雖モ告ケラル、カ如キ貴政

七月一日以後ニアルベシー年前ニ通達シテ再駿ヲ爲スヘシ其事ハ千八百七十二年一年前ニ通達シテ再駿ヲ爲スヘシ其事ハ千八百七十二年

現存ノ税目ヲ信シテ豫シメ巨額ノ金員ヲ支出シタル商人モ 守スルノ由緣ハ獨リ條約ノ文面然ルカ爲メノミナラス且ハ 月前ノ通知ヲ爲ス事至當タル可シ我政府ニ於テ此條款ヲ固 然ルニ貴政府ヨリ七ケ年以前右改正 明示セサルヲ得ス 載スヘキ 又條約ニテ要スル リ今般尚現行條約ノ改正ヲ請求セント欲セハ改メテ同十二 モ其期ニ至テ之レカ談判ニ着手スル アルヘキニ依リ公平ニ其利害ヲ保護センカ爲メニ有之候將 ナレハ日 所ノ通知ニハ實驗上改革ヲ要スル條款ヲ 本政府ハ何々條款ノ改正ヲ要スト其旨ヲ ラ 通知 ノ意ヲ拋却シタル ハアリ タ リ **三**因 ŀ

我政府右ノ通知ヲ得ルニ於テハ貴政府所要ノ改正條款果シ

我政府ノ冀望致ス所ニ族の人情國人會計上且一般ノ利益ノ爲メ至常ト思惟スル者ハ成テ貴國ノ宣易通法ノ主義ニ尚一層適應スル所ノ者ヲ以テセラレン事致・ル、改正ハ五月四日附貴翰中ノ意見ノ如キニ基クモノ致・ル、改正ハ五月四日附貴翰中ノ意見ノ如キニ基クモノ政・力の大力を表に、一般ノ利益ノ爲メ至常ト思惟スル者ハ成テ貴國ノ會計上且一般ノ利益ノ爲メ至常ト思惟スル者ハ成テ貴國ノ會計上且一般ノ利益ノ爲メ至常ト思惟スル者ハ成テ貴國ノ會計上且一般ノ利益ノ爲メ至常ト思惟スル者ハ成

千八百七十八年十一月二日

^ リスボリー手記

(右原文)

Lord Salisbury to Wooyeno
Foreign Office,
November 2, 1878

Sir,

Your letter of the 4th of May last, containing a copy of the instructions which you have received from Your Government on the subject of the proposed revision of the Treaty between Great Britain and Japan, together with your observations thereon, have been carefully considered. Some time has

necessarily elapsed in order to enable me to communicate with Her Majesty's Representative in Japan, and therefore I have not at an earlier date been able to lay before you the views of Her Majesty's Government upon the important questions raised by it.

attempt to protect native industries by shutting out or justified by any of the considerations adoption of protective duties by Japan is called for deprecate. Her Majesty's Government can not too strongly protection, which, in the interests of both countries, avowed object of carrying into effect a policy of increasing that the revision of the Treaty is sought for by be produced at home would be attended foreign manufactures which can be purchased at a cheaper rate by the Japanese people than they Your Government, not for the purpose of obtaining In the first place I must express their deep regret reasonable letter, and national They are addition of revenue to meet they expenditure, unable to admit are convinced that but that with

most injurious results to the industries both of England and Japan.

Nor do Her Majesty's Government Consider that the present revenue system of Japan has shown any indications of commercial stagnation. Indeed, as they are informed, it is working so well that the estimates of revenue for the Year 1877-78 have been exceeded by the receipts to the amount of about five million dollars, and that the Foreign Customs have shared in this increase to the extend of no less than four hundred and fifty thousand dollars.

It cannot be doubted that this gradual development of trade would be immediately checked, and trade itself paralyed by the inposition of high import duties, while the abolition of export duties would involve a serious loss to the Japanese Government without giving any sensible impetus to the trade with this country.

You complain that the trade of Japan obtains no compensation in other countries for the facilities granted by the existing Treaty obligation of the

the United States, where it pays no duty at all, of the annual export of tea from Japan, which may which pay duty in England, and nearly the whole out however, that this complaint is not well founded. instance, tea and tobacco are taxed almost everymaximum duty of five per cent, and that, for goes to England. fifty thousand pounds, and only a portion of that tobacco from be valued at one million pounds sterling, goes to Tea and tobacco are the only Japanese where at exceptionally high rates. I would point Japanese Government to admit foreign goods at a while the average value of the annual export of Japan is insignificant, being under products

Every other articles of Japanese production is admitted free into Great Britain, whereas, with some trifling exceptions, there is a duty on the importation of all British goods into Japan.

But, putting aside all these considerations, you claim for Japan, as incident to her Sovereign rights, the liberty to fix her own tariff as she may think best suited to her needs and interests. If by

this it is meant that Japan should be relieved from all Treaty stipulations as regards the imposition of customs duties, and should have the unrestricted faculty of altering her commercial Tariffs at her free will and discretion whenever it may suit her views so to do, I have only to observe that such a system would be fatal to the interests of commerce by depriving it of that element of certainty in the matter of customs duties which is indispensable to the development of a sound trade, and that it would, moreover, be entirely at variance with the usages of Commercial States.

It is for the very purpose of securing that certainty and stability that commercial treaties are made between European States, and Her Majesty's Government are at a loss to perceive how the clauses of the Treaty of 1858, relating to trade and revenue, can be deemed to infringe the Sovereign rights of Japan.

Her Majesty's Government fully admit the right of the Japanese Government to demand a revision of the Tariff under article XXII of the Treaty of

1858. But they feel constrained, in view of the policy which the Japanese Government have announced, to adher literally to the text of that article; and they cannot accept a revision of it in any form less favorable than the Treaty itself indicates.

By article XXII it is stipulated as follows: "Either of the High Contracting Parties to this Treaty, on giving one year's previous notice to the other, may demand a revision thereof on or after the 1st July 1872, with a view to the insertion therein of such amendments as experience shall prove to be desirable."

A notice was given seven years ago by the Japanese Government, but when the year had expired they abandoned their intention of proceeding to a revision. It will be necessary, therefore, that a full twelve months notice should now be given before the Japanese Government will be in a position to demand the modification of the existing arrangements. Her Majesty's Government are compelled to lay stress upon an exact observance of this

stipulation, not merely out of respect for the letter of the Treaty, but in order to guard equitably the interest of merchants who may have adventured large sums of money on the faith of the Tariff as it now stands. Further, the notice required by the Treaty being "with a view to the insertion therein of such amendments as experience shall prove to be desirable," it must specify what, in the view of the Japanese Government, those amendment should be

Upon receipt of such a notice, Her Majesty's Government will proceed to consider the amendments suggested by Your Government, with the utmost desire to meet their wishes so far as they may be reasonable, having regard to the financial requirements of Japan, and to the general interests of all concerned.

I would therefore, in conclusion, express the hope of Her Majesty's Government that the amendments which may be proposed by Your Government will not be based on the views advocated in your letter of the 4th of May, but that they will be more con-

sistent with those principles of sound commercial policy, the adoption of which has so vastly developed the trade of this country, and has promoted commercial prosperity all over the world.

I have the honour, etc. (Signed) SALISBURY

附屬書二

印

所ニ可有之依テ公然可及通達ノ處貴政府ニ於テハ今回ノ改 府ノ改正案ヲ熟考致サルヘキ旨御報之趣致承知候然ルニ メニ至當タルヘキ分ハ我政府ノ意ニ應セン事ヲ切望シ我政 條約改正ヲ請求スルノ權理ヲ充分ニ認許相成某體裁ノ通知 正ニ付我政府ノ政略ヲ誤解シ論ヲ立テラル、ノ意判然タル ヲ期セサリシニハ非スト雖トモ我政府之ラ聞カハ滿足スル ラル、段實ニ喜悦ノ至リニ堪エス尤モ初メヨ 通知一條ノ論ハ姑ク之ヲ措キ貴政府ニ於テ斯 シテ本月二日附貴翰致領收候陳者貴政府ニ於テハ我政府該 貴我兩國條約改正ノ件ニ付去ル五月四日附拙翰ヘノ貴答ト ニ由リ拙者ニ於テ其誤解ヲ正スノ答辯ヲ爲スハ拙者ノ職務 得ラル、上ハ我財政上ノ要用丼ニ關係者一般ノ利益ノ為 リ其然ルへ ク厚意ヲ表 キ 右 -1-

歲入增 爭ヲ爲スニ至ルマテ輸入品ニ賤賣セラル、ノ患ナカラシ 只左ノ一項ノミ「爰ニ又一ノ著明ナル事情ハ平均僅ニ五 意有之カト調査スレ共更ニ其儀無之保護政策ノ事ニ涉ル ン事ヲ政府ノ義務ト信スルナリ」 テ地方ノ形勢ニ應シテ新工業ヲ起ス事ヲ得セシメ相當ノ競 カ故ニ我國人新ニ工業ヲ與ント欲スルノ氣力大ニ之レカ爲 相添ヘタル我政府ノ訓狀中ニ於テ右御悲歎ヲ釀生スヘキ 閣下第一ニ申述ラル ニ妨ケラル仍テ我政府ハ内國人ノ創業ニー時保護ヲ與ヘ以 滿タサルノ輕稅ヲ以テ各種ノ物貨皆外國ヨリ輸入シ來 ト欲スルニ在ルハ貴政府ノ深ク悲歎セラル、所タル旨ラ リ偖今般我政府ニ於テ條約改正ヲ要求スルノ主意相當ノ 加ヲ得ントスルノ目的ニアラスシテ保護政策ヲ行 、カ故ニ去ル五月四日附拙翰丼ニ之ニ 分 文 × N ハ

管テ之アラサルナリ日本豊ニーニ外商ノ利益ノ為ニ此主義スル所ナリ而シテ其事タル閣下ノ非議セラル、所謂ル保護スル所ナリ而シテ其事タル閣下ノ非議セラル、所謂ル保護スル所ナリ而シテ其事タル閣下ノ非議セラル、所謂ル保護の策ニ渉ルヤ至テ僅少ノミ且ツ夫レ初發大ニ輸入稅ヲ課シ政策ニ渉ルヤ至テ僅少ノミ且ツ夫レ初發大ニ輸入稅ヲ課シスルニ裨益アル凡ソ輸入稅適度ヲ得ルノ新業ヲ繁盛ナラシムルニ裨益アルスソ輸入稅適度ヲ得ルノ新業ヲ繁盛ナラシムルニ裨益アルスリ輸入稅適度ヲ得ルノ新業ヲ繁盛ナラシムルニ裨益アルスリ、

說キタリト雖モ貴報遂ニ此事ニ及ハス尤モ經驗上宜キニ隨 拙者ニ於テハ倘我外國貿易不景氣ナルノ論ヲ主張セサ 日 宛り而シテ貴國ハ其額二割六分ニ至ル此割合タルヤ歐米諸 保證スル所ナリ當今我日本ノ海關稅額ハ僅ニ歲入ノ四分ニ テ我税則改正ヲ請求スルノ機我國ニ之レアル ヲモ之ヲ開示シ我政府輸入稅ノ增額ヲ要用ト爲スノ所以ヲ ヲ舍テヽ他ヲ試ミル事ヲ願ハンヤ請フ又去五月四日附拙翰 得ス歳入ノ豫算ニ超過スル 證センカ爲メニー千八百七十七年ヨリ七十八年ニ至 本現時ノ歲入ヲ視レハ貿易不景氣ナル ント欲スルノ意タルハ拙者ノ確信スル所ナリ 國普通ノ者ニ比スルモ亦遙ニ下流ニ居レリ將來ニ在テハ我 :本ハ外國トノ條約ニ依テ益々其政略ヲ改メ現今他ノ數國 カ如キハ固ヨリ我政府ノ好ム所ニ非ス是レ拙者ノ閣下ニ |ハ其豫算ニ比スレハ凡ソ五百萬弗ノ超過ヲ致シ其内四十 ニ非スト雖ト 述フル所ヲ見ヨ我歲計上及ヒ施政上ニ關スル ハ貴國殖民地ニ實施スル所ノ者ヨリモ尚一屬寬大ヲ示サ ハ海關稅ノ增額ナリトノ說ヲ引 モ不當ノ輸入稅ヲ課シテ外國貿易ヲ妨止 ヲ以テ貿易不景氣ニ非ス又輸入 5月セラル、ト ノ徴候ナシト 閣下ハ叉我日 ハ疑ヲ容ル 其他ノ理由 シ之ヲ N ノノ歳 卜 N ス

ケ年間ノ我海關稅歲入ノ實數左ノ如シ關稅モ亦之ニ與ラサルニ非ス雖然今豫算ハ暫ク擱キ輓近五木ノ外他ノ諸國ニ於テハ年々ノ歲入常ニ其豫算ニ超過シ海稅ヲ增スヲ要セストハ拙者其ノ何故タルヲ解スル能ハス日

一千八百七十三年 一千八百七十四 千八百七十五 千八百七十六年 疟 4 ~ -七六二、 六三二、 七四四、 七三六、 八三七 四〇八五八 五五五 四圓 圓 圓圓

一千八百七十七年 一、七六七、一三九圓

悉ク大ニ衰頽ヲ致シ輸入貿易非常ノ増加ヲナシタル生糸ノ 入税ヲ増スヲ必要トスルナリ又閣下ハラサルニセヨ我政府ニ於テハ尚別ニ確 ノ議ヲ 説ニ於 火敷ヲ以 ピノ安ナル 々拙者ノ議論ヲ證明スルニ足レリ ・利益ナ 分 テ考レハ海關稅 - シ却テ日 'n 我政府ニ於テハ尚別ニ確實ナル理由アリテ輸 ヲ知ルヘク又此 力如 カ N ク中々漸次昌盛ノ勢ニ非ス若又假令然 可シト 本ニ大損害ヲ生シ貴國ト 生糸ノ一品ヲ除ノ外ハ其他ノ ニ四十五萬弗ヲ増加 セラル ニ於テハ特ニ甚シクシテ貴政 員數ヲ細別シテ輸出入ヲ別 我政府ハ固 生シ貴國トノ貿易ニハハ我政府輸出稅ヲ廢ス 實ニ價格數量ト 3 シタリ リ貴我兩 貿易皆 モニ 1 Ŋ

シ輸入稅 多ラ == 五割义煙草ニ課スルノ税 ノ ナ テ 7 テ 當國ニ輸入スルノ少キハ其事情寧ロ 今我日本ハ非常ノ低税ニ制限セラルレト ル 多キ事能ハサ /キ事能ハサルナリ雖然閣下ノ此意見ニ就テハ我政府必ス、能ク其勝ヲ制スルヲ得可ラス輸出多カラサル者ハ輸入亦 シ モ是 二二物產 キノ説ハ拙者尙之ヲ主張セ アリ其諸 モノタルノミ今貴國我日本茶ニ課スルノ稅ハ大約原價 貿易ノ便利ヲ他國ニ與フル 尚詳細勘考スル所アル可シ 1 シ テ ム ル ソ レ営 スル ソ日本ニ其出産ヲ盛ナラシメ又英國之レカ輸入ヲ 2/制限更ニアラサルナリ又我國ヨリ茶及ヒ æ ヲ得ンヤ生糸ト米ト ノ輸入ヲ某國ニテハ無稅ト テニス可ラサルノ事ニシテ彼我同例ノ證ニ 4 國トノ關係モ亦之ヲ訂 ヲ得 同 種類 ノ眞理ニ悖ルカ けル Æ 緊要ト為スト雖 ノ物産ヲ無税 ルノ事故アル ハニ十五割以上ニ至ル如斯ノ重稅 七他國ョ 偖又我國ニ於テハ其稅則 サルヲ得ス又閣下ニ於 如 ハ當國ニ於テ實ニ無稅ナル ニ非サル ニテ輸出 ジー國若シ 一較セサル 拙者ノ論旨ヲ證 ナス旨ヲ指示 リハ其報酬ヲ得 モ スル所 他國ハ我國ニ對 輸出 ハ輸出 力 ラス ラ競 ノ國 煙草ヲ ビスル所 t テ 非ラハル 二當 ヺ ヲ ツ == スル我事以

得ス 爲スノ意毫モ之レアル 條約我日本ノ國權ヲ犯ストハ貴政府ノ了解セラレサル所 ルハ大ニ貿易ニ妨害ヲ來タシ通商各國ノ慣例ニ違フ者 シテ且我國ニ於テ隨意ニ自國ノ稅則ヲ制定セン事ヲ請 無税品ヲ合セテ之ヲ通算スルモ米ハ收穫過剰アルノ時ニ非 於テ請 ノ ス 抑モ我國 ルスル 閣下ノ御論二於テハ拙者我政府ノ爲二之ヲ辯セサル ヘルニ於テハ商 ノ輸入税ハ平均一割以上 ジ如キ 我政府必ス之ニ同意 求ヲナシ進步ニ悖ル 其情實アル 四二於テハ 11: メント欲スル Д 高業ヲ進ム ヲ ル事ナシ却テ將來日本ノ條約ヲシテ正、1ヲ來タシ通商各國ノ慣例ニ違フ者ナリニヲ來タシ通商各國ノ慣例ニ違フ者ナリニアハ拙者我政府ノ爲ニ之ヲ辯セサルヲ 一偏倚不正 サル せ ル ニ貴國ノ税則 1 ノ政策ヲ施スノ意ナシト雖 サ 変アリ ノ者ニシ サル事 シテ 爲メニ實ニ必要ノ ナリ故ニ締盟諸國ノ 貴國ノ税則ニ依リ我物産 v ハ輸出 從來我國嚴 テ然り 無ル テー千八百五 ハキナ ス我輸出 シ者 ナル ij 說 此 ハ何 ル = · フ Ŋ シト點 ニハ

人 ン ニ セ 乞ハン前 之 サル ニ方テハ其短所ヲ補正スル事アランヲ信スレハナリ實遵守スル者ハ各國ノ誠實好誼ナル必スヤ之ヲ改正スル テ セ 夕 D 、百五十八年ニ米國總領事タリ後ニ同國公使タリシー手段ヲ以テ之ヲ保持セント欲スルモ得ヘカラスト 該條約中使節派遣等ノ權ヲ附スル サ ル行爲ノ自由ヲ缺キ結約ノ兩國共ニ其趣旨ヲ充分ニ解 ニシテ其條約ハ ント [五十八年二米國總領 ハ總テ威力ヲ以テ結ヒタル者ナレ アル事ナシ此點ニ付キ拙者又茲ニ一證ヲ揭ケテ モ ルノ事項ナシ但シ使節派遣ノ權ノ如キ ル ハ抑其起本既ニ汚辱ナル者ニシテ正當ナル 改正 敢テ辭スル事能ハサル者ナリ其外兩國 ニ異ナル事 ノ者タルハ即チ其書ヲ以テ之ヲ證スヘキノミ而 ij (一千八百五十八 ノ在日本貴國公使ノ文ニ云ヘル ヲ ハルリス氏ハ日本ト 加 條款ト \sim 啻ニ IJ ŀ ナシ而 N 貴我兩國條約ノ基本タル ナ ŀ 八年) ニ附 シテ同 シ モ更ニ議論ナク又一モ 如 該國ト 斯未曾有ノ所 氏 作ノ如キハーモ 八ノ曾テ云 スル ノ條約ヲ議 ハ宗教上威力ヲ愼ム アリ ラ税則 É 假令之ヲ約 ヘル 一同例ノ件更ニ 我國ノ爲メ ル條約ノ要領 ノミ ク目 至 日 公全 定 貴答ヲ ナラスカウー 本ト N = ご該時 一ク余 日 ŋ ノ

其他ハ總ヘテ貴我兩國五ニ中外人民ノ權利特許及ヒ其義務 之ヲ征略國ニ施ス可ク國際ノ權理上ニ於テ爲スヘキ所 畢竟日本人 政ニ係ル事項ニ干涉スル權ヲ求メシ事ナシ之ニ干涉ス ラ事ヲ辨スルヲ得ルニ至ルヘシト ヲ改正スルノ時ニ至ルノ前ニハ日本人必ス實撿ヲ經テ自 ニ任セタリ云々中略 以テスル シテ皆之ヲ同一ニシ毫モ其間ニ差違無ラシムルノ約ヲ立 以テセンニ治外法權及ヒ之ニ伴フ內地居住ノ禁トヲ除キ 權ヲ犯スヤ否閣下ノ論旨ニ對シ辯論ヲ費ヤスモ無用 ト由是觀之ハー千八百五十八年ノ條約ハ果シテ我日 ハ敢テ久シキニ非サル事ヲ以テセリ余ハ決 人間ノー生ニ取テハ大要部ナリ ラ得可キカヲ思考スルノ寧ロ利ナルニ如 カ如シ依テ新條約ヲ以テ該條約ノ缺失ヲ何程迄ニ改良 ニ於テ敢テ不當ノ處置ナキヲ信 ガ輸出入税則ノ何 ヲ知ラサルニ因 ハナカルヘシ現行ノ條約ヲ改正シ若クハ新條約 モ此約行ハル、ニ於テハ其細目ニ至テ 义余 ハ常ニ日本委員ニ語テ日 ル者ニシ ノタルヲ知ラス又關稅 りト雖トモ一國ノ命脈ニ於ト义之ニ説クニ十年ノ星霜 テ正直 シテ之ヲ余 に其事ニ カス此儀拙案 シテ他國ノ 「ク此條 んカ所為 ハ我政 三屬 一本ノ ラ牧 = ル 非 ハ内 カ

> 要ノ事項 之ヲ承允スヘキヲ確信スルナリ現ニ貴國ハ我日本ヨリモ緊 ナリ其理由左ノ如 ヲ得スト論セラル是レ拙者ノ遺憾トシ且同意シ能 ル = ル ラル、ノ謂レ |可ラス而シテ其報知ニハ改正ヲ要スル條款ヲ詳記セサ 於テハ我政府ニテ尚今後改メテーケ年前 就中我國條約改正ヲ要スルノ報知一件ニ付テ論セン閣下 ハルトニ非ス 一片テ遙ニ劣ル所アル諸國ト至當ナル スル所 アランヤ今爰ニ結尾ニ臨テ貴翰中論セラレ シ 7 ナク且貿易ヲ便宜ナラシム 何ソ日本ト互相ノ條約ヲ結ヒ難 ノ報知ヲ爲サ、 ル 互相 ノ事 ハサ ラ條約 ハ 必 シ ル所 ŀ ル 夕 セ

ノ主意十分ニ中述へ置キタリリト信ス且ツ此件ニ付テハ閣下ト面晤ノ節ニモ我政府請求別ト信ス且ツ此件ニ付テハ閣下ト面晤ノ節ニモ我政府請求第十一條約改正ヲ請求スルノ報知ハ卽チ去ル五月四日附拙

ル由ナリ 割貴國公使ニ送致シ且ツ改正請求ノ主意判然通知ニ及ヒタ第二 我政府ハ五月四日ヨリ以前ニ前顯訓狀ノ寫ヲ東京駐

二久シキニ其報告不充分ナリトノ通知ハ曾テ無之ヲ以テ該第三 我政府ノ希望ヲ陳述シテヨリ以來時日ヲ經ルコト旣

ノ書體ニ付テ當國ノ如キ異論アル事ナシ様的ヲ改正スルノ手續ニ及ヒタルニテ各國ニ於テハ右報告報告ニ御異論無之事ト決スルモ不可ナシ故ニ速ニ各國トノ

ノ畑キ至當ノ儀ニ異論ハ無ル可キナリ 右報告中ニ改正ノ條款ヲ詳悉ス可シトハ條約第二十第四 右報告中ニ改正ノ條款ヲ詳悉ス可シトハ條約第二十第四 右報告中ニ改正ノ條款ヲ詳悉ン改正ノ十二ケ月前ニ之ヲ改正ノ緊要ナル所以ヲ論スヘキノミ若シ我政府ニ於テ數多又俄ニ稅則ヲ變スルトキハ外國商人ノ利益ヲ妨害ス可シト又俄ニ稅則ヲ變スルトキハ外國商人ノ利益ヲ妨害ス可シトノ論ニ於テハ新條約或ハ改正條約中ニ一款ヲ設ケ十分猶豫ヲ與フル布達ヲナス後ニ非サレハ之ヲ實施セサル可シトセハ其害ヲ妨クヲ得可シ閣下之ヲ發議アラハ我政府ハ敢テ是

ハ總テ是等ノ商議事情ニ於テ不都合ナキ限リハ貴國ト共ニ旨意ニ應シ他ノ各國トモ商議ニ及フヘシ而シテ特ニ願フ所速ニ通知有之度切望ニ堪エス然ルトキハ我政府ハ勉メテ其改正ノ談判滿足ニ整頓スルノ好手段ニ於テ貴政府ノ意見ヲ

固ナラシメン事偏ニ所冀ニ候如此敬具 大皆共ニ至當滿足ナルノ條約ヲ結ヒ兩國ノ交誼ヲシテ愈鞏 スルニカヲ盡シ以テ我國ノ進步ト貴國ノ地位ト相背カス細カヲ合セテ事ヲ謀リ久我國ニ於テハ固ョリ貴政府ノ意ヲ遂

千八百七十八年十一月十三日

上野景範手司

(右英譯文)

Japanese Legation, London, November, 13th 1878.

My Lord,

I have the honour to acknowledge the receipt of Your Lordship's note of the 2nd instant, which replied to mine of the 4th of May last, on the subject of the Revision of the Treaty between Japan and Great Britain.

Your Lordship informs me that Her Britannic Majesty's Government fully admits the right of the Government of Japan to demand the revision in question, and will, on receipt of a notice framed in a certain indicated shape, proceed to consider the

amendments suggested by My Government, with the utmost desire to meet its wishes, so far as they may be reasonable, having regard to the financial requirements of Japan, and to the general interests of all concerned.

Reserving, for the moment, the questions connected with the notice above referred to, it is a pleasing duty to me to commence my remarks by requesting Your Lordship to believe in my warm appreciation of these courteous expressions of Her Majesty's Government. They were not unexpected, but will none the less be received with satisfaction by my Government, now that Your Lordship has placed me in a position to communicate them officially

As, however, it is evident that Her Majesty's Government is prepared to base its attitude in reference to this Revision on an erroneous view of the policy of the Emperor's Government, it is my duty to reply to Your Lordship's remarks in a way which I trust will remove any such inaccurate impression.

Your Lordship in the first place expresses the deep regret of Her Majesty's Government that the Revision of the Treaty is sought for, not for the purpose of obtaining a reasonable addition of revenue, but with the avowed object of carrying into effect a policy of protection.

the fear of these being undersold by imported arfactures as local circumstances may justify, without sufficient to enable it to commence such new manutive enterprise a degree of temporary protection all kinds of foreign goods at duties which average tection ently considers that it is its duty to confer on naless than five per cent. My Government consequnew industries is paralysed by the introduction of marked disposition of my countrymen to inaugurate such regret. The only allusion to a policy of prothat letter, which in any way calls for, or justifies, of my Government handed to Your Lordship with my letter of the 4th of May, or in the instructions letter: I search, My Lord, in vain for any statement in "Another noticeable feature is that the appears in the following clauses of

ticles before proper competition is possible."

sider an increase of import duties desirable ministrative, which induced My Government to con-I pointed out several other reasons, fiscal and adship's memory that in my letter of the 4th of May foreign traders. in deference to the supposed interests of a few ship animadverts. It has moreover in its favor the so-called policy of necessary. These Your Lordship has not referred to to make the experiment, on other principles, merely high import duties. Japan, at any rate, has no wish been, in the first instance, protected by sufficiently prospered in no countries, in which they have not consideration that manufacturing industries have nized by the late John Stuart Mill and other authora proper scale of import duties has been fully recog-The advantages accruing to young industries from The system has little in common with the I would also recall to Your Lordprotection on which Your Lordand

But, though Japan has an undoubted right to demand such changes in her Tariff, as her own experience may have shown to be desirable, I have

no hesitation in assuring Your Lordship that My Government has no wish to impose such duties as would unduly check foreign trade. At the present time the Customs duties barely amount to 4 per cent of the revenue of the country, while in Great Britain they approximate to 26 per cent. The rates themselves are also much below those generally current in Europe and America. As regards the future, I am confident that Japan would be prepared to show, in her treaty arrangements with other nations, a more liberal policy than that now in force in most of them or even in the British colonies.

Your Lordship states that Her Majesty's Government does not consider that the present revenue of Japan has shown any indication of commercial stagnation and in support of this view Your Lordship advances the information that the revenue for 1877-78 has exceeded the estimates by about five million dollars, of which the Customs contributed four hundred and fifty thousand dollars. I regret notwithstanding that I must adhere to my statement as to the unsatisfactory condition of the foreign trade of

Japan. I am at a loss to see how an excess over estimated revenue would tend to disprove it, or could be considered to indicate that no increase in import duties is necessary. Other countries besides Japan have from time to time a revenue in excess of their budgets, and are still not independent of the returns from Customs duties.

But, leaving estimates for actual figures, the revenue from Customs for the last five years have been:

1877	1876	1875	1874	1873
1,767,139 "	1,762,554 "	1,744,837 "	1,631,445 "	1,736,108 yen

These figures sufficiently dispel the illusion that there has been any such increase as 450,000 dollars in the late customs returns, and they would have been still more confirmatory of my contention, if they had been subdivided into exports and imports. Except for a very large and exceptional increase in the value and amount of silk, there would have been

other Powers are not in any way bound to her as sary that the import duties should be raised. Your Japan is fettered by an exceptionally low tariff, certain countries, is no proof of reciprocity. some of her products are admitted without duty into duties, unless pointed out by Your Lordship, that ciples of international economy to maintain export calculation. It also appears contrary to sound prinrelations with many other countries, and that the but it must be borne in mind that Japan has treaty sensible impetus to the trade with this country. serious loss to Japan, and not likely to give any still, for other valid reasons, have deemed it neces-But, had this been otherwise, my Government would ment refered to by. larly in the imports, instead of the gradual developea heavy falling off in the total trade, and particueffect on all these countries has to be taken into tance to the trade between Japan and Great Britain, ment to abolish the export duties, as involving a Government naturally attaches the highest impor-Lordship discourages the proposal of Her Majesty's Government. my Govern-While

with her, should not themselves expect exaggerated which concede nothing in their tariff arrangements she is fully justified in invoking a consideration of these facts as and has no wish to adopt a retaliatory policy; but country has put forward no demand on this score, United Kingdom on all Japanese products. over 10 percent is chargeable by the Tariff of the mitted free, an average import duty of considerably calculation the axtual exports, including those adand the fact remains, that taking as the basis of only exported in seasons of Superabundant harvest; ted free, and portation into Great Britain Silk is certainly admitproduction of these articles duties are not calculated to encourage either the cost, and on tobacco to Japanese tea amount to about 50 percent on the than disproves my contention. are imported into this country accentuates rather stance that only Small quantities of tea and tobaxxo regards their scale of import duties. so is rice, but this latter article is affording a reason why countries over 250 percent. in Japan, or their im-The duties here on The circum-Such My

try has however strictly respected that treaty, being Certainly that necessity no longer exists. My counmay have been to some extent a necessity in 1858 do, was, on the contrary onesided and unjust. developement of a sound trade. which may by shown to be indispensable to sire is fairly met by the Treaty Powers, the Governmercial states. and discretion, would be fatal to the interests of country to fix her own Tariff, at her own free will of Japan are infringed by the Treaty of 1858, and is at a loss to perceive how the concessions from her. Her Majesty's Government ment of the Emperor will accede to any suggestions and Your Lordship may be assured that if this derest on the most just and enlightened principles in future the Traeaty arrangements of Japan should mands not consonant with the usages of other civimy Government, any intention to advance any decommerce and at variance with the usages of comlized states. Your Lordship considers It is, on the contrary, its desire that I disclaim, My Lord, on behalf of that the The treaty of Yed-Sovereign Rights claim

in any part of it. thus conceded, could not have been refused, there right of Embassy etc., a right which even if not exception of one clause conferring on Japan the affords internal evidence of this assertion. the High contracting Parties. comprehension of its contents, on the part of both tial to a just Treaty-freedom of action, and a full that the Treaty of Yeddo was tainted in its very defects to be remedied I am justified in declaring Powers, would, on its revision, cause its apparent assured that the honor and good feeling of the other with Japan have been forced upon it; and it is vain Minister in Japan thus writes; "All treaties made be admitted to be unanswerable. my country. does not appear one single condition in favor of tained by a religions abstinence from the use of to expect that treaties so entered into can be mainforçe as a means." Your Lordship evidence on this point which must It was wanting in the conditions essen-There is not the slightest reciprocity But I am further able to submit Again Mr. Townsend Harris, in The Treaty itself The late British With the

> subject: "The Tariff appended to the Treaty of between Japan and Great Britain thus refers to the basis, but was almost the counterpart of the treaty Japan and that country, justice. my hands, relying, as they said, on my doing them ports, and of the manner in which customs should arose from the necessities growing out of the igno-Commissioners. were any amendments to it offered by the Japanese of its provisions was the subject of discussions, nor the United States, who negotiated the treaty between 1858 Concul General, and subsequently Minister for knowledge in the matter, and placed themselves in be collected. rance of the Japanese of Yeddo (1858) was made entirely by me. They frankly avowed their want of This unprecedented proceeding which was not only the ы tariff of duties on im-Not one

I constantly told the Japanese Commissioners that before the time came around for revising the treaty, they would have gained such experience as would enable them intelligently to deal with this matter themselves; remarking that while ten years was an

important part of a man's life, it was as nothing in the life of a nation. I never, for a moment, claimed a right to interfere in matters which purely belong to the municipal affairs of every nation. Such interference is the result of absolute Conquest, and not of any international right."

this is carried out by a Revision of the existing either Japan or Great Britain respectively. leges and obligations of natives should be no distinction between the rights, priviof a great part of Japan to foreign enterprise, there territorial Jurisdiction and the concomitant closing my opinion, be best arrived at, it would be one, by were to formulate a basis on which this could, in be remedied by new Treaty arrangements. consider how far all the defects inherent to it can into the question, raised by Your Lordship, as to Treaty, or by an entirely new one, I am decidedly which, excepting as regards the question of Extra-Rights of Japan. whether this treaty of 1858 infringed the Sovereign It seems, therefore, unnecessary for me to enter It would be more profitable to or foreigners in Whether

of opinion that no difficulties as to details will be raised by the Government of the Emperor and that the conveniences of trade will be fairly considered. I need hardly point out to Your Lordship that treaties of a fair and reciprocal nature have been concluded between Great Britain and countries far less advanced than Japan in all essential particulars.

Lastly, my Lord Marquis, I have to refer to the remarks in Your Lordship's letter, especially affecting the notice given by Japan of its wish to proceed to a Revision of the Treaty. I understand that Your Lordship contends that a further notice of one year should be given, which should contain particulars of all amendments suggested by my Government. I much regret that Your Lordship should have adopted this view. I cannot acquiesce in it on the following grounds:

I. I consider that full notice of the demand to revise was given, both by my letter of the 4th of May last, and by the instructions of my Government, handed to Your Lordship. I also hold that I sufficiently stated the demand of my Government in

my interview with Your Lordship on the subject.

- the 4th of May, and distinctly informed him of the of the above-named instructions even previously to ted to Her Majesty's Representative in Tokio a copy demand for revision. II. I am informed that my Government transmit-
- steps have been taken to prepare for an early objection to such notice existed, and in consequence sidered incomplete, entitled it to conclude that no intimation having been made that notice was conthe wish of my Government was stated, without any notice, similar ers, none of whom have objected to the form of vision of the Treaties existing with the other Pow-The length of time which had elapsed since to that given in the case of this Re-
- does not appear to be warranted by the terms of prepared should be embodied in the notice itself, are to be such as experience should prove to be the clause XXII of the Treaty. The amendments desirable. IV. The claim that details as to all amendments The Government of the Emperor

called on to state in detail twelve months before their desirability at the proper time. Your Lordship only suggest such, and will be prepared to maintain Treaties, all the alterations it demands. revision, to the numerous Powers with whom it has niences which would arise if my Government were will also not fail to recognize the extreme inconvi-

such a fair condition, if suggested by Your Lordship. clauses in any new or revised Treaty should not might be guarded against by a stipulation that the change in the Tariff, I would point out that this foreign merchants might be injured by any sudden been given. My government would not object to become operative until after sufficient notice had As regards the consideration that the interests of

footing. placing the treaty arrangements on a satisfactory ther delay, what are the views of Her Majesty's Government as to the best steps to be taken towards notice above-named, and to inform me without furrequest Your Lordship to waive any objection to the I therefore, with respectful persistence, venture to My Government will then at once proceed

the progress of Japan and of the position of Great and details, just and satisfactory; -worthy alike of so that a fresh impulse may be given to the friendly conclusion of treaty arrangements, in their nature relations between the two countries, by the speedy Her Majesty's Government on this important matter, effort will be made to give effect to the wishes of am justified in assuring Your Lordship that every will allow, in full concert with Great Britain, and I gotiatoins should be made as for as circumstances Powers. It is especially desirous that all these neconnection to meet such suggestions as far as possible, in with its negotiations with the other

ration, I have the honor to be, with the highest conside-

1, 18th '79

Lordship's most obedient, My Lord Marquis,

(Signed) WOOYENO KAGENORI

humble servant.

三九 明治士年1月十八日 上野駐英公使宛(電信)寺島外務卿ヨリ

條約改正ノ時期ニ關シ英國ノ意響返電方訓令ノ

Wooyeno,

Japanese Legation,

London,

note of 13th November last to British Minister for tice for Treaty Revision in accordance with your Foreign Affairs. Has the British Government agreed as to the no-

Answer by telegraph.

Terashima

明治士年月二十日 寺島外務卿宛(電信)上野駐英公使ョリ

三〇

條約改正ノ時期ニ關シ英國ノ意郷回報ノ件

Terashima,

Gaimusho,

Tokio.

English Government agreed to accept the notice as explained in letter 13 November.

WOOYENO.

London 20th Jan. '79.

| 明治士三一月十三 上野駐英公使宛

交渉續行方訓令ノ件

上野公使え別信案第二號 一月廿二日附

議可及積を以當時不及返答見合居候末一月六日附電報を以接前文別信等落手候に付猶其表議決の趣一消息を得候上詮飲島青木兩公使とも會議便宜從事可有之旨中含旣に發途のの外手段無之樣被中立右委任狀御所望の旨數次の別信にての外手段無之樣被中立右委任狀御所望の旨數次の別信にての外手段無之樣被中立右委任狀御所望の皆數次の別信にての見込を以吉原重俊佛國派遣の次を以該書類齎往貴君初との見込を以吉原重俊佛國派遣の次を以該書類齎往貴君初との見込を以吉原重俊佛國派遣の次を以該書類齎往貴君初との見込を以吉原重俊佛國派遣の次を以該書類齎往貴君初との見込を以當時不及返答見合居候末一月六日附電報を以別信申進候條約重修稅權獨操の儀に付飨て以訓狀及指令以別信申進候條約重修稅權獨操の儀に付飨て以訓狀及指令以別信申進候條約重修稅權獨操の儀に付飨て以訓狀及指令以別信申進候條約重修稅權獨操の儀に付飨て以訓狀及指令以別信申進候條約重修稅權獨操の儀に付飨を以訓狀及指令

高附 鮫島公使より報知有之候間更に廟議を可被盡に付貴君な所 鮫島公使より報知有之候間更に廟議を可被盡に付貴君な所 鮫島公使より報知有之候間房の文面にては只管我請求に對正式論院而已にて更に彼方の意衷を不示貴君御申立の通其心抗論候而已にて更に彼方の意衷を不示貴君御申立の通其心抗論候而已にて更に彼方の意衷を不示貴君御申立の通其使且最前其外務卿より返簡寫の文面にては只管我請求に對使且最前其外務卿より返簡寫の文面にては只管我請求に對底且最前其外務卿より返簡寫の文面にては只管我請求に對於自最前其外務卿より遊問為條約取結候共互相の權利を操使とも彼方の意嚮如何將貿易條約取結候共互相の權利を操使とも彼方の意嚮如何將貿易條約取結候共互相の權利を操使とも彼方の意嚮如何將貿易條約取結候共互相の權利を操使とも彼方の意嚮如何將貿易條約取結候共互相の權利を提供。

尚本文の儀に付電信往復寫爲御心得兹に相添候也

八、三一九、三二〇參照 1一月六日附電報三六七參看、其他234 夫 々三 一

|||||| 明治士年一皇子| 寺島外務聊宛

條約改正豫告、

英國政府ノ改正條件及談判開催

地等ニ關スル交渉經過報告ノ件

野駐英公使宛書翰寫 附屬書 | 助治十一年十二月二十一日英國外務卿ョリ上

○ はいます○ はいます</li

シ申入ノ件

・ 英國外務卿宛書翰寫・ 関治十一年十二月二十七日上野駐英公使ョリ

右ニ對シ回答ノ件

生輸所載ノ我國輸出入額ニ關シ 辯明ノ國外務卿宛書翰寫

四 明治十一年十二月三十一日英國外務卿ョリ上

右ニ對シ回答ノ件

明治十二年別信第二號 三月十九日達ス

點に於て英政府は最初閣下より御差遣の訓狀に拙官の見込然るに右返翰にも記載有之通條約改正の豫告(Notice)の所え掛合の書翰は兩通共寫相添曾て報告仕置候通に有之候條約重修一件に付英政府よりの返翰丼に拙官より再應同政

認相成居候様被相考元來現存條約第二十二條によれは改正 更に條約第二十二條に基き一年の豫告有之事緊要にして拙 告を以て今に有効のものと認むるに於ては現存條約は巳に は其後に至りて發行す可き譯なれは若干八百七十二年の豫 豫告の日より一年の間は是非とも舊條約を遵行新定の條約 plish the desired revision)云々とあり然して更に今回改 申陳せし日より一ケ年後」云々とあるを以て見れは素より より訓狀と同時に御遣の内遠中第二條に「條約重修の主意 するに同卿の見解も理なきに非らざるが如しと雖も亦閣下 は其豫告とは難被認趣に有之候成程訓狀の文面を反覆考究 官より昨年五月四日附を以て訓狀相添同卿え宛差出候書翰 合有之候右の情實に付日本政府今回條約改正の企望あらは 履行す可きの權力を失したるものと相成實際に大なる不都 は千八百七十二年の豫告を以て今に効力を有候ものと御考 正を豫告するの文意相見得す故に其文面によれは日 於て「巳に請求したる條約を決局せんか爲に」(to accom-日本政府より條約改正の豫告爲有之事を陳べ續て第四條に スビュリーの見込にては訓狀の初條に於て千八百七十二年 と相違の見解を下たし論旨兩端に相分れ中候則外務卿サリ 本政府

候得共方今専商法局にて取調中の由にて過日外務卿と面談 右十一月二日附の書翰に對し全體の答書はいまた落手不致 別紙寫(ハ印)の通書翰差出候處(ニ印)の通返翰有之候 - 封入差出申置候千八百七十三年より八年に至る迄日本に於此寫ハ先報告書中千八百七十三年より八年に至る迄日本に於 昨年十一月二日附にて拙官より當國外務卿え差出候書翰中候事に決定則其往復書翰別紙寫(イロ印)二通差出申候 **遂に昨年五月四日附拙官より同卿宛の書翰を豫告と認相成** 約を發行する事なく現存の條約を遵行す可しとの約束にて 可しと信用いたし申候則其大略は の節我の請求に對し粗同卿丈けの見込は承り得申候間假令 て毎年輸出入の額跡相違の康見出候間將來の論柄豫防の爲 然に有之候間拙官には其御趣意を確守して外務卿とも屢々 此後右返翰落手いたし候ても決して其趣意の外に出てさる 面談の末然らは千八百七十九年十二月一日前には新定の條 我政府にては今回 の訓狀を以て豫告と御考定相成居候事

- 日本政府にて保護法と公言して海關税を増課相成 候事は同意難相成事
- 日本政府其國費の多端に對し要用の海關稅を相當 に増課相成候は異論無之事

第三 條約を發行の用意有之度事 正に取掛千八百七十九年十二月一日迄には新定の 日本政府は直に改正條約案を起草し互に實際の改

改正の場所は日本政府の便利に相任候得共願くは 歐洲にて取極め度事

改正の事に御決議相成候は「同氏歸英の事も其決局迄は遷 旦歸英の事に相決候趣は先報を以て通知仕置候尤同氏の歸 申候拙官に於ては巳に右改正案も起稿いたし置候間次便を 洲にて取極候方便利なる可しとの趣を相答置申候右の都合 延可致と相考中候右に反し當國にて改定の事に御決議相成 再任不相成事は慥なる所より聞込申候併萬一日本にて條約 英は條約改正を名義といたし候儀に候得共一度歸英の上は 以て高覽に備可申候日本在留英公使當國に於て不評遂に一 與有之度左候へは條約の條款等は鮫島其他の同僚等と協議 右改正の場所はいつれの地を日本政府にて御撰定可有之歟 候はは假令同氏條約改正に關係有之候とも外務省官員中に に付斷然歐洲にて改定の事に御決議至急相當の御委任御附 の旨外務卿より尋有之候間拙官一己の見込を以て云へは歐 一税額の事は吉原重修に相談を遂け微力の及丈けは 相盡可

難相成情質有之大に我の便利と相考中候猶追便に巨細報告 充分同氏を信用せさる者多々有之候間餘り勝手の論も主張

十二年一月三十一日

全權公使 E 野 景

外務卿 寺島宗則殿

附屬書一

(朱書)

十二年第二號別信附 屬

ΕĐ

サリスブリー侯ヨリ上野宛

政府へ御禀議相成候テハ夫カ為時日遷延ニ及ヒ且其他差障 政府ノ要求スルヲ得ヘキ相當ナル改約豫告トハ爲ス可ラス 貴我兩國間條約改訂之義ニ付過日外務省於テ御面晤ノ節申 **述置候通本年五月四日閣下ョリ御差越相成候書翰ヲ以テ我** トノ意見ニ於テハ敢テ變更不致義ニ候得トモ右ニ付尙又貴 テ御承諾相成候通協議ノ上決定致スヘキ現存條約改正 、厭過日御演述之趣モ有之候ニ付我政府ハ右異論ヲ止 ノ書翰ヲ以テ即チ其豫告ト看認メ承知可致候尤閣下ロ エメ前 ŀ.

> 條款ハ何等ノ事情有之トモ來ル十二月一日ヨリ前ニハ決テ 實施不致トノ取極ニ因リ右様承知候義ニ有之候此段得御意 度如斯敬具

千八百七十八年十二月二十一日

サ ŋ 、スブリ 1 ·手記

(右原文)

Lord Salisbury 6 Wooyeno.

December 21st 1878.

be caused by a further reference delay which as you pointed out at the time, are entitled to receive yet, a notice of Revision as Her Majesty's Government me on the 4th of May last does not constitute such and Japan, I have to state to you that, while mainrevision of the existing treaty between this country foreign office the other day upon the subject of the the honor to hold with you at our interview at the letter which you did me the honor of addressing to taining the opinion which I then expressed, that the With reference to the communication which I had having regard to to your Governwould

等ノ爲ニ利益不尠ハ判然之義ニ有之候右御答旁如斯敬具

千八百七十八年十二月廿七日

野景範手記

ment on the point and to the other difficulties you have verbally accepted, that no modification in and to accept the letter above reffered to as a notice. Government are disposed to waine their objections which you adverted at our interview; Her Majesty's They do so, however, on the understanding which

at an earlier date than the 1st of December next. later, shall come into force under any circumstances the existing Treaty which may be agreed upon

I have the honor etc., etc.

附屬書二

FII

上野ヨリサリスブリー宛

決定所ノ改正條款ニ於テハ來十二月一日後ナラテハ實施可 テ改正ノ着手之カ爲ニ遲延不相成樣致度存候又改正候條款 不致旨御約定及已候事ハ聊相違無之乍併右樣御約定申候ト キ旨貴政府於テ御承諾相成候趣致領承候雙方協議ノ上可致 日ノ拙翰ヲ以テ卽チ我政府右改約ヲ要スルノ豫告トナスヘ 八十二月一日前可成速二公告致候方一般ノ關係者殊二商人

(signed) SALISBURY.

本月廿一日附貴翰落掌貴我兩國間條約改訂之義本年五月四

Wooyeno to Lord Salisbury.

(右英譯文)

Dec., 27, 1878.

My Lord

me that in the circumstances Her Britannic Majesty's last as a notice of the demand on Government now accept my note of the 4th of May Treaty between Japan and Great Britain. Government of the Emperor for a Revision of the Your Lordship's note of the 21st instant, informing I have the honor to acknowledge the receipt of the part of the

1st of December next. be agreed to, shall not become operative before the modifications in the Treaty arrangemens, which may I willingly confirm the understanding that any

out the Revision. all concerned, and especially of the trading commay not prevent early steps being taken to carry I trust, however, My Lord, that this understanding It is evidently in the interest of

possible. made known as long before the 1st of December as munity, that the change to be introduced should be

I have the honor etc., etc.

(signed) WOOYENO KAGENORI

附屬書三

缓ニ贅述ヲ要セサルノ原因アリテ然ル義ニシテ決テ我政府 又千八百七十七八兩年ノ税關收入金額ニ於テハ、シル、 貴我兩國間條約改訂之義二付去十一月十三日呈書以來尚通 ルリーパークス氏ノ被掲示候程迄ニハ無之モ豫算ヨリハ頗 知ヲ得候次第有之依テ前書中ニ致記載候千八百七十三年ョ 條約改訂論ノ見込ヲ變更セシムヘキ者ニハ無之候右得御意 ル増額相成候由ニ有之候尤モ税關報告書ニ此增額有之候か シタル税額ノ精密ナルモノトハ御看做シ不相成樣願度候且 リ千八百七十七年迄ニ至ル我國輸出入稅額表ハ實際ニ收入 ハ

Ŀ. 野景範手記

千八百七十八年十二月十八日

寺島外務卿時代

〈右英譯女〉

Wooyeno to Lord Salisbury.

Dec., 18th, 1878.

My Lord,

Sir Harry Parkes. the estimates though not to the extent stated by erable increase in customs receipts for 1877-78 over have been informed that there has been a considfor the years 1873 to 1877 may not be taken as acnote as to the Export and Import duties in Japan and Great Britain I have received information which curately representing the duties received. I further leads me to request that the figure quoted in my ject of the Revision of the Treaty between Japan Your Lordship on the 13th of November on the sub-I have the honor to remark that since writing to

of my Government on the Revision Question. returns, brought about by causes to which I need not now further allude, in no way modifies the views I will only add that such increase in the customs

I have the honor etc., etc.

(signed) WOOYENO KAGENORI

附屬畫四

二 即

千八百七十八年十二月三十一日

サリスブリー手記

(右原文

Lord Salisbury to Wooyeno.

December 31st, 1878.

oir,

I have the honor to acknowledge the receipt of your letter of the 18th instant stating with reference to the question of the Revision of the Treaty between Great Britain and Japan, that you have received information which leads you to request that the figures

quoted in your communication of the 13th ultimo as to the Export and Import duties in Japan for the years 1873 to 1877 may not be taken as accurately representing the duties received, adding that you have been informed further that there has been a considerable increase in the Customs Receipt for 1877–78 over the estimates, though not to the extent stated by Her Majesty's Minister at Yedo.

I have the honor etc., etc.

(signed) SALISBURY

|||||||| 明治十二年二月六日 上野駐英公使宛(電信)

意嚮問合ノ件條約改正商議ノ場所及時期ニ關スル英國政府ノ

Wooyeno,

Japanese Legation,

London

Has British Government agreed to fix Tokio as the place of negotiation for Revision and the month of May as the time to open it.

Terashima.

Tokio 6, Feb. 79.

三二四 明治十二年二月六日 寺島外務卿宛(電信)

ルモ近ク倫敦會議開催方通告アルヘキ旨回答ノ英國政府ニ於テハ條約改正商議ノ場所未決定ナ

4

Place of revision has not yet decided Paunce-fort informed me to communicate soono fficially, British Government is proposing to open Conference in London in view of moral obligation to joint powers signing tariff Convention 1866.

WOOYENO

London 6th Feb. 79.

三二五 明治士三三月十七日 英國公使對話書

倫敦會議開催ニ關シ交渉ノ件

一、條約改正に付龍動府會議の事明治十二年二月十七日寺島外務卿ト英公使パークス對話

寺島外務卿時代 三二四 三二五

上野公使より何も不申來候哉て會議を開候に付ての用向有之故と申來り候此儀に付今般拙者歸國の命令を受取候右は條約改正に付龍動に

決定次第猶又可申入との事に御座候たる御報告にては無之外務次官より內話の趣に申來候尤も會議の事は先達て一寸申來り候へとも右は貴政府より公然

外務次官よりは如何の談振に候哉

にて會議を開くべしとの趣に候何の國々といふ事は御談示無之唯歐羅巴各國と申合せ龍動

貴國も御加り相成候儀歟

會には同意と相見候中越候へとも獨逸は六十六年の方に關係なし併し今度の集ウエンションに調印せし各國會議する趣なりと上野よりはに加るへしと申來居候元來此會議は六十六年のタリフコン共選上野よりは未た何も不申來但獨逸國よりは我國も會議

未た其如何を知らす然れは今度の會議六十六年の約束改正の爲に候哉

貴國は此會議に御加入相成候哉

獨逸よりは已に申越居候得共上野よりの公報を待ち束ねて

決答可及積りに候

然り之は青木へ遣したる電信に御座候 獨逸よりの報知は公然たる事か

此末文千八百七十八年二月八日云々相分り兼候

右は昨年同人へ達したるインストロクションを云なり

其意味は如何

貴國と佛國との間に行はるゝ稅額の上に超過する高は決し はさ様にいたし度趣意なり尤も課税を専らにする迚譬へは たり如何となれは課稅は其國固有の權理に屬するものなれ 其意は税則を除く他の件を御相談致す事を可申通旨中達し て不取立積に候

其儀は上野公使へも御達相成候哉

る税則に習て收徴する積に御座候故に我國の稅を高しとす りプロテクトの意に非れは他國に其趣意にあらすして取立 の税はプロテクションの趣意より出れは甚た高し我意素よ え税目等一々當方に取調有之譬へは貴國の綿の如きも米國 然り去年五月頃上野よりも貴政府へ申立置たり右に付各國 れは他國の方も高しと言はさるを得す

其御談示に據れは税則は御相談不被成との御趣意と相

ションに基くといふにあらす しと云御議論も可有之なれとも他國其例なるは皆プロテク 然り此儀は最初より申出 我望に無之但し輸出税を取らぬはプロテクトの意なるべ し置候事なり税目を會議に附する

趣意なれとも最初拜見致候書付には右の廉相見不申 プロテクションより取立る國の例に從はぬといふの

細には認無之御望なれは逐々可申入候

併し今般我國より申出したるは條約改正に付稅則改正には は税則を除ては外に議すへき箇條なかるべし 此度の會議は六十六年の分を改正するの意なるへけれ

無之税則の外に議すへき廉種々あり 外に可議の康とは如何

既に取調置候ものも有之候彌其御談示に可取懸儀なれ 々可申入候 は 逐

自分心得迄に承り度候

唯今一々暗記不致候

又は六十六年の分迄改正する爲かの二ツなり 今日の論題は此度の會議は最初の條約を改正する

ビションの心得に御座候 フレビションと申來居候へとも當方にてはツリーテー の御容子にては六十六年の改正と相見へ獨逸よりも ν Ŋ

客歳十月頃の事なるべし

何つ頃に候哉

に及ひたる様に被相考候會議は好事なれとも出席の前 上野公使より返答有之たる後何か談判ありて會議の運

に可議箇條を同意せねは不都合なり

も不申來

は無之候へとも税則は附し有之故に條約を改正すれ は無之候へとも税則は附し有之故に條約を改正すれは大抵同し事なるべし條約にも六十六年程の委敷ものに 税則も亦改正せさるを得す

先般差上候上野より貴政府へ差出し候インストロクショ の寫を御熟覽可被下候 ~

すへきものに無之旨辯解いたし候趣又高きに可過との疑問 解有之度候 は前刻より御談示致候通プロテクトの意に無之を以て 候ては貿易衰微すといふ御懸念有之よし故上野より屢變換 先般上野より貴政府へ申入候節貴政府にては税目屢變換致 國にて御專有なされされは御國是不相成との趣なりき 諾當時拜見いたし候節充分明了ならされとも稅權を貴 御了

其事は我政府より上野公使へ談判有之たる儀敷

右の辯解を貴政府へ差出候後の儀は貴政府の返簡は 上野公使よりは屢御報告有之候歟

V

ま た

寺島外務卿時代

三五

然り

未た上野より確報無之を以て見れは或は然らん併し獨逸に 可有之筈なり ては既に表向通達致候を以て考ふれは上野へも 定て上野公使と談判中なるべし 何か御 通達

先般外務次官の御噂には不公然の趣なり 併し上野君は最早承知の事なるべし

次官よりの御談なれは公然たるにあらすや

如何ならん夫故いまた返答不申遣候

も電信にて御申越は無之哉 リフコンウエンションに候得は同様に御座候貴方えは 彌上野君へ御達有之節は此電信と同様に候哉

唯會議を催すと云而已に御座候拙者の心得にては本國

政府の見込は税則改正なるへし

上野よりも左様に中來居候

拒めは大なる不都合なるべし 會議開席相成一方は税則を議せんとし貴國委員は之を

ンと中來居候間右にて意味は能く相分り候 のを委員として可差出云々丼に青木よりもタリ 獨逸よりは明了に申來候スペスヒツクヂユチーを承知のも フレビショ

否タリフコンウエンションなれは出席を辞すれとも條約改 此電信にては會議は御斷りの方に候哉

の爲なれは素より之を辭せす 勝れりとす今の處にては甚た曖昧なり 評議の箇條を不取極して會議するは寧ろ會議せさるを

Œ

然りタリフレビションと申來候意味は曖昧とも相考候如何 意味を助る様に可致との言も有之候なり となれは青木よりの來狀には獨逸政府は成丈け日本政府の

明治士二年月十八日 寺鳥外務卿宛(電信)上野駐英公使ヨリ

英國政府倫敦會議開催方希望申入ノ旨報告竝ニ

Wooyeno,

Japanese Legation,

London

merchandize of the respective countries than are ructions not to impose any higher duties on the ment will renew the pledge contained in my instneed not therefore be discussed, but this Govern-Powers represented. manner by Japan will not be questioned by the right to establish its own Tariff in an independent recognized and that the necessity of resuming its in my letter of February 1878 shall be first distinctly is inclined to agree to enter a Conference with any this to Sameshima and Nishi found necessary by some of them. express understanding that the principles embodied of the Treaty Powers for Treaty Revision with the Inform the Minister for Foreign affairs that Japan A specific revision of the Tariff Send copies of

Terashima.

Tokio, 21, Feb., '79

右ニ關シ請訓ノ件

To Terashim,

future step after consulting Matsugata. ment or do you send it? to make said text to be submitted to English Governyou agree with above proposal, do you authorize us separate treaty is concluded with each power. desire and see no great objection to it provided personally understand this conference is proposed able to us and if so when we can submit to English they are disposed to attend. in London and asked other interested powers whether to ascertain how far all powers may agree with our Government text of our proposed amendment. I Foreign affairs asks whether this arrangement agree-English Government wishes conference for revision English Minister of Foreign affairs writes that Give full instruction for English Minister of London, 18, 2, '79.

WOOYENO.

三七 明治士二二三十百 上野駐英公使宛(電信)寺島外務卿ヨリ

倫敦會議開催ニ關シ回訓ノ件

三人 明治士二二旦士言 英國 公使對話書

倫敦會議及條約改正範圍等ニ關シ交渉ノ件

附屬書一 明治十二年二月二十日英國外務卿ョリ英國公 使宛電信寫

方訓令ノ件 倫敦會議ニ對スル帝國政府ノ 意嚮打診

英國公使ョリ英國外務卿宛電信案 右ニ對シ回答ノ件

明治十二年二月廿二日寺島外務卿と英公使パークス對話 一、條約改正丼會議の事

は貴方へも上野氏より電報有之たる由 候處旣に御退出の後なりし故森君に拜顏致候同君仰に 昨日本國政府より會議の義に付電報到來候に付參上仕

昨日落手致

し合せ度候 我外務長官よりは如何中出候哉拙者方へ申越候分と照

即之れなり 電信を示す

此御返事は如何御申遣し相成候哉

此通り 拙者へ中越たる電信は之なり 電文を示す 兩通とも御寫に不及差上可申候上野へ答へし

我政府より兼て獨逸へ答へし通りに貴國政府へも答へる との意に候歟 か

然り

文を指し言之上野へ答へし電 青木へ申遣したるより上野へは猶一層委敷申遣し候即唯プ ンシブルと而巳にては不明了に付更に下條を 加 へ置候

ンとあるのみ併し獨逸よりは其廉判然申來居候獨政府より 一地の代理公使へ來り候電信は御覽相成候歟 リフレビションといふ事は上野よりは不申來唯レビ シ 3

巳に一覽致候レビションといへは條約改正の事なれと 居候併し貴政府は税則を議するを要せられず も税則も其一部分なれは之を議するの意味は内に籠り

改正の草案は上野へ御遣し可相成哉

最初當方より申入たる趣意未相定且改正會議の目的判然な らされは難差遣候

時は其政府の都合も有之事故强て之を論せす 然り別に公使へは申遣し候事も有之候へとも素より場所と

先議題を収極置不申ては場所も時も無用のものなるへ

らす 何方にて之を議するも可なり素より龍動へ出るを否むに 初東京に於てする積りなれとも其議題さへ取極り候へは 非

御尤に候

兼候貴國政府より案内ありし 猶其上不審なるはどれたけの國々にて 會議するやも相 逸露西亞兩國あるのみ 國は當方にて知り得たるは 分り 獨

は 伊太利にて此兩國は東京に於てするを同意し又瑞典那耳回 又最初我より申込たる意味に對して返答を得たるは露西亞 どれたけの國々より相集候哉未た判然ならず 伯林にて致度と申來れり右等の譯故此コンフェ V ンス K

若歐羅巴にて致候事と相成候はは何程の日數を用 意の

た収極めさる前故確言しがたし 海日敷を除き凡一ケ月も費 人し候は は 用意出來可申併 未

寺島外務卿時代 三八

> は此地にて御取定相成候哉 其御趣意相定り候上は上野にて草案をと しらへ候哉又

當地にて起草致し候積り

松方歸國せされは難出來との譯も無之くも同 松方歸國相成候へは御起草相成候哉 人如 何樣

を聞込居候哉も不被測 0

な 見込の相違せるより預め訓狀の意をも確かめさるを得す又 故なり併し今は之に反し龍動にて會議する事となりたれは 京にて御相談致候義なれは預め訓狀の意に對したる明言を 元來我政府の見込は十二ケ月の後東京にて改正を議する積 候加之最初は各國互に條約を議定すへき見込に候處貴國の 政府を離れて事を議する故夫丈けの用意も致さゝるを得す 不承とも宜し如何となれは直に政府の下に在て之を議する り卽我公使へは訓狀の外に其義をも申遣し置たり素より朿 新趣向にてコンフエレンスと相成候は我に於ては意表の義

所及ひ時の義は公使より其政府と打合せ取極む 上野公使への訓條に十二ケ月の後といふ事も不相見場 へしと

税則を自分勝手に改正する義を各國にて見認むるに非 外務長官より差越候電信の返答を珍し候に貴國政府は れは會議を要せずと申遣し候て然る哉

然り其上に拙者より上野へ申遣たる電信の最後の意を御加 は無之なり ぬといふ御約束丈けは可致積りなれは勝手自儘といふ程に へ相成度素より他國に行はるゝ所の高き稅より高きを徵せ

but の字より以下の意を御加へ相成度候諸此内 信を指す いつれの處より書 いつれの處より書加 へ可申哉

此ソムオフゼムと有之候ソ 御改相成候では如何 ムの字文をなさずヱ ネ

右はかねて申遣し置候意味も有之右様相認候な ŋ

ソムにては何分文をなさす

き税を取て例となすに在り の税を取る却て高し即ち我趣意は各國にて行はるゝ所の高 税甚た高くして他の一國は太た安し併し他の一國は田 國の如きはフリーツレードにて素より例と不相成又米國の ヹ 如きは其税高しと雖も之を據とせす玆に一國ありて砂糖の ネーと改め拙者の意に合すれば宜したとへは各國の内貴 薬粉

心し御都合に依ては米國同様の税も御取立なさる事もある

ふの御趣意なるへし 詰り各國税目の内にて貴政府の氣に入たるを取るとい右様細密に渉り候ては総の文章の盡す所に非らす

然り

ネーといへは廣くして宛も貴意に同しソムと云時はどの國を指すかと云問を起す様相成候ヱ

宜し

否永久不取立つもりに候輸出税は一時停止して叉御取立なされ候事も有之候敷

へ候他國より高く取立ぬと云時は出入ともに係り候樣相聞

入而已たる義は御了解相成候事と存候輸出の義は訓狀にも巳に之を言へり故に貴政府にても共輸

が図の望なれは輸出税は可廢と仰られ候様に存候

右にて畢る我外務長官よりの電信併に唯今認候返答の寫差上候

三二九 明治士年二旦士四 英國公使宛

求ノ件英國外務卿宛電信案文中訂正方要

英國公使へ 二月廿四日達ス

度候敬具 一筆致啓上候陳は一昨日御談示の貴國政府へ御通知有之 といたし即別紙の通に有之候間此段貴國政府へ御通知有之 と文法上聊か相違致候樣被存候に付ては我政府に於ては矢 と文法上聊か相違致候樣被存候に付ては我政府に於ては矢 といたし即別紙の通に有之候間此段貴國政府へ御答電の案文 一筆致啓上候陳は一昨日御談示の貴國政府へ御答電の案文

But—than is imposed by some of the Treaty Powers.

註 別紙見當ラス

三三〇 明治士年二月士音 館書記官トノ劉新書 寺鳥外務卿ト英國公使

電信案文訂正ニ關シ交渉ノ件

寺島外務卿時代 三二九 三三〇

寫及同公使ヨリ英國外務卿宛回答電信案左ニ附記ス註 右含談中ニ現ハルル英國外務卿ヨリ英國公使宛電信

附屬書一

London, Feb. 50, 5 p. m. German Govr. have been informed by Japan (Govt.) that they will not take part in the conference here except on understanding that they are free to regulate their own Tariff as they please.

Ask Minister for Foreign Affairs whether he wishes to make similar intimation to Her Majesty's Government.

SALISBURY

附屬書二

Foreign Minister authorize me to state that Japanese Govt. will not take part in London conference except on understanding that they are free to regulate their own Tariff as they please. But they will engage not to impose a higher import duty on any goods than is imposed by any other country.

務卿と對話十二年二月廿五日英國公使館サトウ同公使代として來省外

サトウ

なさず候るも三様の義にてソムと致候事は語をるもヱニーとするも同様の義にてソムと致候事は語をるもヱニーとするも同様の義にてソムと致候事は語をるもヱニーと致度

にソムと字義相違せり。

相聞へ候樣被存候エニーとする時は何れの國よりも低稅ならねばならぬ樣に如何なる國をソムと言ふ哉承知致度

然らさるべし

存候故及御斷候也 貴方にて左樣被考候へは御勝手たるへけれども其邊縣念に

には騰らさる様に相聞候事と存候當方に於てはエニーとするも矢張或る國々の稅より上

と言ふ内にも最も高税なる國よりは其上に超へずと言ふ意此方にてソムとせしは其條約國の内或る國よりは高くせず

味なり

其内何れをとるとも最高の國よりは超へずと言ふ意味 此方にてエニ と中せしも同様也譬へは五ケ國あれば

る様の意味もあれば若し其邊の間違あらん事を恐れ御斷及 (しエニーとする時は最も低税なる國よりも超ゆべからざ

ソムにては意味不相分候

當方にては最も高税の國と同様致度と申譯には無之候得共 最低税の國より超ゆべからずと言ふ意味に相聞候ては不相 成候に付字義或は不充分なるもソムと致度申候事に有之候 然らば其旨公使え中入べく候

明治士年二旦士育 上野駐英公使宛寺島外務卿ヨリ

商議開催地問題ニ關シ訓令ノ件

信を以中進候通萬次便御禀報の次第に依更に詮議可及積有 以別信申進候條約重修の儀に付ては去月廿二日附第二號別 上野公使別信案第三號 二月廿六日附

有之候得共前條の意を以應答及置候別紙應接書寫にて御承 君主張被成族に對し彼政府より右電信の通に中立は了解致 固より篤く御含被成候事に可有之に付右我政府の趣意を貴 訓狀の主意を主張被致到底條約重修談判を可開旨を望みと 確答不及候歟又新規の發題等有之候はは其段は委細御禀報 京にて會議候も無妨候得共將又協同不致歟又は同不同とも 望に協同可致の確答候はは右に付重修談判方に取懸り其細 詳承り糾し御回答可申次第も可有之候得共兎に角去年二月 之候處右重修に付締盟各國政府より全權を派し倫敦おゐて 公使よりも本國政府より中越候趣有之候由にて申立候旨も かたく候條即前段の趣意に基き不取敢及電答候尤在留英國 れを我東京に會議すへきの趣意に開陳可有之筋に有之右は の上此方廟議を可被盡筋にて貴君御所任の處にては專ら前 目をも考覈商議可及儀にてさ候へは地を撰候譯にも無之英 九日附訓狀に附候內達書に揭明候ことく我政府條約重修に 方大藏大輔とも御協議の趣有之候由に付同氏歸朝の上は委 付右結約に付充分の訓狀御所望の旨以電信御申立有之尤松 會議可取聞旨英國政府の立意を以各國とも打合せ相成候に 付最要の所望は海關稅獨操の一點に有之各國政府於て右所

知可有之候

往復電信寫弦に相添候也 心得居候事に付同人着英相成候上萬御聞取可被成候右に付 薬劑阿片規則に付御電報の趣承知候右は富田書記官委曲相

御心得申添候也 義を主と致候旨更に別紙の通り同公使へ懸合置候此段爲(離 前翼翼禁) はエネーの字義何分不都合に有之候依て矢張りソムの字 應接振にて英公使於てエネーと認替候へとも猶熟考候へ コーントレーと有之候エネーの字拙者より貴下へ指進候 逐て英公使より本國外務卿へ指出候電信中エネーヲゾル 電文の意味に據ればソムと可有之候處對話書中に有之候

註 添附書類省略ス

明治士二二旦士旨 寺島外務卿宛(電信)上野駐英公使ヨリ

倫敦會議ニ關シ英國外務大輔ヨリノ聞込報告ノ件

Tokio,

Feb.

28, 1.17 p.m.

To Terashima,

Am consulting Sameshima contents of telegram

寺島外務卿時代

invited United States because Convention with her Japan at present, also that British Govt. has not Foreign Affairs telegraphed S. Parkes not to leave in London and consequently English Minister of while privately informed by Gaimutayu that S. Parbasis of conference and ister of Foreign Affairs. 21, consequently not yet communicated English Minwith English Minister of Foreign Affairs to inquire already signed. telegraphed that Japan objects to conference other particulars. Have demanded interview

WOOYENO.

明治士军二旦大合 寺島外務卿宛上野駐英公使ョリ

連合會議等ニ關シ交渉經過報告ノ件 條約改正豫告、談判開催地、新通商條約締結及

附屬書一 英公使宛書翰寫 明治十二年二月十五日英國外務卿ヨリ上野駐

照會ノ件 倫敦會議開催ニ 對ス ル帝國政府ノ

明治十二年二月二十七日鈴木書記官卜英國外 務大輔トノ對話書

倫敦會議提議ノ事情問合ノ件

條約重修一件豫告の點に英政府異論の廉は拙官屢々當國外 Wotice 四月十五日到 四月十五日到

を互に遵行すべしとの約束にて決局に至り此上は速に改正 有之慥に落手仕候 手を相急候模様に有之候然るに改正場所の儀に 付 別 紙 寫 の實地に不取掛候ては右目限迄に新定の條約發行いたし候 月一日前には決して新定の條約を發行する事なく現存條約 務卿と談判の末先報第二號別信を以て申進置候通當年十二 (ロ號)の通暗號電信差立候處別紙寫 (ハ號)の通御回 (イ號)の通外務卿より公翰落手いたし候間不取敢別紙寫 相叶中間敷右の情質にて當政府より瀕りに實地改正の着 電

居共通商條約なるものは我政府の自由を以て何時にても勝 島公使には曾て通商條約取結の儀閣下え申立相成候趣承り 意を當外務卿え中込候方可然歟否の點に於ては獊同氏の見手に稅額を增減する事不相叶譯に有之候間今此御回電の趣 右御回電の趣意は直に當國外務卿え通知可及筋に候得共鮫

> 見合候方可然との返答有之候依つて其儘相控置申候 え到着巨細の情實說明可有之候間不遠通商條約取結方の中込も可有之と一先相談に及候處近日松方大藏大輔にも日本 右御回電の趣意は最初の訓狀より一步も退かす税額は我君 立に對し閣下よりの御指揮可中來夫迄は當外務卿え中込方

り英のみならす佛、獨も同様の事にて曾て其外務卿等より得候事無覺東相考 (報にて調印の内條約書を云) 其次第は獨 に付同政府に嚴重の掛合いたし居いまた決局に至らさる程 更に他國の稅務には注目致居已に佛國砂糖製造保護法の事 置候別信中にも委敷記載職人の紛擾各所に起り之れ他國に 保護法の行はるる故なりと喋ゃ辯論するもの多くありて殊 成居候事と存候間御見合可有之候)丼に拙官より折々差立 は曾て差進置候他二國の分も鮫島青木の兩公使より送致相 差越相成候返翰(英の返翰は昨年十一月二日附にして其寫 に敷回の辯論相費候得共到底實際の情實米國の如き結果を 主張相成素より拙官に於ては其御趣意に基き此迄當國政府 主の特權を以て何時なりとも勝手に增減す可しとの事を 事に有之候

拙官は飽迄も我政府の御趣意に基き辯論致居候得共各政府

様にては實以遺憾の至に存候に付左に愚存陳述仕候 税權專握の一點兩議の不合よりして改正の全局烏有に屬候 失し通商上の障碍となる可きを以て之に從ふ能はすと雙方 要せすと彼に於ては稅目の約束なき時は直に商法の標準を Elements of Certainty 加す可しとの點に於ては各國粗同一に同意相成候に付今此 の論旨いまた一定の場合に至らす然るに税額を何程歟に増 とも勝手に增減す可きを以て別に税目議して約束とするを にて我に於ては税額は日本政府君主の特權を以て何時なり 之候則方今の處にては互に自家の主義を主張いたし居候姿 の請込前述の通にて迚も稅權專握の儀同意不致は判然に有

し候間此上我政府の手段は現存條約を破棄する歟又は一步税權專握の儀各政府にて不肯は前述の通にて已に判然いた 拙官の考にては其第二策に出て税額を極め年限を定め互相 然の決心あるに非らされは容易に行ふ可き事にあらす故に 策にあり其初策は最危險を冒すの所分にして我に於ても斷 を譲り歐洲通商國の慣習に做ひ互相の通商條約を結ぶの二 際に頗る穩當なる所置と相考候右に反し我に於て是非とも の權理を以て通商條約を結に至らは我君主權に抵觸する所 勿論且其年限後は税權專握も全く我に歸候樣相成實

> 葛藤は他の國の仲裁に決を仰くの例多く決して之を干戈に 斷えて後の手段にして容易に行ふ可からさるなり 魯は我請求に充分同意致聊同志を得候姿に付英、佛に對し 訟る等の事ある事なしと然るに今回改正事件の如きは米、 チュウイス氏の説に近來歐洲に於て通商上に關する事件の 慮を費さ」る可からさる事にて當府公法家サー、タラウル、 條約破棄の危險を冒すの外我志を達するの目的無之候故に 張り到底改正の期は見る可からさるに至らん然る時は現存 税權專握の主義に固着いたし候はは彼も亦自己の主義を押 あらされは爲し能はさる事なれは百方の術策巳に盡き望み と云可からす乍併斯の如きは詰り干戈を手にするの決意に 決局を得さるに於ては前述の危險を冒すも果して無智の策 ては飽迄も税權專握の旨意を押張り反覆討論して獺充分の 今此の危險を冒すと通商條約を結ぶと其利害の如何は深考

取結候樣御委任有之度候 我政府にて通商條約取結の儀御決議相成候得は税則も各政 の多少を豫定するは吉原大藏大書記官在歐中に付同 府と協議 命其他の條款は在歐各同僚中協議 せさる可からざる譯に付稅務に關する事件と稅額 Ø 上に取極至當 の條約 人之御

ホート氏え面

に格別の儀聞出不申候

件各國利害の均しきを以て右等の政府えも一應通知相成た なき政府に對して會同を需めし歟の疑に對しては改正の事 獨、伊、白耳義等は會同同意の旨返答爲有候由に承り候 ひたるを以て殊更に相除きたるなりとの事に有之他各國中 當りても右四ケ國は五に協議せさる可からさるの義務を有 當府にて此度我條約改正に付公會の催ある所以を尋るに干 此公會は改稅約定中に調印せし各政府の委員を會同するの 合不相成其譯は米國は巳に昨年獨步して日本と條約を取結 とするの二點にありと然るに米國えは此公會の儀何とも掛 日本政府の請求に可應歟を認定候はは改正の落着も可速と 費するのみならす萬事の事迚も新定條約發行の期限迄には 八百六十六年の改税約定と題するものは英、佛、米、蘭、 候得共前述の通り獨步條約を取結たる云々の事柄にして別 るとの事に有之米國の此公會に關せざるは甚以て不審に存 打合相纏る間敷寧ろ一地に公會を開き各政府にて何程丈け 的なりとせは何故に獨、伊、白耳義の如き右約定に關係 事にて要するに交誼上の義務と事務延滯の憂を免かれん | 且其協議の爲に一々書翰を以て往復候ては多分の時日徒 | ケ國結同の調印に相成居候に付今此を更正せんとするに

> 務卿の意見承り得中度其模様は次便に可申述候右報告仕候 可議箇條幷に公會の趣意其他改正事件に付て一層相迫り外 候循拙官には明日午後外務卿え面會の約有之候間公會にて 會公會の內情探偵爲致候處別紙(ニ印)の通應接書差出中 昨日鈴木書記官を外務省に遣し大輔ボウンス

十二月二月廿八日

上 野

寺島宗則殿

答爲有候歟其邊は委敷承知仕度候尤右に付昨日別紙寫 前外務卿より再電信差立相成候趣に有之此公會に付い 故に追て當政府より令有之迄は日本發途見合候樣兩日 電に日本政府にて此度龍動の公會異論なりとの趣申來 事に付パークス氏に歸英の儀達相成候處同氏よりの返 エクスは何様の儀を閣下え申立相成閣下は何様の御返 (ホ) 號の通暗號電信差立置中候 本文(ニ號)應接書にも記載有之通條約改正

曾て改正場所の儀に付別紙寫 (^^號) の通電信御差立

:成候間(ト號)の通返電仕置候

之に付過日外務大輔え面會其實否相尋候處同太輔には 閣下えも報告可仕と存し數日相待居候ても何たる儀無 手いたし候次第に有之候 之様可取計との約束にて然して本文(イ號)の公翰落 知の儀手拔相成候趣謝せられ此上は速に公然の掛合有 餘程愕然の樣子にて此比各般の事務多忙にて拙官え通 得共いつれ當國外務卿より公然の通知可有之其上にて 元來此公會の催ある事は拙官には四五週前に聞込居候

12345電信ハ夫々三二六、三二七、三三二、三二 三、三二四ナルニ付参看

Sir,

「別信第九號附屬(朱書)

(イ號)」 サリスボリー侯ヨリ上野公使宛書翰

之儀ニ付申進候扨我英政府ハ貴政府ヨリ御要求相成候英日 條約改正ノ商議ヲ當英國ニ於テ相開度希望候ニ付我政府ヨ 昨十二月廿一日附拙翰丼ニ右ニ對スル同月二十七日附貴答 加入スル存意ノ有無承知致度旨照會致置候就テハ貴政府ニ ^右關係ノ各國へモ龍動府ニ於テ設クヘキ右改正ノ集議

> 賴旁申進候敬具 我英政府へ右改正案御差出相成候哉御通知有之度此段御依 モ右ノ方法御同意ニ候哉若シ御同意ニ候ハ、何時頃マテニ

於外務省千八百七十九年二月十五日

サリスボリ 手記

(右原文)

Lord Salisbury to Wooyeno.

Foreign Office,

February 15, 1879.

part in a conference to be held for that purpose in same month, I order to ascertain whether they are disposed to take munication with the other Powers and they have accordingly placed themselves in comment intend to propose in the Treaty between Great consideration of the amendments which your Governber last and to your reply thereto of the 27th of the Britain and Japan should take place in this country, Her Majesty's Government are desirous that the With reference to my letter of the 21st of Decemhave the honor to acquaint you that interested,

London

amendments. what period you will be in a position to lay before enough to inform me whether this arrangement will Her Majesty's I now have to request that you will be good agreeable to your Government, and if so, within Government the text of the proposed

have the honor etc., etc.

(signed) SALISBURY.

(三號)

鈴木書記官英外務大輔ポンスホー 最初通常ノ挨拶終リテ ト氏ト内談筆記

上野公使近來御機嫌宜シキ

忙ナラン 三日風邪ニテ引籠リ被居夫故僕代リニ推参候不相變御多 難有フ今日ハ少々同度儀有之同氏自分被罷出度ノ處此兩

大 然ラ ハ此會ニハ我公使等モ出席可致御見込ナル

及 府ノ爲御不利ノ事ハ決シテ有之間敷必ラス御心配ニハ不 リ各員同意スル處ニョリ萬事取定度トノ趣意ナレハ貴政 ノ件ニ付親シク御五ニ咄シ合雙方損害ナキ公平ノ論ヲ取 ス」ト唱ヘル大會ニハ非ス唯各國打集リ貴政府ヨリ申出ハ隨意ニテ聊カ差支無之依テ此會ハ通例「コンフエラン 勿論ノ事ナリ公使等ハ別ニ何某ヲ引列相成トモ其邊ノ處

政府モ此會ニ御招キ相成タル事ナラン 仰ノ如ク六十六年連合調印ノ改稅約定ニモ關シ此會御開 アレハ其時ハ英佛米蘭連合調印相成居候ニ付勿論米

モ第十箇條ニ至リ他ノ條約國不同意ノ時ハ此條約實地施 府ニテハ彼ノ條約中悉ク貴政府ノ請求ニ應候樣見ユレ ニ會同スルニ不及依ツテ同政府へハ案内不致候一體米政 獨步シテ私ニ貴政府ト旣ニ新條約調印相成候儀ナレバ共 否ラス御承知ノ通米政府ハ右連合調印ノ義務ニモ關セ ኑ ス

> 御推察ノ通リナリ僕ハ當省ニテ萬事ニ預リ殊ニ法律 スル事ハ物テ僕ノ引受ナレハ隨分忙カ敷事ニ

事右ニ付テハ何ニカ深ク御趣意モ可有之カ預シメ御見込 來如斯事件ニ付如此公會ヲ設ル等ノ例ハ曾テ承ハラサル モ承リ置度一體此會ハ貴政府ニ於御企ノ事ニ候ヤ 度當府ニテ我條約改訂ニ付公會ヲ被開度ト ノ 由

大

時ニ他國連合ニテ調印セシ譯モアリ其上今度貴政府 テ決スル譯ニモ參ラス詮方ナク此會ヲ企テ候儀ニ御坐候 等ニ關スル事件ハ容易ナラサル事ナルヲ以我政府一議ニ 通連合ニテ調印シタル譯ヨリシテ無據義務アリ殊ニ稅目 見込承リ度ト」右様各政府ヨリノ依賴ニハ候得共前述ノ 條約改訂ニ付テハ諸事貴政府ノ御處分通リニ致度ニ付御 條約改訂御請求ニ付テハ他歐洲各國ヨリ我政府へ書通シ 然り此會ハ我政府ニテ企タリ其故ハ六十六年改稅約 モ亦能ク御承知ノ事ナラン依ツテ此度同國ヨリ中立タル テ曰ク「貴國ハ東洋トノ關係最モ大ナルヲ以日本ノ情實 ガヨリ 定ノ

ナリ 實ハ此度當府ニテ會同ヲ催スニ付テハ我公使パー迄ノ咄 實ハ此度當府ニテ會同ヲ催スニ付テハ我公使パー 府ハ好と顔ヲ見セ機嫌ヲ取リタル様ニ見ユレト ン其時ハ何ノ甲斐モナキ事ト被思候大輔又曰ク 國同意セサル時ハ彼ノ條約ハ全ク塵紙同様ノモノトナラ 行ス可ラストノ意アルヲ以テ見レバー時日本ニ對シ米政

- モ若シ他

再と電信ヲ打チ當方ョリ更ニ指令候迄ハ出發見合セ候様 政府ニテハ此會同ニ付何カ異論ヲ起シタル由申來候ニ付 申遣置タリ抑此異論ハ如何ノ事ニ有之候ヤ上野公使ニハ クス氏へ電信ヲ遣シ至急歸國候様相達候處其返答ニ日本

鈴

何二力御承知二候十

不被得ト存候此儀ハ早速同氏へ相通可申候 僕ハ好ク存不申年去右二付テハ上野氏未夕何 夕 ル報知 ヲ

大

候テハ誠ニ以貴政府ノ爲氣ノ毒ニ存候 速二結局二至候樣心掛居候最中右樣御異論等有之樣承り 僕モ貴政府ノ御爲右様コンフエランス等ヲ設條約改訂

今日 ハ好キ御報知ヲ得難有存スル ナリ御多忙ラモ不顧失

Will telegraph again after

敬仕候

大

御相談可申上候決シテ不然何時ニテモ御用ノ節御來駕被下度及丈ノ事ハ

十二年二月廿九日 務大輔ボンスホート氏へ面會應接ノ次第右ノ通ニ御座候 務力・ できる。 大力・ できる。 では、 できる。 で。 できる。 でる。 できる。 、

書記官 鈴 木 金 藏

全權公使 上野景範殿

|二||四||明治十二年三月三日||寺島外務卿宛(電信)

税目改正ニ關スル英國政府ノ意嚮報告ノ件

Tokio, 4 Mar. 1879 11.4

Tokio, 4 Mar. 1879 11.40 p/m. London, 3 Mar. 1879 5.26 p/m.

Terashima

Gaimusho,

Tokio.

English Minister of Foreign Affairs stated that to lter tariff at discretion impossible but will agree

W00YENO.

to new fixed tariff. sulting Sameshima.

三三五 明治十二年三月五日 上野駐英公使宛

稅目協定問題ニ關シ訓令ノ件

在英上野公使へ別信案第四號

三月五日附

佐運に立至候共雙方協議を以輸出入稅目取極是を條約に附別信申進候條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に以別信申進條條約重修に付英京にて會議可及云々は先便に

候様の事無之旨を確證約束候分は差支無之將又右稅目も米 附して遵守可致體裁のものに無之上は固より商法變動の害 最高を比例し我撰定する所に從ひ雙方を協議に不出條約に 候は卽國權にも差響可申筋に有之候尤右稅目各國輸入稅の 言候通他國おゐて取立候稅額より餘分の稅は取立不申筈に 致度く御辨明御談判被及候はゝ英政府にも一定の税目を承 の意に非さるを證するに足るへく候即第三十九號布告の通 國のととく保護の主義に基候譯に無之訓狀中申陳候通理財 を實施する以前に必條約國に通知可及筋にて決て朝暮轉換 を避んか爲兩國政府にて滿足する時限を定め稅額增加せる 甘し候儀にて此上に各種税目を協議せは猶一層の束縛を受 上不得已場合より收税増加の義中外同様増加致度是即保護 布此約束を設候は旣に巳に我より一步を讓り自から束縛に 付右主意徹底候はゝ卽今强て各種稅目を協議侫には及申間 哉の懸念より相起候筋にも可有之候得共右は訓狀中にも明 右税目議定可致との見込は我方おゐて格外の厚稅取立可申 歩百歩の差にて好む所に無之旨は篤と御了解相成度候第一 し堅く遵守可致との事にては結局六十六年江戸約書と五十 地に於ても從來無稅の物品に課稅相成候右の理合熟慮彼

中遺候係貴君より御通知御協議相成度候申遺候旨意に不外其後の異肽も無之様子に付今便は別段不申遺侑之候得其猶御打合御盡力可有之靑木公使へも先便知致度等との發議は有之間布筈と存候前文の趣鮫島公使へ

(中略)

右甲進度如此候也

スカ 証 「本月一日附電信」トアルハ三月三日附電信三三四ヲ指荷以本文の大意は明日以電信甲遣候積りに有之族

三三六 明治十二年三月六日 去馬駐英公使宛(電信)

税目協定問題及條約改正商議ノ場所ニ關シ訓

令ノ件

Wooyeno,

Japanese Legation,

London.

Press emphaltically upon the notice of British Government our guarantees not to lay higher duty on imports than is levied by some of the Treaty

Given in at London the 7th

79. 5.

7 p/m.

Mar.

79. 10. 10 a/m.

act immediately upon this as my instruction to them municate to Sameshima and Aoki so that they may intimate to him also that American and Russian in Tokio. Finally our desire is to open negotiation for revision for Commercial Treaty with import tariff annexed. tection but revenue only. Therefore no necessity present policy of Japan to adopt tariff not for promaintain commercial stability and that it is the time as may be agreed upon has first been given to established shall be made until a notice of such Powers and that no changes of tariff rates hereafter are exempt from our consideration. Com-Show this to the Foreign Minister and

Terashima,

TERASHIMA.

Tokio, 6th Mar. '79

二二七 明治十二年三月七日 寺島外務卿宛(電信)

セル旨報告ノ件 英國政府各國政府ニ對シ倫敦會議招請狀ヲ送達

Received at Gaimusho the 8th

Gaimusho, Tokio.

Received to-day letter from Paunceforte partly correcting his previous statement which telegraphed 27 February. He says 13 powers including United States of America were invited to conference by circular dated 6th January. United States of America, Russia and some other have not yet replied.

WOOYENO.

三三八 明治十二年三月十日 寺島外務卿宛(電信)

評議アリ度旨稟請ノ件税権回復ノ困難ナル旨報告竝ニ通商條約締結方

To Terashima,

Tokio, Paris,

March 11th 10.15 a/m. March 10th 11.37 a/m.

Foreign Office

Most of European Powers particularly English and

German are manifesting opinion that revision is impossible as long as Japan maintain claim to fix her own tariff freely. Hitherto we have been insisting upon the claim but we are persuaded it is useless to do so. If you are maintaining claim there will be an end to all prospect of revision for the present. We urgently entreat you to consider concerning orderless Commercial Treaty.

Answer by telegraph immediately.

SAMESHIMA. WOOYENO.

三三九 明治十二年三月十日 英國公使對話書

條約改正商議ノ場所及稅權問題等ニ關シ會談ノ件

明治十二年三月十日英公使來省外務卿と對話拔萃

一、條約改正一件

大隈大蔵卿は條約改正御用掛被命候由新聞に見へたり

夫は何等の爲なるや

別段の旨意も無之候得共其掛り無くんばあらさる故に有之

候

其後上野公使より何そ電信有之候哉

コンフェレンスの事に付ては一向申越無之候

申入たと甲事は同公使より不甲参候哉過般上野公使へ御返答御申遣相成候處右我國外務卿へ

得共多分御覽に入れしなるべし此方より申遣候事を貴外務卿へ一覽に入れしとは不甲參候

過日電信を以貴外務卿と面談の旨申越せり

其時の應接は如何の模様なるや

當方へ稅權を任せるは何分不同意に見ゆ

夫は幾日程前に参りしや

三日計前の事なり

前の御返答は幾日程其前なるや

夫より三日計り前なり

過日御示しの通上野公使へ御申遣相成候得は今般のこ

ンフェレンスは止めになるべし

拙者も止めになるへく存す

上野公使よりの電信に閣ト御歸國の義御見合可相成樣申越何卒早く極る樣致たし

六二七

寺島外務卿時代

せり

ならは訓狀の旨意御同意あるなきに拘らさるべし寒ならば其迄の事に有之候當方於ては東京にて協議する譯ならば宜しと申上候處右に付コンフエレンスは止めると申り然るに龍動於て會議するとの事に付其儀は訓狀に御同意我政府は始より東京に於て協議したき旨貴政府へ申上置け

其節は同大使にて直に改正の事に取掛る積りに無之一通り岩倉大使を各國へ御遣し相成候は如何の思召なりしや

方不行屆か故に終に其儘立歸り申候各政府へ協議に及ふ積りに有之候處是亦他國に在ては取調

は如何 其節各政府へ條約改正の事を御談判の旨御報知有之候

其節は都合により御協議可及事も可有之旨申進置けり

旅行すべきの處之か爲め止り居りし程の事に有之候其節英國外務卿は必す條約改正の爲めなりと思ひ他え

其頃よりは巳に五ケ年も經過致候

其事は彼の訓狀に記載せり

夫は於龍動會議する時の事なり

於東京も同様なるべし

す。東京に於ても前に中通り各國と會議は當方の望む所にあら

先年條約改正の儀申上候節何等の箇條を改正すべき哉御韓

御中聞可有之義と存候今般我望を御承諾難相成義に候とも委細東京にて協議の上今般我望を御承諾難相成義に候とも委細東京にて協議の上は我改正せんと欲する旨意丼に共廉等併せ申上置候義に付ありしか其節は都合有之御答に不及其儘に相成居候處今般

gotiation for Treaty Revision in Tokio?

Answer

Has the British Government agreed to open ne-

London.

immediately.

面晤の時迄には何れにか取極候樣致度候今日の處にては未た如何相成候哉不相分候得共此次に

13th March '79

TERASHIMA

外務卿と初度の往復は閣下も御承知なるべし都合何とも不申越候に付其後の事は相分り不申同公使と貴上野公使より二度目貴外務卿へ書面差出候後は貴政府の御

三四

明治士是三旦吉

上野駐英公使宛(電信)寺島外務卿ヨリ

倫敦會議發議撤回方並ニ東京ニ於テ談判開始ニ

關スル英國政府ノ意嚮問合方訓令ノ件

と存奏然り伊露の如きは承知也獨逸も當地在留の公使は承知の事然り伊露の如きは承知也獨逸も當地在留の公使は承知の事他の各國にては東京にて協議の儀承知なるや

Wooyeno,

Japanese Legation,

London.

By your letter of 31 January it seems that the London Conference was first moved by you contrary to my private instruction of 9th February 1878 in which our desire to open the negotiation in Japan is clearly stated. Therefore try to withdraw your statement by explaining that it was only your personal view and ask when the British Government

三四〇 明治士(雲月十三日 上野駐英公使宛(電信)

府ノ意嚮問合ノ件條約改正談判ノ東京ニ於テ開始方ニ關シ英國政

Wooyeno,
Japanese Legation.

寺島外務卿時代 三四〇 三四一

will be ready to commence the negotiation in TERASHIMA. Tokio.

Tokio, 24th March '79

明治士年三旦士旨 上野駐英公 使ョ

保護關稅及談判開催地問題ニ關シ訓令ノ

上野公使別信案第五號

三月廿六日附

翰え未た返答無之候ても同卿の見込應接の砌被聞取候由に 承知致候將又十二月二日附貴君より英外務卿え被差出候書 進置候通我政府は保護税の論趣にて海關税を増課いたし候 出の書翰を豫告と認候由右に付往復英文書翰寫御送致相成 往々御辯論相成候末昨年五月四日附貴君より英政府え御差 別信第二號本月十九日接到披見致候陳は條約重修豫告の點 は最前附與致し置候内訓狀中重修談判の爲全權の委員を我 有之候上は異論無之筈に被相考候第四條條約重修場所の儀 譯に無之素より國毀多端に依て海關稅其他增課致候趣意に て四个條被中越右第一第二の條々は本月五日附別信にて申 國え派遣すへきを請ふへし云々中進置候に付ては其意貫徹

> 有之候 Ø 候儀元米我政府の趣意たる旨徹底候様厚く御注意御辯論可 被致彌以全權委員を本邦え派出いたし東京にて右談判相開 り候上は貴君全く一已にて同外務卿え御話の譯を確乎辨明 の見込にて改正場所の儀歐洲に取極候方便利なる様委任外 儀御話相成不都合至極實に不得其意次第に候併事此に至 たし候様霊力可有之處不料英外務卿え應接の際貴君一已

一本月十日鮫島公使御連名にて別紙甲號寫の通御電報相 承知可有之候就ては別紙乙號寫の通條約重修應接の儀束 必す否御報有之候事と存候 京に於て相開候事に英政府は異論無之敷御蕁に及置候條 にて御答不致候右に付別段鮫島公使え不申遣候條左樣御 達候上は廟議所在明細に御了解相成候事に付殊更に電報 是亦同様度々申進置候次第もあり且は本月五日發別信相

右件々申進度如此候也

尚以本文の議に付一昨廿四日發線の電信寫丙號及ひ在 我公使對話書丁號の通爲御心得差進候也

1234夫々三三八、三四〇、三四一、 三三九参看

三四三 明治士年三月六日 寺島外務卿宛(電信)上野駐英公使ヨリ

英國政府東京會商ニ同意セル旨回答ノ件

Received at Gaimusho the March 1879 12.-29th

Given in March 1879 5.45. p/m. at London the

Terashima

Gaimusho,

Tokio.

graph, this telegraph abound English Minister of has abandoned London Conference. promised shortly replies gotiation for Revision shall take place at Tokio, am Minister of Foreign Affairs. He is willing that ne Communicated your telegraph seventh to English Affairs incentively. on other points of English Government tele-

七日ノ電信トアルハ日日大ヲ指スモノト認メラル

WOOYENO

明治士军三旦六百 寺島外務卿宛上野駐英公使

> 關稅引上限度ニ關スル交渉經過並ニ東京ニテ條 約改正談判開始方英國政府同意ノ旨報告ノ件

附屬書 明治十二年三月二十六日上野駐英公使ョリ 外務卿宛書翰寫

梲則改正及談判開催地ニ關シ辯明ノ

づれ内閣の衆議を經候上近日中確答可有之筈に付其上にて 不申候へ共應接中の口氣を以察するに實に難事と被相考 府に於課せさるべし」との點に於ていまた慥なる返答は得 を除き他の條約國に於課する處の稅より過重の稅は日本政 認を得候上今日發電いたし候尤稅權專有の廉に對し「米魯 意相成候に付別紙(ニ印)の電信案を一往同卿へ相示し承 を奉し及討論候處東京を以て改正場所と相定候儀丈けは同 翰にても別紙寫(往七號)の通辯解飽迄も我政府の御趣意 し去る廿六日面會を遂け更に右(ロ印)電信寫を示し且書 に付御問合の電信到來候に付早速同卿へ掛合面晤の日を期 遷延に及ひ尙本月十三日別紙寫(^1印) 條約重修一件に付本月七日別紙(イ印)(註 賞語) 十二年別信第十號 (豆印)の通飜譯いたし早速英外務卿へ の通重修場所の儀 相示候處兎角確答 の通暗號電信到 五月十二日到

委曲御報知可申上候

本月廿四日別紙寫(本印)の通龍動公會は最初卑官より本月廿四日別紙寫(本印)の通龍動公會は最初卑官より在條英外務卿よりの書翰落手候迄は更に此公會に付當國政際英外務卿よりの書翰落手候迄は更に此公會に付當國政府と公私に限らす談判に涉候儀無之本年別信第二號を以中進置候通改正場所の儀に付同卿よりの間に應し唯卑官自己の見込を中述たる重有之候へ共決して夫か為後害を顧す様の事無之は勿論に有之候尤今日發電甲上候通右公釀す樣の事無之は勿論に有之候尤今日發電甲上候通右公釀す樣の事無之は勿論に有之候尤今日發電甲上候通右公酿す樣の事無之は勿論に有之候尤今日發電甲上候通右公職す樣の事無之は勿論に有之候尤今日發電甲上候通右公職す樣の事無之は勿論に有之候之今日發電中上候通行以外別。

外務卿 寺島宗則殿 十二年三月廿八日 全權公使 上 野 景 範

註 1234夫々三三六、三四〇、三四三、三四一參看

附屬建

往第七號寫

併セテ共趣意辨明ノ爲メ少々左ニ申添候扨我政府ニ於テ輸以手紙申述候陳者我政府ヨリ電報到着致候ニ付則右寫進達

入品ニ賦課スル税額ハ條約國ニテ同種類ノ輸入品ニ賦課スルモノニ超過セサル可キ旨ヲ申出候譯ハ新定ノ税則ヲ以テルカ爲メニ有之其邊ハ無論閣トニ於テモ御承知ノ專ニ可有之故ニ我政府ハ尚ホ此意ヲ確證セン爲メ米魯兩國現行ノ稅之故ニ我政府ハ尚ホ此意ヲ確證セン爲メ米魯兩國現行ノ稅之故ニ我政府ハ尚ホ此意ヲ確證セン爲メ米魯兩國現行ノ稅入稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ入稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ稅ヲ變更候軍有之テハ兩國ノ貿易不確ニ付右改正ノ節ハ

注意ヲ仰キ候此段得御意度如斯敬具
れ全々一體ノ取調我國ニ於テスル方便利ノ故ニ可有之且此ハ全々一體ノ取調我國ニ於テスル方便利ノ故ニ可有之且此所ニテ差支有之間敷趣ニ有之候ニ付今日ニテモ尚其御説ニ族旨我政府ニ通知可致ト存候我政府要求ノ無論至當ニシテ候旨我政府ニ通知可致ト存候我政府要求ノ無論至當ニシテ展自我政府ニ通知可致ト存候我政府要求ノ無論至常とした。

千八百七十九年三月廿六日

在英公使館

上野景範

ロルド、サリスブレー公閣下

(右原文)

(No. 7)

Copy Wooyeno to Lord Salisbury.

Japanese Legation.

March 26th 1879.

My Lord,

In reference to the telegram from my Government, a copy of which I have the honour to leave herewith, I venture to place on record some considerations, which tend to explain its imports.

Your Lordship will no doubt recognize that the Government of the Emperor in proposing that the duties on imports into Japan shall not, in any case, exceed those chargeable on similar imports into their own countries, by some of the Treaty Powers, is animated by the desire to prove that there is no intention that the new Japanese Tariff should be in any way prohibitory. Still further to demonstrate

this desire my Government is prepared to resign the right of raising these import duties even to the level of those in force in the United States or in Russia.

doubt be agreed upon so as to preclude any inconby an adequate notice, the length of which can no stipulate that any changes in the rates of duties tions in the uncertainty which arbitrary or sudden alterabetween the two countries should not be exposed to of Nov. last, as to the desirability that the views expressed in Your Lordship's note of the 2nd Government now exhibits its readiness to meet vinience in this particular to traders. which may be considered desirable, shall be preceded I have further the honour to point out that my the tariff might produce, by offering to trade the

Lastly my Government, in expressing its wish that the revision of the Japanese Treaties should take place in Japan, probably considers that it will be more easy to ascertain in that country any details connected with the subject of its trade. As Your Lordship stated to me on previous occasion that it

my Government that this still remains the view of Japan or in England, I apprehend that I may inform Your Lordship. ment whether the revision were to take place in appeared of no importance to the British Govern-

demands, and its manifest desire to meet the refrankly reciprocated. quirements of trade will be fully recognized and in the belief that the indispensable fairness of its arrangements to Your Lordship's careful attention Government in reference to the revision of its Treaty I commend the attitude now assumed by my

I have the honour etc.,

(Signed) WOOYENO KAGENORI.

三四五 明治士年三星十百 英國 公 使對話書

條約改正談判開催地及其ノ期日等ニ關シ應答ノ件

明治十二年三月卅一日英公使來省外務卿對話

龍動會議ノ儀ニ付上野公使ヨリ其後電報無之候哉

條約改正一件

中入無之候

右申入シ哉否ハ同人ョリ判然申越無之候

ルヤ 今迄ニ東京ニテ協議ノ事承知相成候國ハ何レ ニ倫敦ニ於テ改正ノ儀談判最中ナリシト申事ニ有之候 今般我書記官ケンネヂー氏出立ノ際上野公使ヨリ頻リ 國々 ナ

獨露伊等ナリ

佛國ハ如何

佛國ハ同國ニテ致度ト申事ナリ

右ハ何頃申越相成候哉

有之候 簡ニテ申越候義ニ無之同國外務卿ト 昨年十月巴利發ノ公信ニテ中越セリ尤モ右ハ同政府ヨ ノ對話中被申聞候事 ŋ _

今般東京ニテ協議ノ事ニ決シ候 取懸り相成候思召ナル + Ŀŀ. ハ來ル十二月頃正

否十二月前二相始可申候

夫ヨリ前トハ何程前ナル +

相成候共十二月一日迄ハ實施セサルヘキ約束ニ相成居候ニ 共邊ハ貴政府ヨリモ閣下へ御申越相成居ヘシ其前條約重修

寺島外務卿時代 三四六

> 然り参り居レリ ハ何日ニ御落掌相成候哉 **廿八日附電信略文ヲ示サル此時卿公上野公使ョリノ三月** 只今御覽ニ入ルヘシ

昨土曜日來著セリ右文中貴外務卿東京ニナサント欲セ ニ相成候譯ナリ ル旨御話シアリシ趣中越有之候就テハ先ツ龍動ノ方ハ止 ラ

X

ル

議スヘシト申出セシナリ若シ不然ハ東京ニ於テシ ヲ期シ場所ヲ定メル様御申遣シ有之依テ龍動ニ於テ會 昨年上野君へ御遣シノ訓狀中ニ其政府ト協議ヲ遂ケ時 ŋ

在外我公使等へ期限ハ壹箇年ノ後場所ハ東京ニ致度旨別ニ ト始ヨリ御申入可相成等ト存候

申遣シ置候

國政府ヨリハヒニ協議ノ場所ヲ問合有之候 同國外務卿ヨリ青木公使へ以書面回答相成候事ニ有之候尤 之候獨逸政府モピニ東京於テ協議スル事ヲ承知相成乃其旨 ・我公使在留無之國ハ未夕不相分所を有之候得共瑞典那威 併シ上野公使ヨリ場所ノ儀ハ貴政府ト御約束致候旨申越有 上野公使ヨリ我政府へ其邊御申入無之由ニ候

東京ニテ致度ト中事ハ決シテ上野公使ヨリ 我政府へ御

付改正協議ノ儀ハ可成速ニ着手致度存候

貴政府於テハ何ニモ都合ニ可任候得共可成龍動ニ彼成度ト 事ニ付上野公使ヨリ龍動ニ致候テモ宜シト申上シ旨同人 使ノ御望ヨリ龍動ニ致スヘシト申出候譯ニ有之候 先ツ龍動會議ノ儀ハ止メル事ニ相成候得共全ク上野公

貴政府ト上野君ト御考違ヒシナラン

3

り此方へ申越有之候

テ御承知ナレハ何レニテモヨロシク候 不然我政府於テモ最前當方ヨリ 申入レシ訓條通 ij 貴政府於

條約モ税則 モ不殘御改正 ノ御積ナル ャ

三四六 明治十二年四月四 目 寺鳥外務卿宛上野駐英公使

ニ之ニ對スル英國政府ノ態度報告ノ件 關稅引上限度及新稅則豫告ニ關スル交渉經過竝

明治十二年四月一日英國外務卿ョリ 公使宛書翰寫 上野駐英

東京ニ於テ 談判 開始方同意ナ ル旨回答

六三五

ノ件

|| 明治十二年三月二十七日上野駐英公使ョリ英|

ノ電信案確認方中入ノ件 薬國政府東京ニ於ケル 談判同意ナル旨

||| 別治十二年四月一日英國外務卿ョリ上野駐英

右ニ對シ回答ノ件

明治十二年別信第拾三號

六月六日初

> 彼に於て飽迄も承認相成候事なれは全く是を拒絕する事も 省に於ては第一にパークス氏の意見に據りて論旨の基礎と 立ち大に其所分に相苦居候模様に被見受候 求を破棄す可き充分の辭柄無之所謂情實と條理との中間 相成兼万今當政府の内意を概言すれは情實に於てはパ きは既に我より一歩を彼に讓り候姿にて稍其穩當なる事 もせよ卽時に是に同意難相成模樣有之候去り迚我の請求 不可なるを論辯相成候間假令我請求の其當を得たるものに 事あらは通商上直に甚しき損害を見るに至る可しと反覆 本現今の形勢を誹議し萬一英政府にて我請求に應する様 せざる可からさる情質有之族然るにパークス氏は頻 分有之候は當國の習慣にして則條約改正論の ス氏の意見を全く廢物と爲す能はす亦條理上に於ては 一般普通の條理に悖らす殊に此度甲込の限定と豫告 如きも當外務 との如 りに 我請 1 VC. 刀 は は 日

るを要せすと雖も只右考案は我政府當分の考には一致不致ては最早電文の考案 暦にき法に對して拙者の意見を陳述す號)落手其文中「東京を以て條約改正の場所と相定候に付差進置候間御照合布之度候 對する返翰とし昨夜別信寫(イ第八先便別信第十號中ニ封入 對する返翰とし昨夜別信寫(和批官より三月廿六日を以て當國外務卿え差出候書翰に 戦書

かれんとする意の外ならすと被察候 いれんとする意の外ならすと被察候 かれんとする意の外ならすと被察候 かれんとする意の外ならすと被察候 かれんとする意の外ならすと被察候 かれんとする意の外ならすと被察候

無益と可相成姿にて斯の如き事情より改正の全局烏有に歸無益と可相成姿にて斯の如き事情より改正の全局烏有に歸し改亦何歟の論求に一致し能はさる歟其以所を究問致候は至當ので我の請求に一致し能はさる與其以所を究問致候は至當の依亦何歟の論柄を設け最初の論源に遡り決して是に應し能はさるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はさるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の實際はざるの旨を以て答るは必然に有之候然る時は改正の遺理あり方が、

所を究問不致候し候様にては頗る遺憾の次第と相考候に付故らに强て其以

過日外務卿の咄に此度日本政府より中込の電文中米魯の稅 明は限定中に加入せさる可しとの趣に候得共日本と條約國 作約國に於て課するより多くの稅は日本政府に問合す可 官之に答るに萬一スペインの稅則も米魯の分と同樣限定中 官之に答るに萬一スペインの稅則によつて限定相定候事卿の より除却し其他の條約國の稅則によつて限定相定候事卿の より除却し其他の條約國の稅則によつて限定相定候事卿の と相追り候處卿亦云く獨り右の情實のみならす其他種 と相追り候處卿亦云く獨り右の情質のみならず其他種 の內情あるを以ていつれ近日中書翰を以て何分の事申遣す 可しと則共書翰へ此書中ニ封

支けの権理を得られさるや英の日本を過するに布哇島の下に非らすや然るに人口三千萬餘の日本にして何故に布哇島立國一般の公法に基くものにして目に布哇島さへも僅人口立國一般の公法に基くものにして目に布哇島さへも僅人口立國一般の公法に基くものにして目に布哇島さへも僅人口立國一般の公法に基くものにして民族の権は其政府に專有する

照覽有之度候枚目ニアリ御 込も報知す可しと約束有之候,jet/s treaties. Vol. IV Page 685 て異議無之と信す乍併猶近日自ら其細目を調査して内々見 咄に布哇島の條約の如きものに候ははかならす當國政府に て親睦の所爲と爲す能はす亦政略上に於ても英日の間は將 に置くは決して日本人民の滿足し能はさる所にして之を以 大に關係あるを以て之等も照考有之度旨相咄候處同氏の

類例なき事なれは寧ろ其代りに凡万今歐洲中にて課する所 認めさるのみならす可成は其需に應度本旨は明に相見得居 る可しと慥に其高を記載して限定と爲さは却て簡便なる可 際事務の不便を來たす可し且如此箇條は條約の體裁に於て されは難決其中には支那あり白露あり西班牙ありて頗る實 しと右の如く英政府は我請求を以て都て不適當なるものと の税額に據り何割より多からさる税は日本政府にて課せさ は云々」の限定は日本と條約の他各國の稅目を一々調査せ に「米鲁を除くの外他の條約國に於て課するより多くの 亦同大輔より雇書記官レーン氏丼に鈴木金藏に對しての み申來り全く其報告書を廢紙と爲す能はさる情實有之方今 候得共何分にもパークス氏よりの報告書時に不滿足の事の 稅 昢

> 危篤を釀す樣の事無かるへき事は外務大輔等と談話中の 相成候ははかならす我請求は成就可致此儀に付何程强くパ 我政府の論旨は動かす可からさる斷然の御決意を彼に御示 過きす故に東京に於て何程パークス氏の激論有之候とも決 の處僅ニパ 御含居相 成废存候 氣にて慥に信用いたし候間パークス氏と御談判の際其邊は して我論旨を屈けす强く條理によつて御辯論何様にしても ・クス氏え御論辯相成族とも決して夫か爲に兩國交際上の **ークス氏の論旨を不充分なから相聞居候のみ** П

之事と相考候 指令爲有候趣依つて同氏は此改正決局に至り候迄は歸英無 御報知申上置候通一旦歸英被申付候得共東京にて改正 に相決候に付ては過日電信を以て出發見合候様外務卿より 委任可相成猶慥なる事は近日聞合候上報告可仕同氏は曾て 東京に於て條約改正有之族に付ては多分パークス氏え全權 の事

落手いたし候間爲御心得差進申候 爲別紙寫(ロ號)の通書翰差出候處別紙寫(ハ號)の返翰 先便第十號中に封入差進候電文案當國外務卿の承認を得候

過日差立候別紙暗號電信(『號)差進候

右報告仕候也 明治十二年四月四日

全權公使 Ŀ 野

寺島宗則殿

一白、條約改正に付獨佛は日本內地相開度旨申越相成候趣 萬一パークス氏自己の考にて其儀閣下え相迫り可申候 に候得共當國に於ては今日迄右樣の談話爲有候事無之 難計候間爲念此段申添置候

信日附ハ四月九日トアリテ本號文書ノ日附ト矛盾ス「別紙暗號電信(ニ號)」ハ暗號ノ儘ナルニ付省略但シ發

(余巻)、

義御同意致候就テハ右電報中貴政府ヨリ御考案ノ件々ハ我 候儀ハ相見合候事ニ相決シ貴政府御希望之通於東京談判候 致領承候我英政府ハ右御來書之趣ニ隨ヒ於龍動府該件談判 御示令之電報寫卜平慥二落掌且右二付閣下御來示之趣委細 去月廿六日附貴翰並ニ條約改正一件ニ付貴政府ヨリ閣下 リスポリー侯ヨリ上野公使宛書翰

意見ハ不甲述候拜具

千八百七十九年四月 H

サ 1) ス 水 ŋ

(右原文)

Lord Salisbury to Wooyeno. Foreign Office,

April, 1st

vision, and containing your observation thereon. telegraphic instructions addressed to you by Your your letter of the 26th ultimo, inclosing a copy of Government in relation to the proposed Treaty Re-I have the honor to acknowledge the receipt

Revision of the Treaty should take place at Tokio. of your Government that the negotiations for the decided to abandon the Project of a conference in thereon expressed, Her Majesty's Government have London and they are willing to accede to the desire In view of that communication and of the wishes

any In these circumstances I do not propose to offer remarks on the suggestions contained in the

英政府現今之見込ニ符合不致義申進候迄ニテ別段右ニ

對

5

harmony with the present view of Her Majesty's Government. telegram beyond observing that they are not in

I have the honour etc., etc.

(Signed) SALISBURY.

(朱書)

上野公使ヨリサリスボリー侯宛書翰

御報示被下度存候謹具 爲念一應入御覽候二付協議之趣意右文面之通ニ相違無之哉 以書翰啓上致候陳者昨日御面話致置候趣意ニ依リ別紙之通 我政府へ電報致度存候處拙者於テ貴意誤解之懸念無之樣

千八百七十九年三月二十七日

景

電

京ニ於テスル事同意致サレタリ且右電報中其他ノ件々ハ不

上 野

日充分ノ回答アルヘキ旨約東相成タリ 御電報之趣外務卿へ通知セリ同卿ニハ條約改正ノ談判ヲ東

リスボリー侯ヨリ上野公使宛書翰

意二聊相遠無之候此段回答得貴意候敬具 意ニ相遠無之哉御承知被成度趣致承知候只右文中ニ記載ア 面談候儀右之通貴政府へ御申遣可相成ニ付協議之趣旨右文 ル回答之上ノ充分ナル二字刪除相成候ハ、 去月廿七日附貴翰ヲ以電信文寫御送致相成同月廿六日及御 御面晤協議之主

千八百七十九年四月一日

サ ŋ ス ボ ŋ 1

(右原文)

Lord Salisbury to Wooyeno Foreign Office,

April 1st 1879.

your letter of the 27 ultimo, calling my attention, whether it correctly interprets the result arrived at further request, before doing so, to be informed you propose to send to stant, to a telegram, copy of which you amex, which and with reference to our interview of the 26th in-I have the honour to acknowledge the receipt of Your Government and you

Wooyeno to Lord Salisbury

March 27th 1879.

My Lord

tion in reference to our interview of yesterday, to send to my Government. the annexed Copy of a telegram which I propose to I have the honour to call Your Lordship's atten-

the result arrived at. I shall be glad to learn that it correctly interpretes sibility of my having misunderstood Your Lordship, But before doing so, in order to prevent the pos-

I have the honour etc., etc.

(Signed) WOOYENO KAGENORI

Copy of telegram

sion of Minister. telegram. promised shortly full replies on other points of the I have Communicated Treaty He is willing that negotiations for Revishould take Your telegram to Foreign place at Tokio.

代条巻)(朱巻)

rived gram, is omitted. word "full" before the word "replies" in your tele-In reply, I have to state that the conclusion arat our interview are properly stated, if the

I have the honour &c. &c.

(Signed) SALISBURY.

三四七 明治十二年四月九日 上野駐英公使宛寺島外務卿ョリ

倫敦會議開催發議ノ顚末詳報方訓令ノ件

上野公使別信案 四月九日附

哉殊に英政府は重修會議を龍動に於て相屈度趣意にて歐洲 場所歐洲に取極候方便利云々貴君一己の見込に被致談話候 候云々電報去月廿九日別紙寫の通相達致承知候扨は重修談 内訓狀にて相達置候に付ては其旨英外務卿え談判を重ねら たるか情實景況更に相分兼不都合の至に候依て右場所の儀 締盟各國の平慮等尋合せ候事に至りたるは何等の因に起り れたるは無論に可有之候然るに如何の次第柄にて條約重修 判は本邦に於て相開度任國政府え申入候標去年二月九日附 以別信申進候條約重修場所東京に相極候儀に英政府同意致

の顚末不洩様委細に至急御中越可有之候右甲進候也 に付種々相變候譯柄並談判往復の順序月日等に至る迄始終

別紙寫三四三參看

三四八 明治十二年四月九 日 寺島外務卿宛(電信)上野駐英公使ョリ

英國政府ノ東京會商ニ對スル態度ニ關シ報告ノ件

10th April, 1879

Terashima

Gaimusho, Tokio.

points of your telegram of March beyond abscond that suggestions are not in harmony with present yield at all essential points if you refuses firm with to believe that the British Government may finally view of British Government but I have good reason does not propose to offer negotiation for revision will take place at Tokio he English Minister of Foreign Affairs writes that as any remark on other

London, 9th April '79

本月十五日別紙寫の(電信)落手致候に付一昨十六日爲(# mg/4#)

得頗る緊哭に候間以後は應接每に御指送相成度候

條約改正一件閣下英公使パークスト本年二月十七日廿二

日御對話書被相廻熟讀候處彼我意見に異同瞭察被致爲心

聞合拙者外務省え出頭候所外務卿不在に付次官ポスンホ

ト氏に出會條約重修は我東京に於て會議候事先版御協

議相調候間其次第我政府に申立候處委任誰某に被命何頃

信洛手候間參上候段甲入候處委曲承知長官に申聞不日御 より實地改正に被懸取候や御打合致候樣我外務卿より電

1 ŀ

條約重修會議當國は已に東京と協議相調候處其他ノ同盟 候哉は勿論不得心候得共我政府の主意先前より甲述候通 自の見込に任せ自國叉は東京と申樣別々に會議被相開御 國モ一同に集會を我政府より御請求相成る御含か义は各 に指出候用意中なりと返答有之候乍序此段も申述置候 談話有之候故布哇の條約寫を取調候尤昨今拔萃刊行長官 第に無之哉と夫々辯解候處ポンスホート氏曰先日右の御 理なき條約取結居候はは我人民不滿足を拘き候事尤の次 國三千五百萬の人口ありて纔に拾萬口ある布哇よりも權 を請求の意に無之次第は疾に御承知被下候事なるへし我 り貴國と布哇國との條約より超過せる權理を回復せん事 内不用のものは取除き有用のものを増加致度即改稅約定 年の改稅約定は其部内に屬し候故本文の改正に就て其部 八百五十八年の條約改正を請求致候事にて千八百六十六 話の間に暗に含居候依て拙者の辯解に我政府は素より干 の請求に對し議員中に異論を引起候程の文意と甲意味内 し可甲旨内話有之候之れ即パークス氏の報告書は我政府 ん事を欲する譯に候且パークス氏より如何樣の報告指出 如きは現今我國の時勢に對し不適當なるを以て除去せ

氏申聞候間確答得候はは卽電信を以可申進候右談判の序 答可甲多分パークスに可相成と愚考致候由ポンスホ

に同氏曰兩三日前パークスより書信到來條約改正一件貴

三四九 明治土焉年十五日 上野駐英公使宛(電信)寺鳥外務卿ヨリ

令ノ件 東京會商開始ノ期日ニ關シ英國政府ニ問合方訓

Wooyeno.

Tokio. pared to Inquire how soon will British Government be preopen negotiation for treaty revision in

TERASHIMA

Tokio 15th April '79

三五〇 明治二個月十八日 寺島外務卿宛上野駐英公使ョ

東京會商開始ノ期日英國側委員等ニ關スル交渉 經過報告ノ件

の趣拜承條約重修場所已に東京に相決候は一々不及御答候 以別信拜呈本年二月廿四日第三號別信過る十二日接手來示 十二年別信第十四號 六月六日到

寺島外務卿時代

候はば派遺公使 ヲ指ス

の報告第一に各議員の意想に徹

之様也萬一も我議員より今般改正に係る書類請求被致候 得且右報告は貴政府の御請求に甚だ反對せる意見認め有 則は改正談判中において議するに不及との御趣意に相見 充分御回復被成度との事に付千八百六十六年條約中の稅 外務卿と應接候報告を得候處貴國の御見込なれば稅權を

節は當省にて右書類取纏め不持出は不相成候處さ樣相成

見込か其邊も豫め承知致置度候

我新聞紙より譯出候ものにも候哉四五日已前當所一二の に有んかと貿易者の疑念抱き居候場合に候間前件の如き 回復談判に際し動もすれは我政府の内意ブルテクショ 暴想候輩も有之已に兩三名より被聞合次第に候現今稅權 勅有之云々刊行候處我國にては外國輸出品拒絕する意と 新聞紙に我內閣諮君御陪食の節諸般侈奢不相成樣との內 件は成丈新聞紙等に掲載不相成様御注意被下度候 \sim

明治十二年四月十八 H

全權公使 上 野

寺嶋外務卿殿

三五 明治士」語月十八日 上野駐英公使宛寺島外務卿ヨリ

會商地及稅目協定問題ニ關シ訓令ノ件

在英上野公使へ別信案第九號 四月十八日附

別信第九號落手條約改正ノ公會ヲ龍動ニ於テ可開運ヒニ至 候順序幷ニ二月十三日附電信ヲ以及指令候旨趣鮫島公使ョ

依り龍動ニテ開談スルト我邦ニ於テスルトノヲ可決見込ニテハ我政府ニ於テハ右我電信ノ旨趣英政府ニテ諾否ノ答ニ 冀望ノ趣ニ致承知候故我政府ニ於テ改正ヲ求ムルトノ要點 被申越候へ共是迄モ既ニ申進候如ク龍動ニ於テ會議ヲ可 後ノ事ニテ從令其事ニ成否アルモ今日開談ニ先チ各政府 正ノ期ハ到底不可見トノ御見込モ有之候得共右ハ畢竟開談 握ノ主義ヲ主張候テハ各國ニ於テモ反對ノ主義ヲ主張シ改 上二於テ明瞭ニ有之候將又右別信中ニ我政府ニ於テ稅權專 有之候處鮫島公使建言ノ爲メニ抑留被致候テハ不都合ニ存 政府モ右ニ與カルベキ方ニ相決シ發電ニ及候儀ニ有之候就 ヲ右會議ニ與カル各國政府ニ於テ豫メ是認スル事ナレバ リ建言ノ趣モ有之候ニ付英政府へ通知方抑留被致候事情共 可有之候 難致候間執レニモ最前ヨリ決定ノ如ク本邦ニ於テ各國委員 意嚮ヲ豫定シ條約中公認スル所ノ改正ノ權利ヲ放棄侫儀 不利ノ譯會得不能內ハ今我本意ニ無之段ハ從前ョリノ指令 候殊ニ鮫島公使建言ノ通商條約ノ儀ハ互相ノ約我方ニテ利 トノ儀ハ元來我政府ノ冀望ニ無之候得共英政府ニ於テ之ヲ ト開談ニ及ヒ改正ノ目途ヲ違シ度積ニ有之候間此意御承知

英政府着手ノ順序如何可有之哉別紙寫ノ通簽電候右ハ不一前條ニ申述候如ク東京ニ於テ條約重修ノ談判相開候ニ付 日御回電有之事ト存候

差進候也 尚以條約改正ノ義ニ付英公使ト對話筆記別冊為御心得 編 II層形

廿三日別紙寫(ロ印)の通り電信を以御報知に及置候

一三月五日出別信第四號本月十九日接手來示の件々領承御

指令の通り青木公使へも通信可致候

る十八日第十四號別信を以申進置候處一咋廿二 日 別 紙 寫 に英政府より指出候委員等當外務省問合中に有之候云々過 以別信拜啓陳は條約重修會議東京に於て實地相開候時日竝

(イ印)の書翰當外務長官サルスヘレーより落手致候間翌

「別紙」往電ハ三四九ヲ指スモノト認メラル 本號文書ニ謂フ「二月十三日電信」ナルモノ見當ラス又

三五二 明治士军四旦士音 寺島外務卿宛上野駐英公使ョリ

東京會商ニ關シ英國政府ト打合セノ件

附屬書一 明治十二年四月二十一日英國外務卿ョリ 駐英公使宛書翰寫

改正案英國公使ニ提示アラハ 本國政府 旨回答ノ件 ニ於テ他ノ條約諸國ト 商議ヲ遂クヘキ

_ 明治十二年三月二十六日在英日本公使館御雇 書記ョリ英國外務大輔宛書翰寫

條約改正ニ關スル意見開陳ノ件

六月七日到

別信第十六號

明治十二年四月廿五

野

寺島外務卿殿

全權公使 上

追啓條約重修一件に付過日當館御雇書記レ り直に當國外務卿え指出相成且同大輔の咄に之れ大 國外務大輔を指出候書翰寫別紙(ハ印)指進申候元 付此書翰は眞に私事と可認ものなれとも外務大輔よ る交際官の特典得る能はさるは先前申進置候通りに 來同氏は英國人なるを以當國政府に對しては公然た に内閣の議を助るに足る可しと能き受込に有之候也 註 別紙口印 (四月二十三日上野公使來電寫)ハ暗號ノ儘 1 ン氏より當

ルニ付省略

致同意候旨既ニ貴國駐卻我英國公使へ及通達置候就テハサ 拜啓陳者我英國政府ハ條約改正ノ談判直ニ東京ニ於テ可相 候此段回答申進度如斯敬具 **丈ノ事ニテモ其考案ヲ承リ申スヘク然ル上同氏ヨリ我政府** 成候貴政府ョリ改正ヲ要セラル 此上ノ談判ハ東京ニ於テ可致事ニ我政府貴政府ノ御所望 附貴翰致落手候倫敦府ニテ右會議開設ノ儀ハ相見合セ本件 開意得ニ候哉トノ事貴政府ノ旨ニ依リ御問合ノ本月十六日 へ右通知越候ハハ他ノ條約諸國共商議ヲ遂ケ速ニ可及熟考 、、ヱツチ、パークス氏ニ於テ何時モ本件ノ談判御申出相 リスブリー侯ヨリ上野公使へノ書翰寫 、條約ヲ諸條款若クハ稅則 =

千八百七十九年四月廿一日

(右原文)

リスブリー(手記

Сору

Lord Salisbury to Wooyeno April, 21, 1879.

(Signed) SALISBURY.

「〈ハ印)」(集巻) 附屬書一

レーン氏ョリパオンスフオー ŀ 氏へ贈リタ ル

ントス 至テハ自ラ無用ニ属スヘキノ議論ヲ釀生スルニモ至ルヘキ ント欲スル趣旨ノ唯概要ノミヲ短翰ヲ以テ陳述サレタル所 テモ日本政府ニテ其輸入税ニ關スル考案中ニ現今更正ヲ加 アリシ處退テ深慮スルニ此事甚夕障碍アリ因テ我公使ニ於 ニ付テハ日本政府ノ意見ヲ書面ニ相認ムへも旨御演述之レ 本月二十一日余鈴木金藏同伴ニテ貴下ニ面接ノ際改約一件 ·リ然トモ余尚自分一已ノ貴ヲ以テ聊カ爰ニ鄙見ヲ陳述 開陳スル所ヲ反復スル迄ナルヘク且却テ之カ爲ニ後日 ニシテ今詳細之ヲ書面ニスルモ多クハ巳ニ往復ノ公翰中 Ł ==

外交上ノ爭議ハ措テ之ヲ問ハス唯本論ノ主趣ニ就テ論 五同條約ヲ締結スルニ 共區域ハ甚ク狹隘ニシテ凡ソ兩獨立國ノ間ニ稅則 完全ナル自由貿易即チ ハ蓋シ左ノ三主義ニ出サルヘシ 兩國ノ間ニ五ニ輸入稅ヲ課 = 關 ス ス v

> should take place at Tokio. ment have acceded to the wish of Your Government has been abandoned, and that Her Majesty's Governinformed that the proposed conference in state that Her Majesty's Minister in Japan has been the Revision of the Treaty, I have the honour to prepared to open negotiations at once at Tokio for that that the further discussion of this question ment, as to whether Her Majesty's Government are me on the 16th instant, by desire of Your Govern-In reply to the inquiry which you addressed London

cation with other Treaty Powers. immediate and careful consideration, in communihim to Her Maiesty's Government, will receive their make; and those proposals, when communicated by ing negotiations on this subject, generally or of the Tariff in particular which Government, who have taken the initiative in openproposals either in respect to changes of the Treaty Sir H. Parkes is therefore prepared to receive any may desire Your

I have the honour etc., etc.

セサル事

- 第二 兩國相五ニ他ノ一方ノ産物ニ課スヘキ税則ヲ制定 シ時期ヲ限リ之ヲ施行スル事
- 第三 兩國五二時々其必要ト思考スル所二從テ各自ノ 入税ヲ改正スル事ヲ自由ナラシムル事

擅ニ税則ヲ變換シ且重稅或ハ禁止稅ヲ賦課スル 今一般 外ナヲス是ヲ以テ日本ハ此異論ヲ解除センカ爲メ條約ニ ス可ラサレハ商賣ノ利益ニ大害ヲ生スルノ怖アリト云フニ 國ノ之ニ對シテ異論ヲ起セルハ若シ如是クセハ日本ニ於テ テ左件ヲ確定セン事ヲ發言シタリ トモ今般日本ノ要求スル所ハ卽チ其第三條ニアリ而シテ英 ハ無益タリ蓋シ日本ハ右二條ノ内何レニテモ同意スヘシ然 ニ締盟各國ニ關シ右三主義ノ第一第二條ヲ考察 事アルモ期 公ル 因

- 隨意ニ其稅則ヲ變換スル事無ルヘシ 日本ハ豫メ相當ナル報告ヲナス事ナクシ テ ハ 決 テ
- 第二 貿易ヲ妨害スル程ノ重税ハ必ス課スル 各國ノ内魯國ト米國ハ其稅額實ニ非常ナレ 輸入品ニ課スル所ノ稅額ヨリ超過セサルヘシ殊ニ 税ハ目今改約ノ協議中ナル締盟諸國ニ 於テ各種ノ 事ナク其課 ハ此兩

寺島外務卿時代 三五三

テ敢 へ キ事ヲ發言シル 税額ノ極度ョ 取ラ ・サル タリ リハ \sim シ ኑ 適日 當本 ニハ シ斯 テク

報償ナキニ特別ノ ŀ ス ヘシ ŀ 1 委曲 七旣 云フソノ損害ヲ除 ニ其後議スル所ヲ ニ至テハ尚改正ヲ申出 利益ヲ附與ス クノ ルノ趣意ナリ 方法ヲ表示シ且更 テスレ ス事ア ハ英國 ル ラ 丰 貿易上 = Ŧ. 同 ナ =

叉余 夫ノ實驗ニ依リ必要ト思惟スル所ノ改正ヲ加フヘシト ヘキ者ト 終約改正ノ事 ラ主張 = ミナラ 兩國ノ内孰レニテ キ丈ケノ變換ニ 、現行條約 ボノ聞ク所 依り全ク行ハル可ラサル所ノモノタリ ラ想像セリ然ト 、ス亦有 ナサ、ルヲ得ス若シ此改正ヲ締盟兩國ニテ同 シ ラヲ得 テル 三依レ こ約スル所アルー項ニ於テ ハ都テ變換ノ何タルヲ問ハス悉ク之ヲ包括 マスンハ到底何時迄 ヘキ 限ル ・モ假令果 Ŧ ハ ナリ是ノ 日本政府ハ其要求スル所 モノト 法律家ノ萬 ソノ改正ヲ拒絕スルヲ得テ我論理 如 テ之レアル セハ此改正權ハ恰モ無効 キハ質 衂 公法 モ原狀ノ儘ニ之ヲ永續 三公道通義 ノミ議論ノ モ ニ反悖スト 其議 ノ其意ヲ承諾 論ハ 1 權理 三反 左 生 爲 三屬 意 ア ス = セ ス ノ へ就 ススル 班 ルル ノ

> 各款ハ岩 今日ニ至 之ニ調印シ皇帝亦强迫ニ因テ餘儀ナク之ヲ承認アリシモ 含 立案シタル = テ是ナリト 於テ レセサ 睦ヲ約スル シテ全ク偏倚不正ノ條約タル事顯 .タルヤ當時日本ハ殆ト全ク其旨趣ノ如何ヲ通知セスシ 主張スルト ハ或ハ然ラサルヲ得サル ヲ必要ト ナキ ハ尙愈其然ル ルヲ得サルナリ而シテ今日本ノ |テハ全ク實際ニ適應セサル者タルハ最初此條約ヲ シ締盟國ノ一方ニテ其自國ノ利害ニ -セハ初メ 米國ニ於テモヒニ承認スル所 シ モ 丰 等ノ セハ改正 得へキ筈タリ 雙方ノ之ヲ承諾スル ハ之ヲ廢止シ或ハ改正 如 ヘキヲ知 此條約ヲ締結シタル時ノ事 + 權ノ條款 謂 然ルカ故 ノ條約ニテアリタル 定式ノ箇條 ルヘシ抑千八百五十八年ノ ハ 何 == ノ為ナ 三凡 然タリ蓋シ其當時ニ在 **味ノミヲ保存** 、論スル所 スル グテハ何 パソ條約改一 ナリ アヲ得 馤 ۲ ノ 寺情ヲ察ス ノ通義 2へキ意ヲ包 シ要用 ヘキモ旣 セ Œ シ ヺ ン か永 ナリ 他 = ハ 條 於 ノ テ N =

輸入セン事ヲ主張シ日本産物ヲ其自國へ輸入スルハ禁止稅 税費ヲ償フニ過キサル現今ノ平 ミ變換シ得へキ者ト (三如是ノ條約ヲ以テ永續ノ者トシ或ハ雙方 セハ各國二於 均大抵三步 テ其自國 ノ低稅ヲ以 ノ 産物 承諾 の八僅 == 因 テ テ =

シ改正ヲナサ

ント欲スル

ニ當リ他國

足レリ ハ余カ斷 是認スヘキ ル ヘル日 十六年ノ約書ニ -ナスヘキ デ考ルニ 何ノ結局ニ至ルヘキカ余ハ常ニ日本土民ノ明言スル所 (ニ信服スヘカラサル ・云フ可 依リテ 云フアリ 變換ヲ爲ント欲スルノ意アル事ナク苟モ各文明國ニ テ永 假 三執拗シ談判途ニ決議ニ至ラサルアラシメハ 然ト雖トモ現今 本ノ論説ニ 令現今ノ儘ニ條約ヲ保存 シ ハ行ヒ得 ハ之ヲ半諾 シ是故ニ夫ノ千八百五十八年 ク之ヲ拒絶スル / 兩國ハ日 彼輩必ス英國ヲ敵視シ之ヲ怨恨スル ・ノ說アル テ兹ニ確言スル所 ハ勿論ニシテ日本ニ於テハ決テ不正不理 ・是ヲ以 ŋ 因 對スル テ許與セラレ ハキ所 ニ於テハ必ス之ヲ聽容スル ナ テ實際事ノ決 シ 本國要求ノ公正ナル 或ハ英國ニテ異議ナク ノ條約ヲ以テ公平ナル新條約 ノミナラス反 ノ抗論ハ甚タ勢力ナキモ ニシテ實ニ正理ニ反悖スルノ 七得 v ナリ然レ ヘキナリ ハ今日 タル權理ニ基 バスル ス ル テ憤激ヲ起サ ロ本ノ不服 ト否ト ヲ ŀ 是レ則チ現今 ノ條約或ハ干八 事 - モ若シ ヲ承諾 ヘキモ 沟獨 ン アク所 ハラ顧 ミ ニ至ル ・英國ニシテ ノ旨 ハ承諾 ジ其 ŋ シ ノ ナ 果シ 意夕 トセラ ムル ŋ = 英國 百六 ス ス 他 \sim シ 1 云 シ テ n = テ == テ

> キ 4 ヲ = シ 察スルニ米魯兩國ノ聲援ト顧問法律家輩局外ノ勸說トニ因 層不利 問 ル 至 一大災害ヲ生シ來リ然ル後ニ至テ却テ現今得 成サルニ於テハ竟ニハ斷然條約中貿易ノ箇條ヲ拒絕スル 大ニ奮起スル所アレ ルヘシ其時ニ至テハ勢力ヲ以テ之レニ迫 ハス其自國 賣ヲ自任スル ナル 貿易條約ヲ議定スルニ至ル ノ貿易ヲ自 者アル ハ百方懇和ノ談判ヲ盡スノ後チ事若 ヘキ 國ノ條規ニ從ヒ他國 カ其結果タル ナラン ンカ 盐 三行 ^ シ 挽 何 者 回 > ν 「シ難 ノ國 V 3 ŋ シ

辨明スル カ テ サ H サ 余 = 、公使ニ於テモ其責ハ任スル所ニ非 ムルヲ得セシム ル約 本全國 ル カ日本政府ニ奉仕スルハ固ヨリ 本ノ願望ニ反シ定額稅目 カ故ニ余ノ論説ハ敢テ公然タル ス今之ニ反 モ其結果ハ英國ノ製造者及日 キ 定 ナ ふ ノ公議ニ附セ ニ在ルノミ蓋シ改正條約 ŋ 到底雙万ニ利益ナカルヘキ 凡ソ不平ノ シテ制限ヲ設 ル 事トナサ ラルヘク而 利益 ケ日 ノ施行ヲ保續 ハ ハ之ニ不平ヲ云フ者 必 木人民ノ共 (ノ諸條款 、當國ノ認可ヲ蒙 ス 本ヲシテ其自己ノ稅 シ テ兩國 7 ス余ハ唯日 勢力ヲ有スル者 求ム可 ヲ 以 ス ij 25 テ假令英國ニ於 ラ = ル 間ニ公平ナ 必ス其正否ヲ 決テ喜フ所 ノ ス 本ノ趣意ヲ 意ヲ達ス ハ 更ニ A 上非ス ル = ラ

駿タル日本國ノ同盟ト成リ將タ怨敵ト成ルモ唯此一事 スルノ如何ニ在ルノミ ラ決

前文ノ事情能ク了解アラハ英國政府必スヤ可然ク明決セ ハス所以ナリ敬白 、所アルヘキヲ固信ス是レ余カ此長文ヲ作リ以テ貴下ヲ ラ

千八百七十九年三月二十六日

スタールト、 レーン(手記)

ジュリヤン、パオンスフオート貴下

(右原文)

LANE TO SIR J. PAUNCEFOTE

(Copy) Dear Sir Julian Pauncefote, March 26th., 1879.

seems on Consideration that this course is open to Japanese Government on the Revision question, it should be prepared setting out the views of the instant with Suzuki Kinso, that a 'note verbale' when I had the pleasure of seeing you on the 21st objections. in a short despatch the salient points of the modifications which his Government is now ready In reference to the suggestion which was made The Minister therefore merely explained

> ture on my own responsibility to add some further officially at least, unnecessary. which it is hoped the course of events will render, correspondence and would also introduce arguments go over much ground already covered in the official make in its proposal as to Japanese import duties. remarks. An exhaustive note on the subject would have to I will however ven-

dependent nations. treaty arrangements I apprehende, three really lies in a very narrow compass. There are, Setting aside all diplomatic fencing, the question as legitimate bases for reciprocal to tariffs between two in-

- charged on either side. Perfect free trade—no import duties to be
- for some definite period. able on the products of the other—to be in force Both nations to fix a tariff of duties charge-
- deem desirable. duties from time to time as they may respectively Both nations to be free to change their import

Now it is useless, as regards the Treaty Powers

seriously injure the interests of traders. ity of varying tariffs in Japan, as well as from high or prohibitory duties which might be revied, would uncertainty which would arise from the possibilwhich Great Britain advanced to third, which Japan proposed. Japan might agree to either. generally, to consider the first two of these bases. The only objections There remains it were that the the

stipulate by treaty: To meet these objections Japan now proposed to

at any time be made without adequate notice. That no changes in the Japanese Tariff shall

revision is being negociated—further excluding from imports by some of the very Powers with whom the shall never exceed those charged on the various not to exceed a moderate and sanctioned maximum.) tariffs being this category Russia and the United States-That the duties shall not be prohibitory and abnormally high. (Japan thus offers -their

indicate the means of avoiding the injuries which gested in these concessions, but, as they stand, they No doubt modifications in details might be sug-

> been inflicted on British trade, and they likewise it was stated, might, in the circumstances, have cal equivalent. accord exceptional advantages without any recipro-

as entirely invalid on the following grounds: has naturally been considered, and is looked upon be justly questioned on one ground, viz, present ed, imagines that the right they claimed can only treaty arrangements. Such a possible contention The Japanese Government, as far as I am inform-

kind. able"contrary to international law fications as experience may have shown to be desir-It has also been declared by eminent jurists to be tually render such a right illusory. Either Power both contracting Powers may agree to, would virmanifestly contrary to justice and to common sense. treaty in its original shape. to its logical conclusion, might then perpetuate the might decline changes and, carrying the argument A revision of a treaty-The limitation of revision to changes which -must be capable of including changes of any -"To introduce such modi-Such a conclusion is

If acquiescence in the desirability of any changes were essential, the stipulation as to right of revision would also be meaningless, in as much as changes in a Treaty could naturally be made at any time by mutual consent, without any such stipulation.

Subject then to the maintenance of what may be called the standard articles, such as those of continual amity etc., revision must be implied to sanction the alteration or abrogation of all the remaining or varying clauses, if insisted on by either contracting party, as desirable in its interest.

But of the position assumed by Japan is defensible as a general proposition, it seemes to be doubly so when the particular points of the present case are remembered. The treaty of 1858 was avowedly signed by the Japanese in almost total ignorance of its bearings. It was recognized by the Mikado under pressure and it is manifestly onesided and unjust. It was perhaps justifiable when made, but is wholly indefensible as applied to present times. This has been acknowledged by the Americans who originally drafted it. To presume such a

document to be perpetual or subject only to change by mutual consent would justify, inter alia, the contingency that all the Powers should for ever exclude all the products of Japan by a prohibitory tariff, insisting on their own products being received at the present average rate of about 3 per cent., which little more than covered the cost of collection. This could be done under the present treaty arrangements, which is absurd.

Any arguments therefore against the Japanese pretensions based on rights assumed to have been conceded by the treaty of 1858 or the convention of 1866 would be doubly weak, and irritating rather than convincing. Existing arrangements may however fairly serve as a 'point de depart' for a new and fair treaty, and on this tread I may safely say that the Japanese wish for no change which can be shown to be unjust or unreasonable, and that they are ready to listen to any proposition which would be entertained by any civilized country.

But, on the other hand, supposing a stand is made on the old Treaty and no settlement is arrived at,

sent state of treaty arrangements might for a time shape or another, denounce the commercial clauses well as by the independent advice of all the jurists by the support of the United States and Russia, probable that, backed up or the national feeling is be allowed to go on under protest, but it is more to lie with this country. It is possible that the prenot object-Of the other countries some have partially done so have conceded the justice of the Japanese demands. of all its troubles. The United States and Russia all efforts for a friendly settlement, would in some who have been consulted, Japan, after exhausting as the active enemy of the country and the cause classes. It is that England would then be regarded ditions, no another country? Would not the probable cion be resorted to? in the Treaties. openly expressed responsibility of forcing its trade, on its own conwhat will be the result. I form my opinion on the -some have stated that they would if England did -so that practically the decision is felt In such circumstances could coerstatements of Japanese of all Would any nation assume the

result be, that after irretrievable mischief had been caused, commercial treaties would be negociated on less favorable terms than would now be accepted?

As my appointment under the Tananese Covern-

not fair to both parties will eventually be advanassertain its justice, and I feel that any settlement sponsible for them. My sole object is to explain the have no official weight-nor is the ment is not recognized in this country my remarks enforcing a fixed tariff on Japan contrary to her tageous to neither. If England were to succeed in Treaty will be tested throughout that country to real views of Japan. inveterate enemy of a very rising country, either a firm ally or an solution of a question which will assuredly rary advantages should not be sought for in the reasonable complain. In any case doubtful tempolimitations, settles her own tariff, no one would facturers here nor the people there would be satiswishes, the result would be that neither the manu-As my appointment under the Japanese Govern-If, on the other hand, Japan under certain Every clause in a revised Minister re-

寺岛外務卿時代 三五三 三五四

If the facts are rightly understood I have little fear as to the decision of our Government. This belief must be my excuse for troubling you at such length.

I am, etc., etc

(Signed) K. STUART LANE

三五三 明治士医月三十日 上野駐英公使宛(電信)

歸朝方命令ノ件

Vooyeno,

Japanese Legation,

London.

In consequence of Treaty Revision at Tokio you are ordered to return as soon as possible leaving the secretary in charge.

TERASHIMA

Tokio 30th. April, '79

三五四 明治十二年五月五日 英國公 使對話書

東京會商ニ關シ會談ノ件

三五五 明治十二年五月六日 英國公使對話書

交渉ノ件談判ノ形式(國別カ合同カ)及改正稅率ニ關シ

明治十二年五月六日英國公使來省外務卿對話

一、條約改正一件

一通り挨拶畢テ

昨日行遠ヒニ書面差上タリ夫故ニ御出相成候義ニ候哉

政府ヨリ申越有之候就テハ稅則ノ義モ一同ト御協議可條約改正ノ儀ハ各國一同ト御協議可相成樣承及候旨我不然明日ニモサトウ氏大和へ向出立候ニ付參上致候

條約改正ノ儀ハ米國トハ巳ニ相濟居伊太利トハ不遠成ルベシ何レノ國ヲ論セス申出相成次第其國ト議定スル積ニ有之シ何レノ國ヲ論セスル世ニ超過セサル様可致筈ニ付其内各國一扇、四五ケ國或ハ四五ケ國ノ政府ヨリ一時ニ在留公使等へ兩三ケ國或ハ四五ケ國ノ政府ヨリ一時ニ在留公使等へ兩三ケ國或ハ四五ケ國ノ政府ヨリ一時ニ在留公使等へ不完成ルベションので、一個の一般。

寺島外務卿時代 三五五

一此頃本國政府ヨリ電信ヲ以條約改正ノ義ニ付貴政府十二年五月五日外務卿英公使ト對話ノ內條約改正ノ件

義ト存候電報故委敷事ハ不相分候何レ書面ニテ詳細ニ申來候ョリ御談判有之候半ハ可相受旨拙者へ命令有之候尤

被得候上ノ事ニ可有之候間其節ニ至リ篤ト可及御相談候下ノ御見込ヲ被附候義ハ何レ貴政府ヨリ委細ノ命令書ヲ一當方ヨリ及御話候義ハ宜シ併シ當万ヨリ差出候考案へ貴

一露公使ノ渡來ハ如何ニ候ヤ

ーイツ頃ニ相成候哉未夕不承候

一伊國公使ハ當時在留ノ事故御談議可相決ト存候一スツルウェ氏ノ歸來迄ハ聢トセシ御談判ハ有間敷候

一然リ伊政府ヨリ公使へ其命令有之候由

一閣下ヨリ御談ノ義ハ無之候哉

一一通り差越族分有之即今取調中ニ族

一一兩月中ニ御談判可相纒御見込ニ族ヤ

一是非其邊二可致積

畢

税則ノ事ハ各國ノ高税ヨリ上ニ超過セサル哉否其邊丈御相スル義ニモ無之候ニ付其義ニ不及存候ハ遠ク海ヲ隔テ居リ且今般改正ノ儀ハ一同ト共ニ協議ヲ要リ其國々ト一同ニ取極メネバナラヌ事モ可有之然ルニ我國譬ヘハ其三四ケ國ノ國境我國ト接シ居リ候時ハ其事柄ニョ

ガ故ニ御相談セザルベカラズ然リ最初各國ノ内高稅ノ分ヨリ上ニ超過セシメ敷多ノ品種ヲ一々御相談可相成哉

ズ

ŀ

П

1.

毎品ニ付最高税ヲ御相談相成候哉

税目ヲ基トシテ御相談申譯也然リト雖トモ其最高稅トハ或ル高稅ノ國ヲ除キ他ノ各國ノ

其節ハ税目ノ下書ヲ以御商議相成候哉

テ御論ヲ受ケサル積リニ有之候過セハ其事ヲ御論シアルベシ若シ其高稅ノ下ニアレバ決シ然リ其節當万ヨリ差出候分ノ內某ノ廉某ノ高稅ヨリ上ニ超

相成候哉

然リ其節御見合ト可相成他ノ稅目ヲモ御覽ニ入ルベシ

、 然ラバ各國々ニ付税則案ヲ御示シ可相成哉

:

各國皆同様ノ税則ニ可相成哉

然

シクト有之候 併シ昨年御示シ相成候訓狀中レシブロシチーニテモ宜

と戻っ中候譯也タリーフノ事ハ何分レシブロシチーハ六ケ敷有テ申候譯也タリーフノ事ニ付申候譯ニハ無之外諸般ノ事ニ就

で無税ニテ輸入通關相成候事ニハ不相成候哉 ぎへハ某々國於テ無税ニテ輸入セシムル時ハ貴國於テ

夫ハ各其國柄ニョル事也

大リ 大関國ノ産物ノ内一二品ニ付税ヲ取立ルノミ

シ 貴國於テハ稅ヲ御取立不相成トモ御不都合ナキが故ナルベ

ベシ 然リ異存無之候併シ他ノ國々ノ高稅ヨリ上ニ超過セシ 申カラハ貴國ハ格別其他ノ國々ニテハ左程差支モナ 貴國於テ我物産ョリ税ヲ取立ラレ候ニ モ貴國物産ニー々課税候テモ御異存ナカル 付 テ > べ 我國 シ カ メ 於 ル ズ テ

候方可然存候 を國一樣ノ稅則ニ可相成候へハ各國ト共ニ御協議相成

定ムルモ同様也最初締結に國ニテストの東ニ相成同時共ニ協議シテ最初締結セシ國ノ分モ引下ケル専ニ相成同時共ニ協議シテレバ次ニ協議セズトモ最初締結候國ニテ某ノ箇條ニ心附カザー時ニ協議セズトモ最初締結候國ニテ某ノ箇條ニ心附カザ

五六ケ國ノ分ヲ別々ニ御相談相成候ハ煩ハシカルベシ

シーパンドモー時數國ト共ニ協議スレバ却テ早ク決定セザルベ

何故ニ然ルヤ

ノ分ヲ見合セニスレバ格別異ナル事モナカルベシ部聯邦ノ條約ニヨリ墺國ニテ締結セシ通リ最初結約セシ國鬼角多人數一緒ニ商議スレバ議論多キモノ也且先年獨逸北

税則ハ出州セシヤ

右再条ハ未夕拙者へ廻附無之候過般大藏卿ニテ取調候分有之候得共尚更ニ調査候趣ニ有之

未夕伊公使へ改正案御示シ不相成候哉

申居候右今日致承知候拙者ヨリモ右解任ニ際シ貴政府へ謝詞申入相成度旨海軍卿出者ヨリモ右解任ニ際シ貴政府へ謝詞申入相成度旨海軍卿

所爲ニ付以來斯様ノ事無之様其筋へ申入置ケリ禁園於テ婦人ノ上着ニ挿シアリシ花ヲ取上シ事ハ失敬ナル

右ニテ畢ル

寺島外務卿時代

三五六

三五七

三五六 明治士至五月十三 寺島外務卿宛

歸朝出發期日報告ノ件

右甲進候也 右甲進候也 お中進候也 本月十日接手拜見條約重脩會議場所の事に付ぶ 別信第四號本月十日接手拜見條約重脩會議場所の事に付ぶ 別信第四號本月十日接手拜見條約重脩會議場所の事に付ぶ 十二年別信第十八號

十二年五月廿二日

全權公使 上 野 景 範

寺島外務卿殿

三五七 明治士 矢月十三日 富田代理公使宛

東京ニ於ケル談判ハ各國別ニ開キ度方針ナル旨

訓令ノ件

六月十三日附

在英富田代理公使へ別信案第十三號

六五七

候積ニ有之候間左様御承知可有之候に積ニ有之候間左様御承知可有之候の一大の東ニ協議相調候ニ付他國ノ處ハ如何哉ノ旨問合有之候を一接到候第十四號別信中條約改正會議英國ハ東京ニ於テ度ニ接到候第十四號別信中條約改正會議英國ハ東京ニ於テ度ニ接到候第十四號別信中條約改正會議英國ハ東京ニ於テ度ニ接到候第十四號ヨリ十七號ニ至ル迄本月六日七日兩上野公使別信第十四號ヨリ十七號ニ至ル迄本月六日七日兩上野公使別信第十四號ヨリ十七號ニ至ル迄本月六日七日兩

シク聞取可申候右ノ外別信ヲ以テ被申越候趣ハ不遠上野公使歸朝ニ付尙親

(中略)

註 上野公使ヨリノ別信第十五、十七號見當ラス

三五八 明治士年月十五日 寺島外務卿如

府ハ條約改正談判ニハ應セサル旨申入ノ件各國合同談判ノ爲ノ基礎案提出アル迄ハ英國政

ニ付何等ノ御談判ニモ難相及旨閣下へ中進候様我外務卿ヨノ基礎トスル旨御通知有之候迄ハ我政府ニ於テハ條約改正望ノ考案ヲ各訂盟國各政府へ御提出相成之ヲ以テ連合談判以書翰致啓上候然ハ貴國現行稅則重修ニ就テハ貴政府御企

一千八百七十九年七月十五日リ訓令有之候此段及御通牒候敬具

東京英公使館

特命全權公使

ハルリ、ヱス、バークス

(右原文) 外務卿寺島宗則閣下

797

Her Majesty's Legation,

Yedo,

July 15, 1879.

₹.

I have the honour to inform Your Excellency that I have been instructed by Her Majesty's Principal Secretary of State for Foreign Affairs to announce to Your Excellency that Her Majesty's Government decline to enter into any new negotiations for the Revision of the Treaties until after Your Excellency's Government shall have communicated to the Government of the Treaty Powers, as a basis for joint negotiations, the proposals which they—the Japanese Government—wish to make relative to the

amendment or modification of the existing Tariff.

I take this opportunity of renewing to Your Excellency the assurance of my high consideration.

HARRY S. PARKES

H. M. Envoy Extraordinary and Minister Plenipotentiary

His Excellency

Terashima Munenori,
Minister for Foreign Affairs.

三五九 明治士 雲月十八日 寺馬外務卿ョリ

條約改正ニツキ葡萄牙國政府意向問合セノ件

附屬書 右上野公使へ達スル書

上野公使別信案第三號

二月十八日附

被相含霊力可有之候へ談判貴君へ御委任相成候條訓狀及付與候萬先便中進候通へ談判貴君へ御委任相成候條訓狀及付與候萬先便中進候通以別信甲進候條約重修ニ付海關稅權挽回之儀葡萄牙國政府

モ書
郭寫
夕相添示候間為心得各書
翰寫差進候
尚以先便差上候英國政府へ談判委任之訓狀ハ在我公使ニ

寺島外務卿時代 三五九

附屬書

談判候也 岩倉大使一行各國へ派遣可相成ニ付同大使歸朝迄條約改定 ヲ、ド、ソーサ氏へ報知及ヒ同氏ョリ本國政府へ可申遣旨 治四年五月中澤前外務卿瑪港同國長官アントニヲ、セルジ 見込承知致度旨依賴可被致候尤王條約改定之義ニ付テハ明 候ニ付右様之義ハ從來在瑪港同國長官當地駐劄公使ヲ兼任 右之義同公使へ御引合當方之趣旨篤ト貫徹候様精々可被診 延期之義申入旁同國政府へ通報方申遣候事ニ有之候就テハ 同年我七月中回答有之其後同年十月中更ニ拙者ョリ同氏へ 地在留同國公使へ別紙覺書之趣旨ヲ以テ引合葡萄牙政府之 難相成然ルニ貴官ニハ先年同國へ被趣候緣故モ有之ニ付其 ョリ申越候得共未夕國書奉呈無之ニ付同人へ引合候譯ニハ セルヲ以テ同人へ引合來候處現今在同處長官ジョース、マ へハ未夕我公使派遣無之且彼國ヨリモ我國へ公使派出不致 條約改定之義葡萄牙國政府ヘモ英國同樣可中入筈之處同國 リア、ソボダビラモ先前通リ當國派遣公使ヲ兼任候趣同人 條約改正之義葡萄政府問合方ヲ上野公使へ達スル書寫 三級 貼 一流 貼

但シ瑞西國モ右同様之手續ヲ以鮫島公使ヨリ於巴里同國

入候積ニ有之是又爲御心得申入置候也

豊書之體ニ認メ書簡係附我國在留公使兼任之公使等へ申公使、引合候積ニ有之瑞典那威丁抹ノ國々へ照會之義ハ

貼紙二朱書

別紙覺書八明治十一年二月十六日付第二號書簡三添へ西班牙國代

理アルバレースへ送リタル書・同物供ナリ

西班牙代理公使宛覺書ニツイテハ一九〇註參看

十一年二月十八日達

外務卿 寺 島 宗 則

全權公使 上野景範殿

肪紙一朱老

別紙覺書ハ我國在留西班牙公使へ遣ハシタル分ト同文ナリ

界四節 對佛交涉 附對白交涉

三大〇 明治二番月十五日 寿鳥外務卿宛(電信)

訓狀飜譯文中訂正方請訓ノ件

Terashima,

Foreign Affairs,

Tokio.

I find it is indispensable to make some change of form and word in translation of instruction. Authorize me by telegraph to do so.

SAMESHIMA.

一六一 明治士| 西月十六日 | 鮫島駐佛公使宛(電信)

訓狀飜譯文訂正ハ不可能ナル旨回訓ノ件

Sameshima,

Impossible to Change word or form of instruction for treaty revision because it was already communicated to all governments through Ministers here.

TERASHIMA.

二六二 明治十二番月十九日 寺島外務卿宛

條約改正談判開始準備ニ關シ報告ノ件

十一年別信第八號

プ月プロア

本年別信第四號本月七日接到致拜見候

一條約重修:付先般御付與相成候訓狀御國在留佛白兩國公

使へモ書翰寫御示相成候趣致承知候

候趣ニ御座候間此好機會ヲ不失様開談ノ積ニ有之候方ョリ何敷用談ノ筋有之候ハ、承リ可申旨談シ懸ケ有之手續相運候後過日上野公使英國新外務卿へ面接致候節彼一先便機密信第壹號ヲ以甲進候通リ當國幷英政府へ申込ノ

一右事件二付上野公使ハ過日來兩度來巴青木公使王此程來

寺島外務卿時代

三六二三六三

巴ニ付何レモ意見行違ヒ無之様篤ト打合セ置候

會不仕候ノ鑁ヲ受ケ相越申候其後外務卿ハ田舎へ相越居候ニ付面ノ饗ヲ受ケ相越申候其後外務卿ハ田舎へ相越居候ニ付面一下官當國外務卿へ初回ノ面晤ヲ得候後彼方ヨリー度晩食

分致落手候一別紙寫ノ通リ當館ヨリ電信差立尚又其御地ヨリ御差越ノ

右貴答旁申進候敬具

明治十一年四月十九日

特命全權公使 鮫 島 尚 信(印)

外務卿 寺島宗則殿

三六一参看三六一参看、3ニツイテハ三六〇

三六二 明治十一年五月三日 寺鳥外務卿宛

談判開始ノ見込ニ關シ報告ノ件

別信第九號

亦公然開談シ候上ハ注意可致趣ニ有之云々英佛トモ探偵候處佛ハ英ニ於テ同意セハ異存無之樣子英モ

條約重修ノ儀ニ付テハ先日來當外務卿へ面會開談可致積ニ